研修資料

野外生活の知識

はじめに

ボーイスカウト大阪連盟トレーニングチームでは、指導者の定型外訓練（特に野営法研修会）の研修資料ならびに自己研修資料として活用するために、日本連盟から発行されていた月刊誌『スカウト』昭和５８年（１９８３年）６月号から昭和６２年（１９８７年）１２月号までに５２回にわたり連載された「野外生活の知識」（執筆者　故 山田邦夫：野外活動家）を、執筆者のご遺族およびボーイスカウト日本連盟の許可を得て復刻、本冊子を作成いたしました。

時代の変化（四半世紀以上前の執筆）により、内容的に現在では適さないと思われる部分もありますが、研修資料としては現在でも充分通用し活用いただけるものと考え、原文のまま復刻いたしました。なお、読み易さを考慮し、若干レイアウト上の修正および誤植等の訂正を施しました。

平成２２年２月２２日

ボーイスカウトはキャンプをするだけの団体ではありませんが、キャンプなどの野外活動の中で、いろいろなことを感じたり、考えたり、学んだりすることをとても大切にしています。

そこで、野外での生活を安全に、そして能率的で快適なものにするための基本的な方法をお話ししてゆきます。ここでは、ボーイスカウトで必要なことだけでなく、シニアーやローバーになってから行う移動キャンプ、雪中キャンプ、長期キャンプなどで、知っていると便利な知識や技術にも触れてゆきます。さらに、キャンプの背景となる自然にも目を向け、自然保護を第一に考えたキャンプの方法もお話ししてゆくつもりです。

月刊誌『スカウト』昭和５８年６月号　山田邦夫

目　次

テントを選ぶ …… 1
テントの仕様 …… 7
テントの素材 …… 12
防水 …… 17
フライシートとペグ・ハンマー …… 22
ポールとフレーム …… 27
水はけを考える …… 32
テントを張る ① …… 39
テントを張る ② …… 48
テントの調整 …… 59
側溝・土手 …… 63
マーキー …… 78
乾燥 …… 103
点検 …… 124
ドーム型テントのたたみ方 …… 129
テントをたたむ前に …… 137
家型テントのたたみ方 …… 148
テントの収納 …… 158
雨の日にテントを張る …… 163
ザック …… 166
雨具を選ぶ …… 171
衣類 …… 177
寝具を考える …… 180
カマド …… 184
食料を考える …… 188
靴を考える …… 190
刃物 …… 192
携帯品 …… 195
雪中キャンプについて …… 197
【野外生活の知識・・・・連載を終えて】 …… 200

■テントを選ぶ

テントを選ぶときには、これから行おうとするキャンプの、目的、期間、場所、季節、気象条件、人数、キャンパーの経験、体力、年齢など、いろいろな条件を考えに入れる必要があります。それによってテントの大きさ、形、材質、重さなどが決まってくるからです。

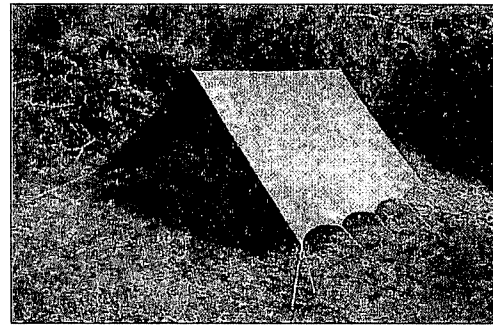
屋根型テント

以前A型テントともいわれていましたが、JIS（日本工業規格）では屋根型といっています。2人用とか、4人用などの小型テントに多くみられます。
軽量を第一に考えて作られているので、居住性はあまりよくありませんが、移動野営には向いています。

これに比べて、居住性がよいのは、家型テントです。JISでは、家型Aと家型Bに分けています。Aの方はウォールの高さが30cmか45cm、Bは15cmとなっています。

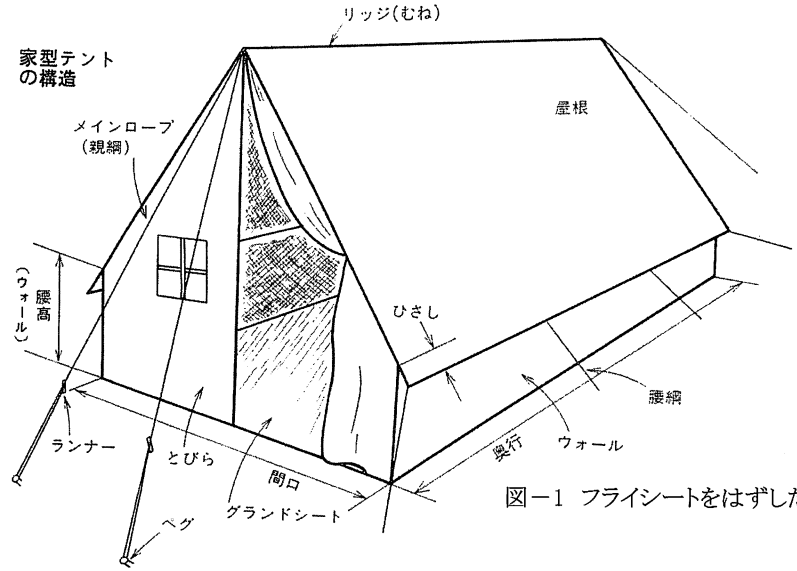
家型テント

家型テントは、ウォールを設けることで、テントの端まで荷物が置けるので、同じ床面積の場合、屋根型より広く使えます。現在もっとも一般的なテントで、どちらかというと大型のものです。このタイプは、テントの張り具合もこまかく調整できるので、シワを出さずにきちんと張れます。

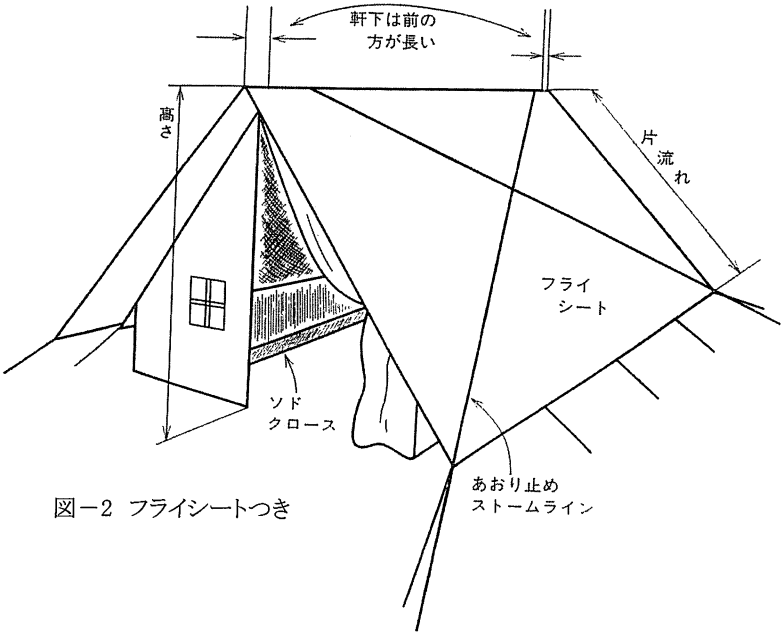


写真－1　家型テント

しかし、屋根型に比べて重く、固定キャンプに向いています。



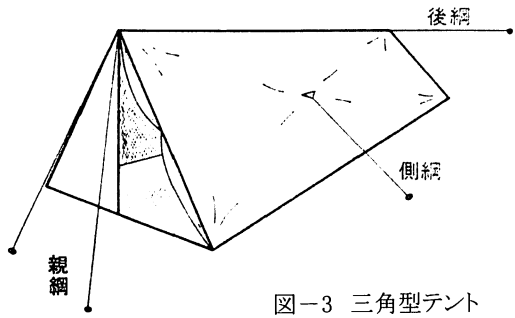
図－1 フライシートをはずした状態



図－2 フライシートつき

三角型テント

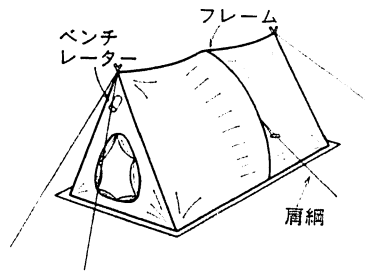
小型テントの中で特に軽さに重きを置いたものが三角型テントです。これは屋根形の一方のポールを短くしたもので、ウォール付きとそうでないものがあります。当然、居住性はよくありませんが、軽量、コンパクトで、移動キャンプ向きです。



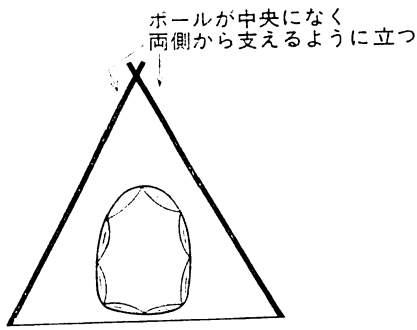
図－3　三角型テント

ウインパー型テント

これは、アルプスのマッターホルンに初登頂したエドワード・ウインパーが考案したテントです。屋根型をしていますが、これはポールが2本ではなく4本で図－5のようにささえています。このウインパー型の中央にフレームを組み込んだものをミード型といいます。風や積雪に強いのですが、居住性はよいといえず、少人数向けといえます。



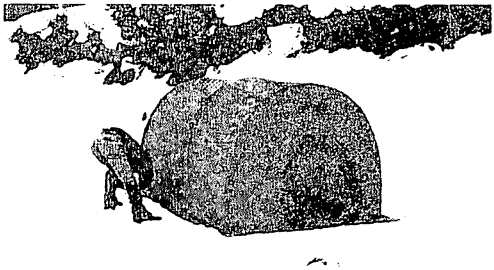
図－4 ミード型テント



図－5 ウインパー型テント

かまぼこ型テント

居住性という点でよいのは、日本で考案されたかまぼこ型テントです。屋根型や家型と違い、弾力性のある塩化ビニールなどのフレームでテントを支えるようになっており、そのためグランドシートからの立ち上がりが、そのまま上へのびています。



写真－2 かまぼこ型テント

居ごこちはすこいへんよく、風や積雪にも強いのですが、重くかさばり、設営、撤営に手間がかかるという点を考えると、多人数の固定キャンプ向きといえます。

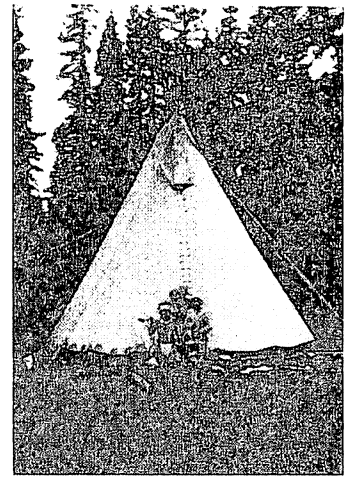
ドーム型テント

さて、かまぼこ型で登場した弾力性のあるフレームを対角線方向に渡して張るテントをドーム型といいます。今日では、3～4人用のテントは、夏冬用ともこの型がふえています（写真は6～7人用）。 この型は本体とグランドシートがぬいつけられ一体になっています。このテントは設営が簡単で、ある程度までなら、どの方向からの風にも強く、またペグなしでも自立するので、張ってからも位置を変えることができます。しかし、夏などは風とおしが悪く、ことに強い雨が続く場合など、本体とフラインートの間がせまいため水がもれることがあるという弱点があります。軽量で風に強いところから、登山、移動キャンプ用ともいえます。

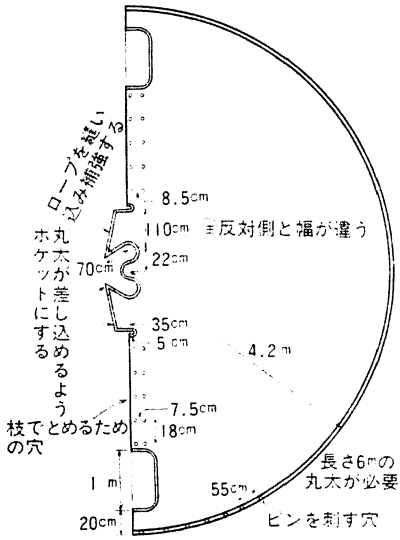
写真－3 ドーム型テント

その他テント

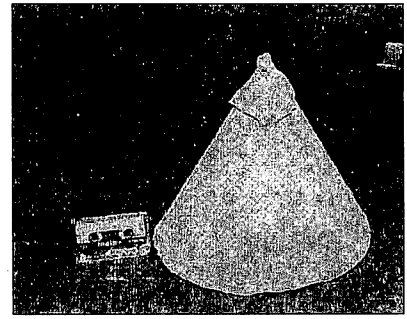
大型テントでは、西部劇でおなじみのインディアンのティーピーがあります。大きいものでは高さ4～5mにもなり、てっぺんに換気口があるので、中で火を焚くことができます。10～12人が寝られますが、7～8mの丸太を12本以上使います。



写真－4 ティーピー



ティーピーの設計図



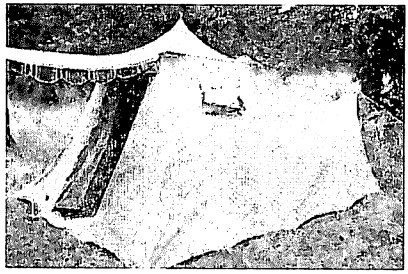
写真－5 ティーピーの 1/10 の模型

そして、オートキャンプによく使われる写真－6、7のようなテント。このテントも高さがあり居住性はよいようですが、重くかさばり、風などに弱いので、ボーイスカウトキャンプには向いていません。

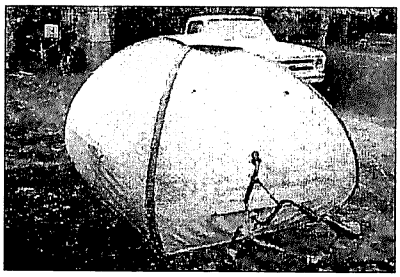
張るめんどうをなくしたテント。金属やグラスファイバーなどのポールやフレームの代わりにゴムのチューブを使って、設営のときにはポンプで空気を入れるだけというものですが、これは重すぎて実用にはなりませんでした。

最も軽くコンパクトなのは、ツェルトです。居住性や耐候性よりも、とにかく軽量であることと考えて作られています。写真－9のものは、重さがわずか550gで1～2人用です。1泊ハイク程度に向いています。

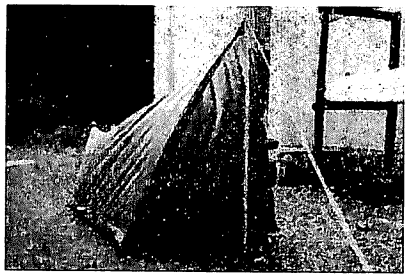
写真－6　オートキャンプ用テント



写真－7　オートキャンプに便利なテント



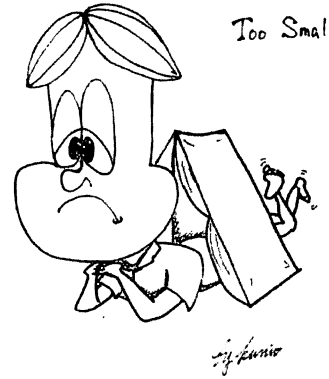
写真－8　空気を入れるだけのテント



写真－9　ツェルト

■テントの仕様

大きさ

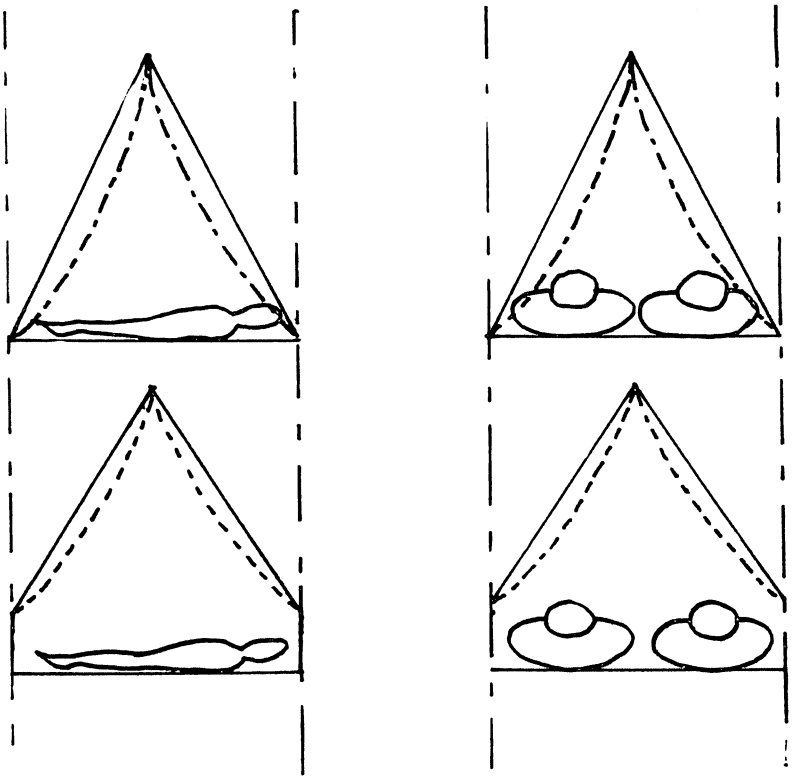


テントの大きさというのは、JIS規格では長さ180cm幅45cmを1人分としています。人間は寝ているときは全身に力が入っていません。つま先ものびます。ちょうど背のびをしているようになるわけです。身長170cmの人は寝ているときは190cmの身長になり、それに頭と足に寝袋がカバーされるのですから200cm、雨のときにテントに触れないようにするなら210cmは必要になります。とても180cmではすみません。横幅も、例えば私は、身長168cm体重56kgですが、それでも肩幅50cm。これも同じく寝袋でおおわれることを考えれば60cmは必要です。このJIS規格は人間に合わせているのではなく、実は材料の布地の織り幅が90cmを少し越える程度の長さなので、それに合わせているわけです。ですから選ぶときには、4〜5人用となっても夏使うなら4人、冬なら3人用と考えなければなりません。

形　状	ウォール	収容人員	高さ	間口	奥行
家　形	高	5人	166	182	227
		6人	182	182	273
		8人	182	227	273
	低	4人	136	182	182
		5人	151	182	227
		6人	166	182	273
屋根形		3人	136	151	182
		4人	136	182	182
		5人	151	182	227

表－1

さらに形をよく選んでください。図－1にも書かれているように屋根形と家形では同じ床面積でも実際に有効な生活空間というのはこんなにも違います。それに屋根形は腰綱がなく紬かい調整ができないので、雨のときに雨水の重さで屋根が大きくたるむことがあります。軽いテントも魅力ですが、キャンプ地の気象条件、期間などをよく考えて選んでください。



図－1

ボーイスカウトの班は、普通は6～8人で構成されています。パトロールシステムの性格上、文字どおり寝食をともにできるような大きなテント1張を、班で使用することが多いのです。今日ではキャンプ地へはテントや装備を積みこんだ貸し切りバスで行ったり、また電車を利用する場合でも隊備品、班備品

はトラックで別に運んだりといったことも珍しくありません。テントの大きさや重さは問題にはされないようです。

1つの考え方として、大きなテントはそれだけ風の影響を受けやすく、また、屋根の面積が大きいため深くて大きなミゾが必要であることを考慮しなければなりません。草地にテントを張れば、テントの面積だけ草がいたみますが、もし2つに分けて小さいテントを張れば、たとえ、影響を与える総面積は同じでも、後で、元どおりの草地にもどるのに要する期間はずっと少なくてすみます。

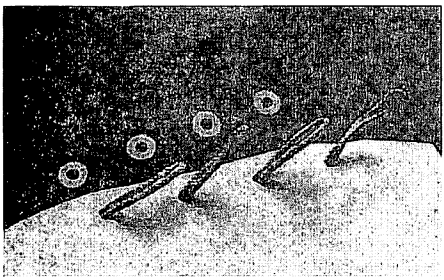
以前は自然保護というものは、今日ほどにはいわれませんでした。ゴミは焼いてから穴を掘って埋め、トイレもりっぱなものを作り、小便などはテントサイトのかたわらに専用のものをつくってすませていました。しかし、今日のようにキャンパーが増えてきている以上、自然保護を無視することはできなくなりました。自分たちがキャンプに行って穴を掘ったらゴミが出てきたり、小便臭かったのでは笑い話しにもなりません。ゴミが土の中で腐って吸収されるよりも、次のキャンパーが来て穴を掘りかえすサイクルの方がはるかに早くなっています。

以前は問題にもならなかったことが、今では犯罪行為と同じになってしまうこともあるのです。だからといって今ある隊の8人用のテントを次回から持って行かないで4人用を2つ持って行きなさいというのではありません。テントを選ぶときには使う人の人数、経験、体力、年齢を考えて決定しなければならないということです。今年はじめてキャンプをするスカウトもいます。体力が十分にないスカウトもいます。もちろん何度もやっているスカウトもいますが、みんなのことを考えれば班員が一つのテントで寝るのが一番良いのではないかと思います。ただ、頭のどこかに「これは、まわりの草花のためにはあまり良くないことなんだな」と覚えておいてください。今はそれで十分です。

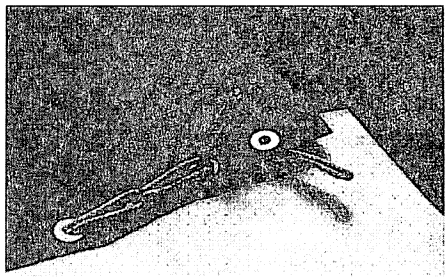
「われわれは歴史上の転回点に到達した。いまやわれわれは、世界中で環境への影響にいっそうの思慮深い注意を払いながら行動を起こさなければならない」(国連人間環境宣言前文より)

入 口

入口というとチャックがあります。チャックは歯の大きいものの方が砂や泥などをかみにくく、また、テントの布地や防虫用のネットを食い込んでもはずしやすいのです。コイルジッパーは見ばえが良いのですが歯が細かいので避けた方が無難です。



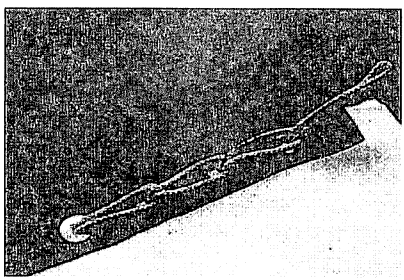
写真－1 ラッキング



写真－2 ループの部分に掛けていきます

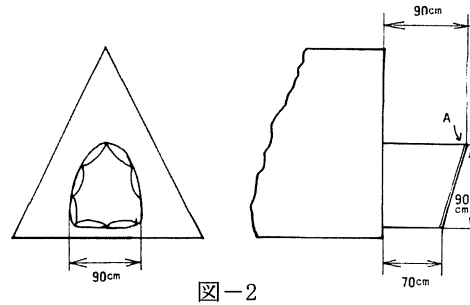
チャックにはふつう金属のものとプラスチックのものが出まわっていますが、金属は冬や春秋の寒いときなど霜や雪が凍りつく危険があります。今ではあまり見られなくなりましたが、ひもを掛けていくラッキングというものは閉じるわずらわしさ、かさばり、防虫が不完全であるという欠点はありますが、開けるときはチャックよりも速いし故障が少なく、また故障しても簡単に修理ができるなどと利点も多く便利なものです。

長期間便うときはチャックとラッキングの両方が付いているとよいですね。（写真－1、2、3参照）



写真－3 ラッキング

冬用のテントでは絞りこみ式の入口がよく便われます。これは図－2のAの所に付いているドロー・コードを引いて入口を閉じ、さらに余った布をねじり止めます。これですき間は完全に防げますし、凍りついて開かなくなる心配がないなど冬季の野営には適しています。

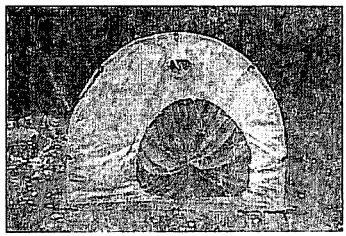


図－2

また、入口の布に十分余裕があるため、雪が降っているときなどは頭や身をスッポリとくるみ、靴ひもをしばることもできて便利です。

写真－4

しかし、このスタイルには非常のときに開けるのに時間がかかるという致命的な欠点があります。（写真－4、5、6参照）


写真－5 ドローコードを引いたあとネジこんでしばります

写真－6 雪が降っているときは体を包んだまま靴ヒモがしばれます

色

登山用のテントなどは赤とか黄色とかハデな色が多く出まわっています。黄色やオレンジ色などの明るい色は、昼間テントの中にいると目がチカチカと痛くなってきます。また紺色や濃い緑色は冬でも天気のよい日は暑くなってしまいます。ワサビ色（薄い黄緑色）などが望ましいと思います。

■テントの素材

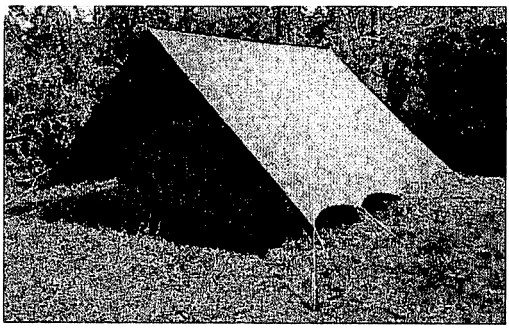
大きく分けて、天然繊維と化学繊維の2種類があります。

綿（木綿）

丈夫で耐摩性に優れ、熱に強いというのが綿のテントのセールス・ポイントでした。

しかし、化学繊維の出現によって、熱に強いという長所だけを残し、あとは化学繊維にお株を奪われてしまいました。今では重く乾きにくい、などという理由から、すっかり影をひそめてしまいました。

ビニロン



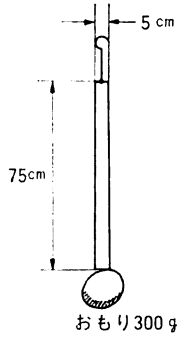
写真－1　6～8 人用のテントはビニロンが多い

国産技術によって開発されたポリビニルアルコール系の繊維で、綿に近い性質で強度が大きく、耐摩性に富んでいて、しかも軽く、湿度による伸び縮みがほとんどありません。通気性（空気を通す能力）の良いわりに耐水性（どのくらいの圧力の水を防げるかということ。くわしくは後載）があります。しかし、化学繊維のなかでは吸湿性が大きく、乾燥するのに時間がかかり、また、ナイロンやポリエステルよりも雪が付着しやすいという短所があります。

ナイロン

ナイロンというと、薄い女性用ストッキングを思い出し、大変弱く感じますが、綿などよりも引っ張り、折り曲げなどに強いのです。しかも吸水性も少なく濡れてもすぐに乾き、また、薬品やカビに強いという特長をもっています。しかし日光により変色し、長期間の使用によって強さが減退することと、荷重がかかっ

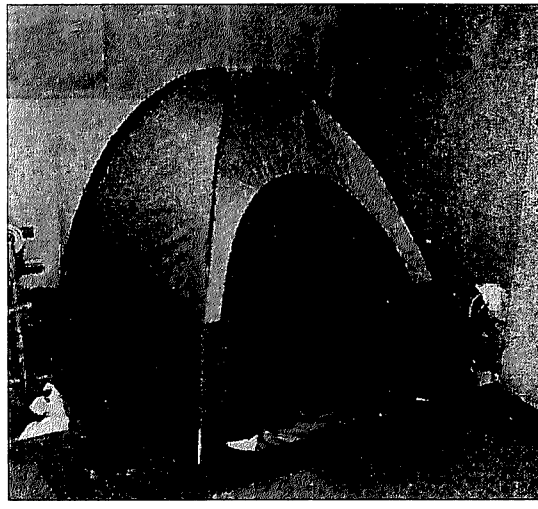
たり、雨に濡れると伸びるという短所があります。私の行った実験でも、わずか長さ75cmの間で1.5cmも伸びました。1.5cmというと少なく感じられるでしょうが、これが三角形のテントの中にいると左右から重く垂れ下がり、テントの内部をうっとうしいほど狭くしてしまいます。テントの素材として考えると、伸びたり縮んだりしやすいことからテント本体にたわみがでたり、布部分がポールやフレームの寸法と合わなくなることがあります。特にドーム型ではこの点が大きな問題といえます。



テント布地の伸び実験

素材	長さ	参考
ナイロン	15mm	(注)水分により伸びる
ビニロン	0mm	
綿	22mm	(注)水分により縮む

図－1



写真－2　ナイロンは軽くて良いが雨などで伸びやすい

ポリエステル（テトロンとかダクロンはポリエステルの商品名）

ナイロンに近い性質ですが耐紫外線、引っ張り強度、寸法の安定性のいずれもポリエステルの方が優れています。ポリエステルの欠点は、ナイロンに比べるとやや重く値段も高いことです。

ゴアテックス

この素材は通気性があり、しかも防水性もあるという、今までの常識では考えられない相反する特性を両方とも持っているという布地です。この布地については、雨具のところでくわしくその長所短所をお話しすることにして、高さが1m以上のテントでは、内部に水滴が付着することがあり、この素材本来の効果があまり期待できないことから、どのメーカーでも大型のテントはつくっておらず、1～2人用の小型テントだけが主流となっています。

今までお話ししたような欠点をカバーするために、メーカーはいろいろと工夫して製品を作っています。特にナイロンなどは研究が盛んです。 次にいろいろな布の織り方についてお話ししていきます。テントを選ぶときのめやすにもなりますから、これも覚えてしまいましょう。

表－1

	綿	ビニロン	ナイロン	ポリエステル
乾強度 (g/デニール)	3.0～4.9g	4.0～6.5g	4.8～6.4g	4.7～6.5g
湿強度 (g/デニール)	3.3～6.4g	3.2～5.2g	4.2～5.9g	4.7～6.5g
耐候性	やや弱	強	やや強	強

デニール＝糸の太さの単位
乾強度＝20℃湿度65％での値
湿強度＝水中での値
耐候性＝日光や年月の影響

織り方

・タフタ(平織り)

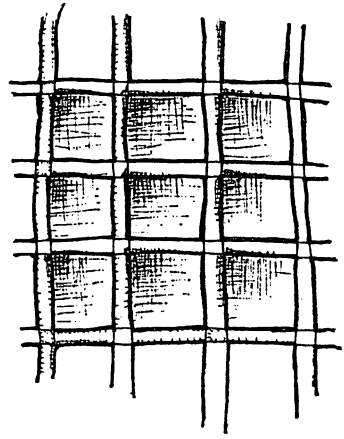
これは、ごく普通の織り方で縦糸と横糸を交互に網の目のように織られています。

・ツイル(綾織り)

縦横に加えてななめにも糸を織り込んだのがツイルです。学生服など見ると斜めに大きく織られているのでよくわかります。タフタよりも20%程度重くなりますが、強度があり、テントではグランドシートによく使われています。

・リップストップ

タフタよりさらに通気性を向上させようと細い糸で織られ、裏がすけて見えるほど薄くなっています。その分、弱くなった強度を補うために6mごとに補強用の太糸を織りこんであります。ちょっと見ると小さなチェックの柄のように見えます。この布地は、通気性の良さを生かしてドーム型テントの本体上部などによく使用されていますが、そのようなテントではフライシートが必需品です。

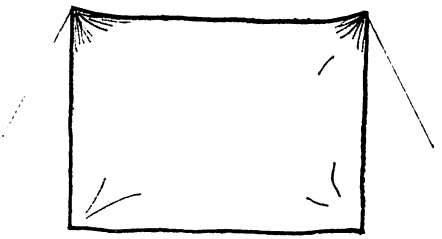


図－2 リップストップ

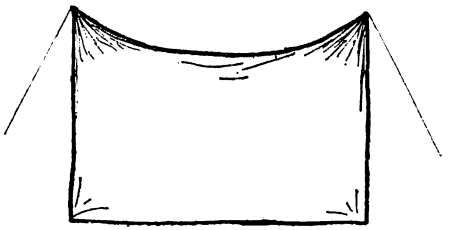
テントに使う布地として、以上のことを考え合わせれば、6～8人用の固定キャンプ用テントはビニロンが適していて、2～6人用のテントはナイロンとポリエステルが良いようです。化学繊維は、一般に長い間には縮んでいくので、何年も前に買ったテントなどではポールに合わなくなっていることがあります。キャンプに行く前に調べ、適当に削っておきましょう。

[カテナリーカット]

ナイロンの布地の欠点をカバーする手段として、一部の2～4人用のテントに試みられています。普通のテントはどんなに親綱を張ってもリッジの部分がたわむのです。さらに雨が降るともっとたわみ、全体にシワができてしまうのですが、このことを考えにいれて、テントの材料の布を裁断することが行われています。これをカテナリー(懸垂線)カットといいます。つまり、リッジの部分を直線ではなく、つり橋のロープのようにアーチ形にカットしてあるのです。これで今までのものよりも雨などによってナイロンが伸びてできるシワが少なくなるのです。欠点はもちろん、テントの中が狭くなることです。その分を考えてポールが高くなっています。カタログを見るときはそのことも考えなくてはなりませんが、小型の家型、屋根型、三角型テントなどに続々と利用されていくことでしょう。



図－3　普通のテント



図－4　カテナリーカット

参考文献:「世界大百科事典」／「登山技術」山と渓谷社

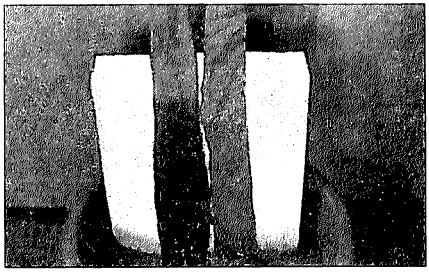
■防　水

われわれキャンパーにとってテントなどにどのような防水が施されているのか気になるところです。まず防水には2種類あります。

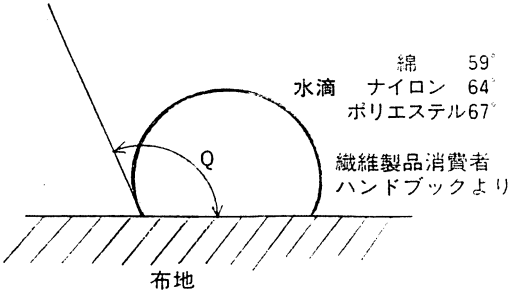
はつ水性（揆水性と書く、別名通気性）防水

テント本体は人間が中で宿泊をする関係上、このはっ水性防水しか使用されていません。シリコン・オイルを用いその水を弾く性質を利用して生地の通気性（空気がぬけていくこと）を生かしたまま防水する方法です。つまり織ったままの生地は水が簡単に漏ってしまいますので、繊維に水を弾く薬を染み込ませるわけです。シリコン・オイルは水のようにサラサラとした液体ですので、繊維に染み込むだけでビニールやゴムのように被膜をつくって通気性をなくしてしまうわけではありません。1本1本の繊維は独立したままですから空気は通りぬけていきます。見ただけでは防水を施されているのかどうか解りませんが、束ねられた繊維の糸と糸の間にお互いの薬が利いているので雨を弾きます。雨は布地を通過することができずにキャベツの葉の上の水のようにまるい玉のようになって、コロコロところがっていきます。ですから防水効果があり、しかも通気性もあるわけです。（雨具でご承知のように、それほど性能は良くありません。）

水を張った洗面器に手ぬぐいとウインドブレーカーの切れ端を浸してみると、手ぬぐいの方は、毛細管現象で水が上の方に上っていきますが、防水されたウインドブレーカー（布地）の方は上っていきません。水が弾かれ毛細管現象がおこらないからです。



写真－1　左側のはっ水防水を施していない布地は水を吸い上げます。



図－1

この性能の値は接触角のθの大小によって表わされています。この値が大きいほど、はっ水性が大きいのです。

耐久性はっ水剤は、織物に付着させたあとで、130℃～180℃熱処理を施し、洗濯ぐらいではとれない、しっかりした被膜を糸の表面に作ります。

軽くて通気性もあるためテント向きですが、完全に布地の目をつぶしているわけではないので、新品でも長い時間強い雨にうたれたり、長い期間使用していると、はっ水性能が低下し、雨が漏りやすくなります。そこで、ときどき防水をかけなおさなくてはなりません。

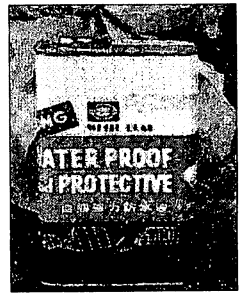
コーティング（密封性）防水

これは樹指で完全に布地の目をつぶしてしまう防水方法です。最近の大型テント（ジャンボリーテントなど）のグランドシートの地面に接する面や、ソドクロスなどに施されているあのビニールのようなものがこれです。

樹脂にはアクリル系樹脂とウレタン系樹脂があります。アクリル系樹脂は気温が低くなると硬くなりやすく、折り目の部分ではヒビが入ったりしてあまり長持ちはしません。ウレタンのほうにはこれらの欠点はなく、光、熱などにも強く、長持ちします。両方とも重くかさばるなど、小型のテントにはむかないようです。

これらのものと比べて軽くかさばらないものに米国デュポン社が開発したポリエチレン系合成ゴムハイパロンがあります。

-30℃～+150℃までの使用に耐えられますが、高価なために雨具やザックカバーに使用されている程度です。



写真－2(左上)　ハイパロンのザックカバー

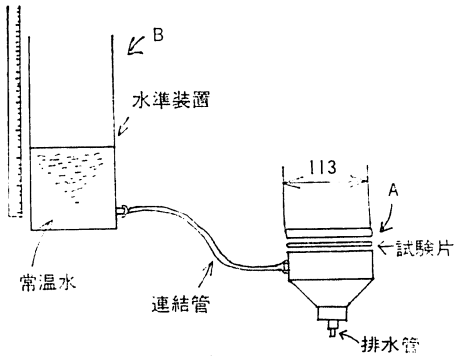
写真－3(中央上)　市販されている防水スプレー

写真－4(右上)　市販されているはっ水性防水液

耐水性

耐水性というのは、水の圧力にどのぐらいまで耐えられるかというテストで、通気性のある繊維についてのみ試験されます。テントの布地には大切なテストです。

図－2のようにセットした試験器に試験片を付け、Bに水をどんどん足していきます。



図－2

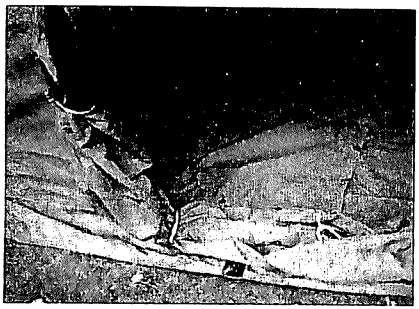
すると水の圧力がAの試験片に加わり、やがて水がにじみ出ます。試験片の3か所から水が出た時のBの高さを測ります。現在のJISの規格では夏用テントで耐水度40cm以上、冬用テントで30cm以上となっています。しかし、この数値は新品に対する結果であり、また、時間にしても5分程度のことです。これは、あくまでも実験室でのデータですから、やはり雨の日にはテントの本体に体や荷物が接しないように気をつけましょう。

グランドシート

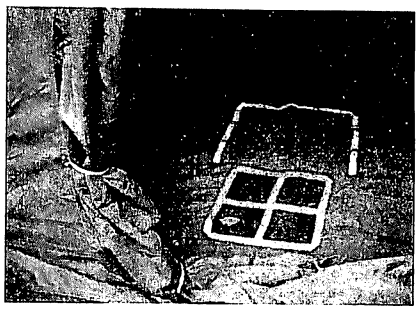
これらはフライと違い、大型テントではシートの地面に接する部分に樹脂加工したものが出まわっています。以前、小型のテントでキャンプしたとき、グランドシートの代わりにビニールのポンチョを利用したことがありますが、ショートパンツと半そでシャツといういでたちでテント内にいると、ポンチョがペタペタと体にまつわりつき、グランドシートも通気性もしくは吸湿性も、ある程度は必要なものだと痛感したものです。底面だけに樹脂加工してあるシートは、上面はビニロン地そのままですので、まつわり付く心配はありません。

ドーム型・かまぼこ型のテントでは、その形体上グランドシートの布地を選ぶことができません。ドーム型ではナィロンツィルのグランドシートが多いのですが、ナイロンタフタになると薄すぎて地面の感触が直接伝わってきますし、擦れてすぐに穴があいてしまうのではないかと不安です。やはりツイルなどの厚手のものが望ましいでしょう。ただ、いずれにしてもナイロンは滑りやすいという欠点があり寝袋の布地もナイロンのものがほとんどであるため、傾斜地でのキャンプでは寝返りをうつたびにズルズルと低い方に下がってしまうことになります。

冬用のテントでは、グランドシートにゴミ捨用の穴をあけてあるものがあります。冬用のテントではグランドシートが本体に縫い込まれ、また入口が割合高い位置にふきながし状に付いているので、寝袋からとび出した羽毛や一度入った雪は外に出しにくいことからあけられたものです。



写真－5　ゴミ穴（閉じたところ）

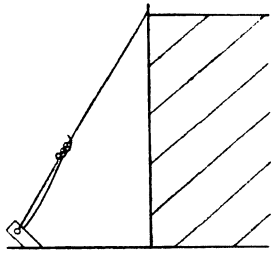


写真－6　ゴミ穴（開いたところ）

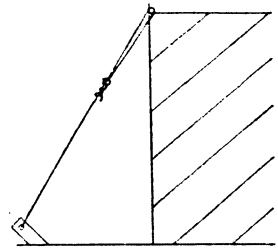
張り綱

テントの付属品として縫い込まれている場合がほとんどで、気に入らないからといって取り加えられないことが多いようです。値段の関係からかビニロン(クレモナ)が多く使われているようですが、乾きやすさを重視して、ナイロンにしてほしいと思います。雨の翌日の撤営で、いつまでも乾かないのがこのロープとハトメ、D環を付けているテープです。ふつう張り綱や親づなでは、図－3のように調整するすこめのループが下部にくるものが多いようです。しかし、雪中キャンプでは雪に埋もれて凍り付くことがありますので、図－4のようにループを上部にもっていくほうがよいでしょう。

張り綱に必ず付いているのがランナーです。現在木製のものはほとんど姿を消し、金属製になっていますが、カビがはえる、かさばる、乾きにくいという欠点があるとはいうものの、金属のものより木製のものを使ったほうがロープはいたみにくいのです。



図－3



図－4

■フライシートとペグ・ハンマー

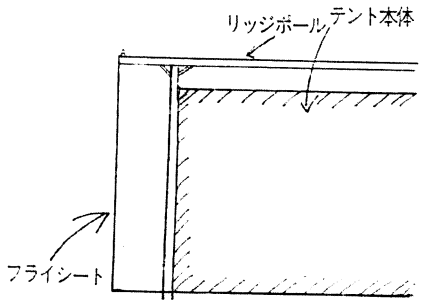
フライシート

テント本体に使用する布地はその目的上、十分な通気性を必要とします。しかし、通気性を残したはっ水性防水では、新品のテントでも長時間、あるいは横なぐりの強い雨に打たれると雨漏りがしてきます。この問題を解決してくれるのがテントフライです。

テントフライは本体とは違って通気性をまったく必要としません。しかし市販されているものではほとんどがテント本体と同じ布地、同じ防水法を使用しています。これは雨や夜露による伸びや縮み方が布地や加工法によって違ってくるのでフライと本体を別な布地で組むと不都合なことが多くなるからです。

本体と同じ布地でテントフライを作ったとしても、そこからの雨漏りは多くて4～5か所ほどでしょうから、このテント本体の方で問題なく防いでくれるというわけです。

今では、テント本体をつり下げるリッジポールも一般的になっていますが、これがないとテントフライとテント本体の棟の部分が接触し、雨漏りの原因となります。



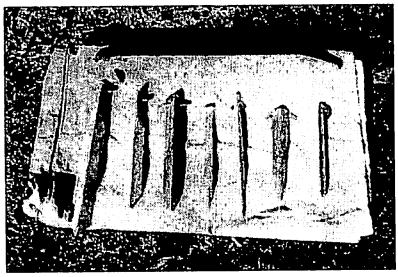
図－1

テントフライは雨の吹き込みを考えて、靴を出しておいてもぬれない程度のスペース(30～50cm)が、テントの前と後ろにあるものが望ましいですね。そうすればテント本体のぬれる面積も少なくなります。雨の日でも、テントの外で靴をはいたり、雨具を着たりするわけですから、このヒサシが十分にあるのとないのでは大きな違いがあります。

フライシートは雨漏りを防ぐだけではなく、炎天下の直射日光をさえぎって涼気を作りだしてくれます。日本の夏は雨が多く、湿度も高いので一度服などをぬらすと、いつまでも乾きません。そういうわけで、テントフライは固定キャンプはもちろんのこと移動キャンプも長期間の場合はぜひともとりつけたいものです。

ペ グ

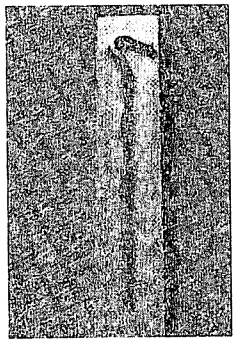
材質で分けると木製、金属、プラスチック製があります。



写真－1 いろいろな種類のペグ

・木製

木製ペグは今ではかえりみられなくなってしまいました。地面へ打ち込んだときのなじみは一番よいのですが、折れる、腐る(カビがはえる)、かさばる、使用後も水で洗ったり乾燥させたりと手間がかかるなど、欠点の方が目立ってしまいます。



写真－2 全体にねじられているペグ

写真－3 上・木製ペグ
下・金属ペグの断面

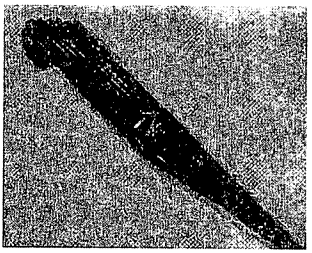
・金属製

6～8人用以上のテントではまず金属ペグが使われます。重い、曲がる、サビるなどの欠点もありますが、折れない、腐らない、保管が楽であると利点も多いのです。

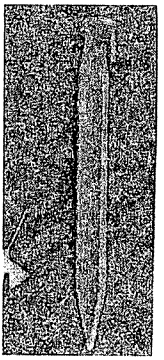
断面がL型をしているものがほとんどですが、四角柱でねじってあるものもあります。これは抜けにくいように、ということなのでしょうが、有難迷惑といえます。というのは、打ちこんでいくうちにクルクルと回ってしまい、張り綱を引っ掛るためのアゴが反対側を向いてしまうことがあるからです。

・プラスチック製

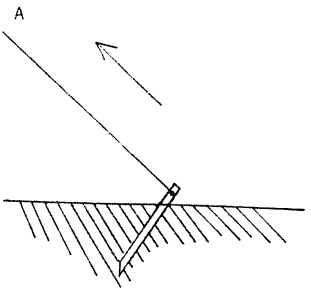
6人用以下のテントでしだいに普及しはじめています。軽い、曲がらない、腐らない、サビない、使用後も水洗いだけですむなど、利点が多いようです。欠点といえば、ほとんどの金属製のペグの断面がL型で、袋につめたりするときにもコンパクトにおさまるのに対し、プラスチック製ペグの断面はほとんどが三角（一部にH型をしたものがある）で、かさばってしまうことです。以前にペグの緊張保持試験をしたことがあります。図－2のように、A方向に引いた場合何kgで抜けるかというテストです。同じ土質でしか試験していないので簡単に結論は出せませんが、今までのデータでは、長さや幅が同じであれば、断面積の大きい方が保持する能力が高いようです。この点を考えると、プラスチックペグのかさばりも一概に欠点とはいえなくなります。



写真－4
L字型ペグはコンパクトに収納できます



写真－5
プラスチックペグ



図－2

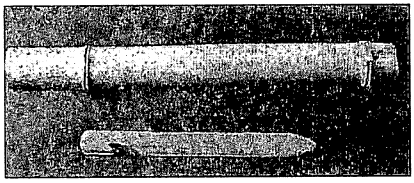
ただ現在のところでは、まだプラスチック自体の強度に不安が残るといわざるを得ません。

石を含んだ地面にプラスチックペグを打つときには、少しでも何かに当たると不安になって引き抜き、打ち直してしまいます。金属製ならばかまわずたいていれば、たいていはペグの方が逸れていきます。もともと金属ペグは断面積が小さいので当たる確率は極めて少ないのです。

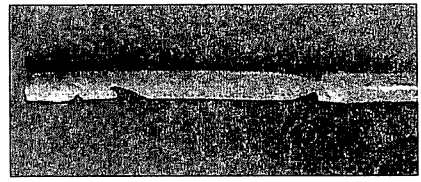
これから先、科学が進歩して鉄よりも強度があるプラスチックが発明されるかもしれません。もっとも鉄よりも強く、プラスチックよりも軽いというまったく新しい素材ができるかもしれませんね。

竹ペグ

軽くて、かさばらず、使い捨てもできる竹ペダを作ってみましょう。材料には直径5cmほどの肉厚の竹を用意します。竹を上から4分の1に割ります。そのまま写真のように削っていってください。竹はささくれができやすいので注意しましょう。先に角の面とりをしておくと、ある程度ささくれを防ぐことができます。工具はナイフ一本で十分です。

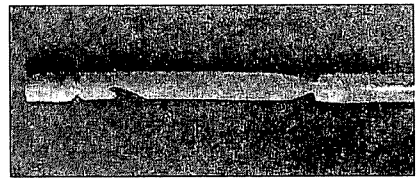


写真－6　直径 5cm ほどの竹を用意する



写真－7　まず先からけずる

写真－8　ササくれて手をケガしないように気を付ける

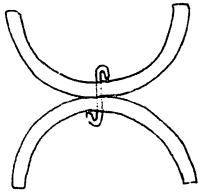


写真－9　張り綱の引っ掛かるアゴをうまくけずるのがコツ

雪中キャンプ用ペグ

雪中キャンプなどに有効なペグです。これは市販されていませんので、自分であらかじめ作っておきましょう。

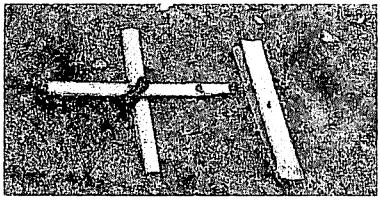
長さ20cm、直径5cmぐらいの竹を4分の1に割り、中央にドリルで穴をあけて太めの針金を使って楽に動く程度に止めます。折りたためるように止めます。



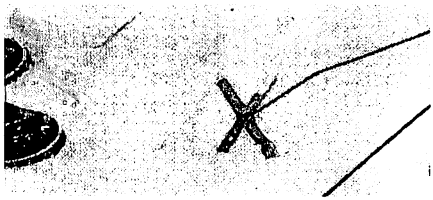
図－3

1つのテントに対しても2、3種類のペグを用意し、目的地の土質などに合わせて持って行く方がよいでしょう。砂地などの軟らかい所でキャンプをするときには、長めのペグ、雪が積もっているようだったら雪中用竹ペグというぐあいです。

しかし、石だらけの河原ではペダはまったく役に立ちません。この場合は、石でロープを押えるようにします。



写真－10　折りたためるように作る



写真－11　30cm～40cm の深さに埋める

ハンマー

大きく分けると木づちと金づちがあります。木材にはカシ、ケヤキ、鉄材では軟鋼、鋼、などが使われ鋼のものは焼き入れしてあります。

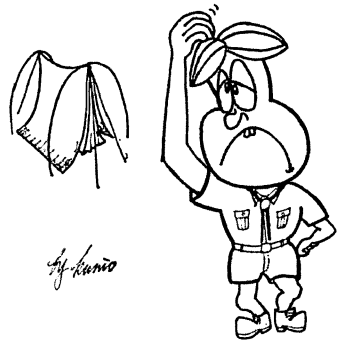
基本的には木製のペグを打つときには木づちを、金属製のペグを打つときは金づちが使われますが、3～4人用のテントなどではペグが金属でも付属品のハンマーはほとんどが木製です。3～4人用のテントのペグや6～8人用のピンなどは木づちで十分です。むしろ力まかせに金づちで打ち、本の根にペグを刺してしまったりするよりは、木づちで軽くたたいて打ちこんでいく方がよいといえるでしょう。ただ最近の6～8人用の大型テント（ジャンボリーテントぐらいの大きさ）のペグになると金属性の重いハンマーでなければ、とても打ちこむことがきないでしょう。木づちがいたんでしまいます。

移動キャンプになると少しでも荷物を軽くするために木づちなどもって行かないとが多いものです。そのようなときは場所を選び、手を使って押しこめば入るほどの土質にテントを立てるのが一番です。さもなければ石、倒木などの利用、最後の手段として靴でペグを打つなどと方法はいくらでもあります。

写真－12　金づち、木づち

■ポールとフレーム

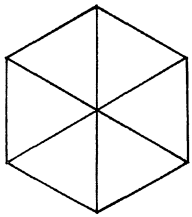
家型や三角型テントで使用しているものをポール、ドーム型、かまぼこ型に使われているものをフレームと区別しています。



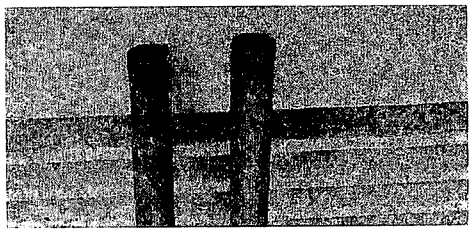
ポール

木製ポールは外径24mm以上のサクラ、ナラなどの堅い木の丸棒か、合竹といって熱に強く長期間劣化しない合成樹脂で三角形の竹を図1のように六角形に合わせ、接着したものを使います。金属では、アルミニューム合金管の場合は外径20mm以上肉厚は1.2mm以上のものか、硬質ジュラルミンの直径20mm～22mmのものがあります。4～5人用のテントでは、ほとんどがアルミニュームを使っています。

鋼管は正しくは一般構造用炭素鋼鋼管という長い名前がついています。外径15.9mm以上、肉厚1.2mm以上でメッキ仕上げのものを用います。6人用以上の大型テントでは、ほとんどがこの鋼管を使用してます。



図－1



写真－1　一般構造用炭素鋼鉄管

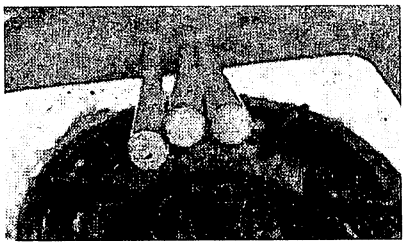
ポールが丸棒ではなくパイプになっているものは、同じ重さならパイプの方が丸棒より5倍も強度があり、同じ強度なら重さは1/3で済みます。本だなや机などの構造材とし断面がL型アングルやコの字型のチャンネルなどが使われていますが、これらの構造材は一定方向の力には有効であってもテントのポールのようにあらゆる方向の曲げ荷重がかかるものには適していません。

フレーム

フレームは1本の構成が奇数継ぎになっており、5本継ぎや7本継ぎがあります。

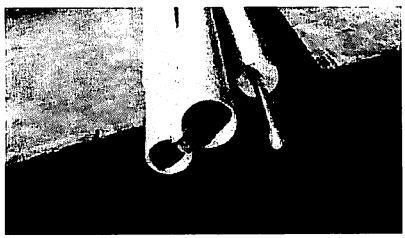
金属製では硬質ジュラルミンの直径20mm～22mmのものがあります。また、合成樹脂ではグラスファイバーとカーボンファイバーのフレームがあり、直径6mm～12mmまで各種そろっています。これらのフレームには中空(パイプ状)と丸棒がありますが、中空のものの方が軽く、中にゴムひもが通してあり、簡単に継ぎ合せられるので便利です。これがないと設営するときにはずれやすく、こっちではずれたのを継ぎ直すと、むこうではずれ、むこうを直すとますここちらという具合でイライラするばかりで、すこしも仕事がはかどりません。選ぶときは中空でゴムヒモ入りを確かめましょう。

一部のかまぼこ型のテントには硬質塩化ビニール管(水道管に使われる塩ビのパイプ)を使用しているものがあります。このパイプはがっしりとしていますが、弾力性がありすぎて設営するのに少々苦労します。また、重いこともあって、あまりすすめられません。

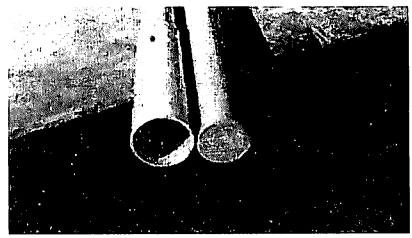


写真－2　中空構造でないフレーム

写真－3　むりな力がかかると
こんなことも



写真－4　セルフエレクティング



写真－5　塩ビのフレーム

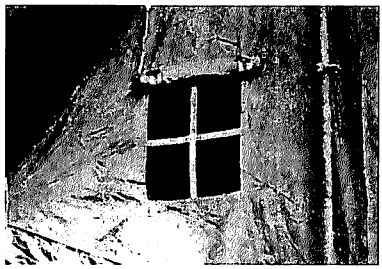
窓とベンチレーター

キャンプ中に「使いそうで使わないもの」というとスプーンセットのナイフ、ポケットナイフに付いているコルク抜き、テントの窓があります。

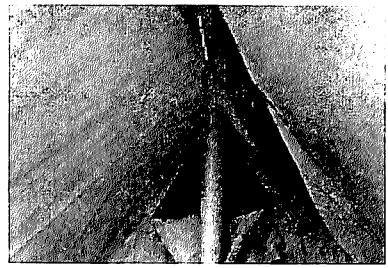
テントの窓、ちょっと考えると使っているようで、実は使っていないのではありませんか？　私はキャンプをはじめて15年になりますが、今まで1度も意識して開けたり閉じたりしたことはありません。テントをたたむときに開いていたら閉じる程度です。一般家庭の窓と違い、開けて新せんな空気を入れるというわけでもなく、さりとて明かりの取り入れ口でもありません。換気というならベンチレーターの方が位置から考えて理想的です。

夏用の6～8人用テントなら付いています。これにもフタが付いているものがありますが必要ないと思います。

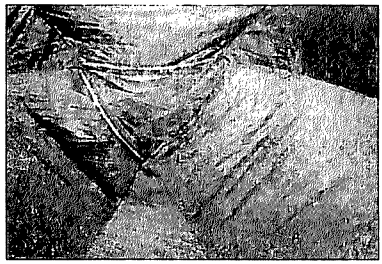
冬用テントには円筒形のベンチレーターが必ず付いています。冬用のテントは本体とグランドシートが1つに縫着され、入口もふきながし状になっているすこめほとんどすき間風が入ってきません。そこで換気は非常に大切なことになってくるのです。円筒形になっているのは雪が付着しないためと直接風が吹きこんでこないようにするためです。



写真－6　窓



写真－7　開きっぱなしのベンチレーター



写真－8　ドームテントのベンチレーター

写真－9　冬用テントのベンチレーター

収納袋

テントの収納袋というとテント本体の布地と同じくビニロンやナイロンが使われていますが、やはり完全防水の樹脂加工や軽いハイパロン加工のものの方が良いと思います。

ペグ袋は6人用テントぐらいまでなら問題はありませんが、大型テントになるとペグの重さだけで15kgもあるので、すぐに穴があいたりほころんだりしてしまいます。このような大型テントのペグ袋は、内側に厚手のゴム引きを施すなり、あるいは単にL形アングルの鋼材に少し手を加えただけのペグではなく、重ね合わせて収納できるような形につくり、プラスチックなどの収納箱を用意するとか、もう一工夫してほしいものです。

内張り

みなさんは春早くや秋遅くにキャンプをしたことがありますか。もちろん地方によっても違いますが、朝寒くて目がさめてしまい、外を見まわすと霜で一面白くなっているというような時期です。そんな季節のキャンプでは夜、注意して見てみますと、雨も降っていないのにテントの内側がベトベトしていることがあります。これは外気が冷たいのに対し、テント内はみんなの体温や吐き出す息によって暖められて露ができたのです。このようなことを難しい言葉で結露といいます。真冬に窓ガラスがくもるのと同じことです。露をテント内に付着させないようにするのが内張りです。これをテントの内側にテント本体と1.5cmの空間を保つように張ります。その空間が別の空気の層となります。これで外気、内張りとテント本体の間の空気、テント内の空気、の3つの層ができ、外気とテント内の著しい温度差を緩和させてくれるのです。

内張りの布地には綿ブロード、キャラコ、ナイロンタフタなどがありますが、綿プロードとキャラコは吸湿性があり、人間の吐き出す息にふくまれる湿気なども吸います。しかしそれだけに濡れやすく、また汚れやすいのが欠点といえるでしょう。ナイロンタフタは汚れにくいのですが吸湿性がないために、非常に寒い地域では、テント内での炊事などの水蒸気が上部で結露したり、また凍結していたものがテント内の温度の上昇によって水滴になり、テント内を濡らすということがおきます。コストの問題からか、現在市販されている内張りは

ほとんどがナイロンタフタ製のようです。

雪中キャンプでは、この内張りがあると、より快適にキャンプ生活を楽しむことができます。ただし、テント本体を内張りが取り付けられるように加工しておかなければなりません。

参考文献:「ザ・キャンプ」 松田稔 著

■水はけを考える

この、水はけが良いということは、よいキャンプサイトの最も大切な条件の1つです。

水はけが良ければミゾを掘るにも小さくてすむわけです。

砂　地

砂地の野営地というと海辺が多いようです。水はけはとても良いのですが、風が強く、ま1こ砂がテントの中はもちろん、寝袋の中にまで入ってきます。できるなら避けた方がよいと思います。

ローム

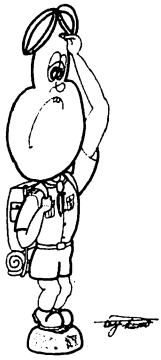
第四紀の火山活動は日本全土におよび、丘の上の平らなところは赤土とよばれるロームが推積しています。砂と泥とねん土がほぼ同量に混ざりあったロームは、雨が少し強く降ると地面にしみこまず、水たまりだらけになり、しかもツルツルとよく滑ります。この悪条件は日本のキャンパーの宿命でもあります。それでも砂地や河原に比べれば良いと思わなければなりません。

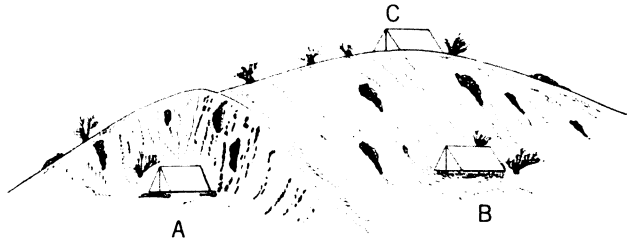
平坦ならよいか

まっ平らが一番よいと思っている人が多いようですが、キャンプサイトはわずかに傾いている方がよいのです。1つの例をあげてみましょう。図－1のようにキャンプサイトが3つあるとき、あなたならどのサイトを選ぶでしょうか？Aは小さな2つの起伏の谷間にあり、Bは起伏の中ほどのわずかに傾斜しているところ、Cは起伏の上部でまったく平らといっていい地形です。

これだけですと風向きなどはわかりません。3か所とも同じ土質であるとして、ただ地形だけを考えますと、Bがもっともよいということになります。

まずAは、雨が降れば水がそこへ集中してきますからよくありません。このようにただ平担なところですと雨水がどこへ流れてよいかわからず、辺り一面小さな水たまりだらけになってしまいます。その点Bは雨水に流れができ、辺りに水がたまることも少なく、また、谷間ではありませんから他から雨水が集って流れ込んでくるということもありません。

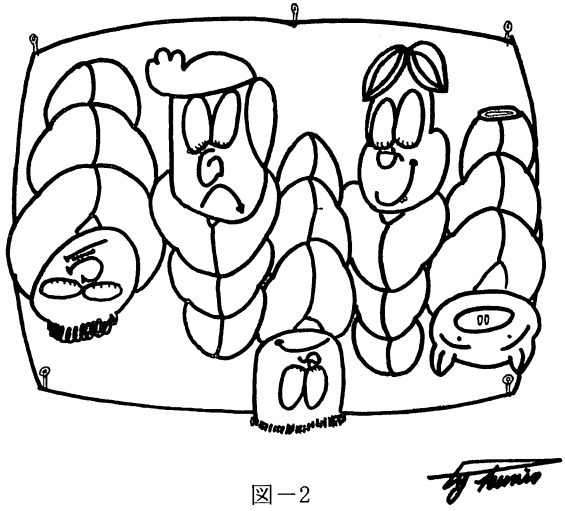




図－1

グランドシートのところでも書きましたが、寝袋とグランドシートが、ともにナイロンで作られていると、わずかな傾斜でも寝ている人がすべっていってしまいます。前の説明とは矛盾してしまいますね。この辺が、キャンプサイト選定の難しいところです。傾斜は必要だが、ありすぎてはいけないということです。「どの辺に決めるか」というのは、やはり長い間の経験から身についてくるものです。慣れないうちは、テントを張ろうとするところで寝ころび、タテになったりヨコになったり2・3回ゴロゴロと転がってみるとよいと思います。

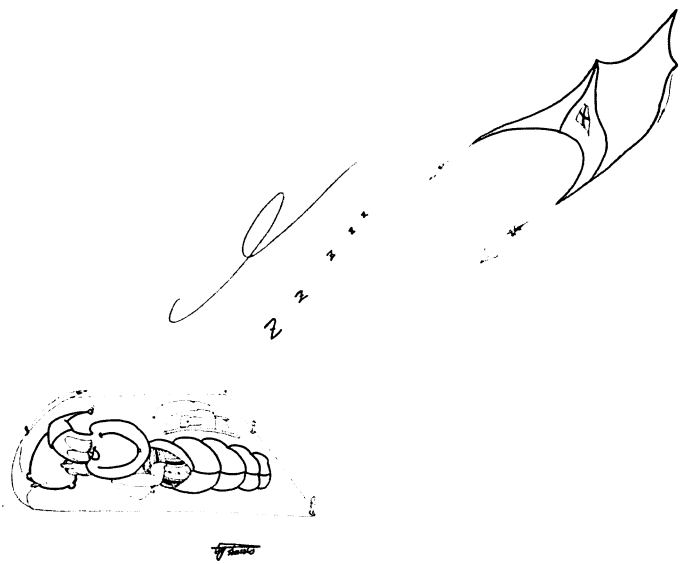
調度よい傾斜の場所が見つかったら、テントの方向を決めます。傾斜の下方に足が向くように寝るわけです。よく6人用のテントで7人寝たりする場合には、図－2のように寝ることがありますがこんなときには仕方がありませんから、身体が傾斜に対して直角になるようにしましょう。とにかく頭が下向きにならないように注意してください。



図－2

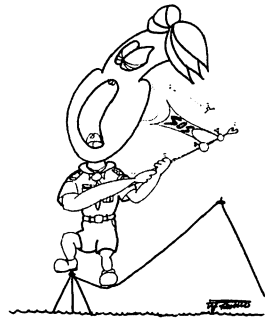
風向きについて

これは風向きそのものより、ある地形の中で常風の方向とそれを防ぐものとの関係から、どこにサイトを設置するかという問題です。つまり、山や丘陵だったら頂上や屋根などを避け、広い草原などでは真ん中ではなく、林などに続く端にテントを張るわけです。地形の複雑なところでは、風の通り道をよく読む必要があります。地形や森林の状況によって、風がいつも通り抜けていく道があるはずですから、なるべくそれを避けてサイトを決めます。それとはまったく逆にいろいろな方向から風が吹きつけてくることもあります。かまどの煙を思い出して下さい。かまどを作るときは風向きを考えて作りますが、いつの間にか風が反対から吹くようになって、煙い思いをしたことがあるのではないでしょうか。山風、谷風といって昼と夜とでも方向は違ってきます。とにかく常に心がけなくてはならないのは森の中、あるいは草原と、どこにいようとも、風が直接あたらないように防ぎ、緩和させてくれるもののそばにテントを張ることです。しかし、ぽつんと1つだけ立っている大きな岩や建物のそばでは、風が巻きこんでいたりして、かえってマイナスになってしまうことが多いようです。気をつけましょう。



土砂崩れの注意

今にも崩れそうな崖の下でキャンプをする人はいないでしょうが、キャンプサイトの下方には案外気にかけないものです。土砂崩れは上から崩れてくるだけではなく、下が崩れることによってそのまま自分たちも流されていくこともけっこう多いのです。ですからキャンプしようとする土地を、十分な範囲で確認する必要があるのです。

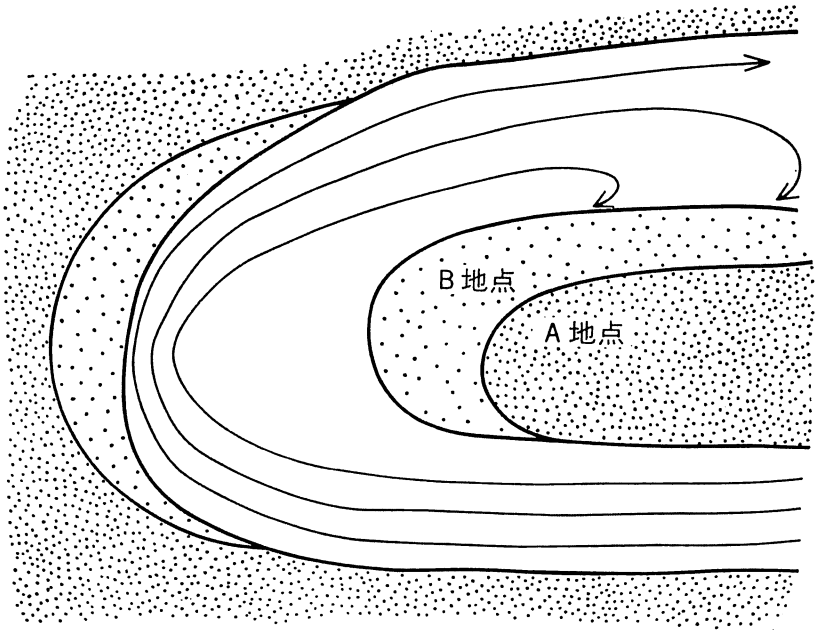


土砂崩れを注意しなければならないのは台風や大雨のときです。ふつうの状態なら、ある程度の雨量を持ちこすこえる土砂も、長雨などで水分が飽和状態になっていると、続けてくる台風や大雨などで簡単に崩れてしまいます。このようなときがもっとも危険ですのでキャンプの期間中の天候だけでなく、その10日ほど前から現地の天候、雨量などに注意を払う必要があります。

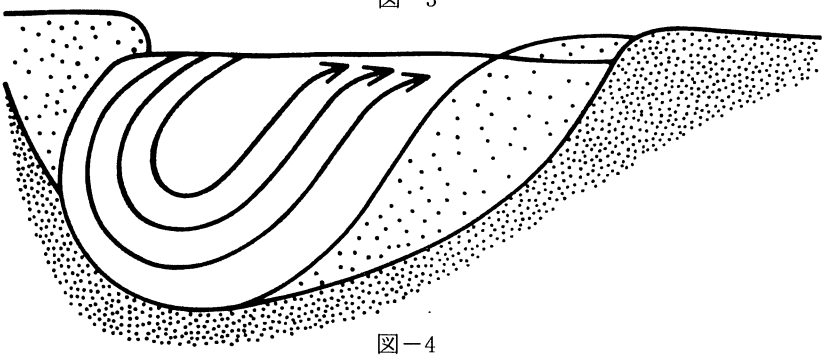
以前、移動キャンプで大雨にあい避難小屋で休んでいると、すぐそばの沢でメキメキメキとものすごい音がして土砂崩れがおきたのを目撃したことがあります。大雨のときには、山のあちらこちらで大なり小なり土砂崩れがおきるものです。人がケガをしたりしなければニュースにならないだけのことなのです。

河原でのキャンプ

キャンプサイトとしては避けたい場所の1つに河原があります。水場が近いことと視界がひらけているからでしょうか、好んで河原にキャンプをする人もいるようです。皆さんはこんなことはないでしょうが、川の中洲でキャンプをしていて水かさが増してしまい、ヘリコプターで救出されたなどということが毎年何回かあります。民営キャンプ場には、片手間に河原でキャンプ場を経営しているところが意外に多いのに驚きます。あまり望ましいとは思えません。川には上流にダムがあることが多く、ときには放水したりします。またもう少し上流の沢などは、「鉄砲水」といって今まで大きな岩などによってせき止められていたり、水流が弱められていた流れが豪雨などで崩れ、激しい勢いで流れ下ってくることがあります。

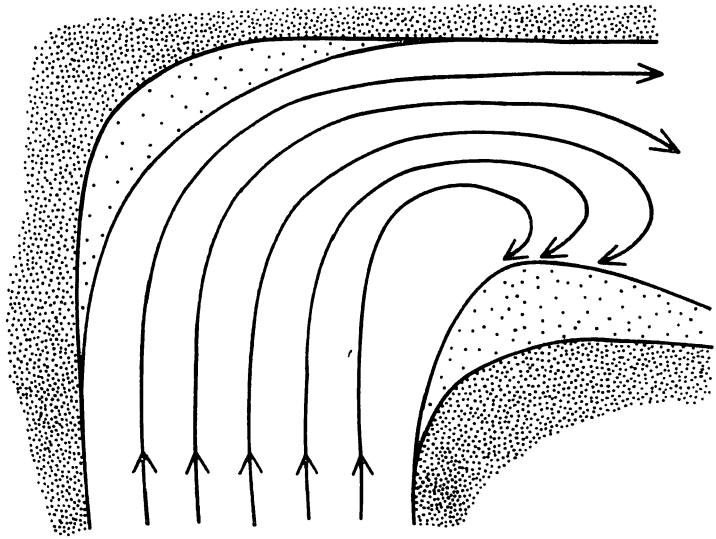


図－3

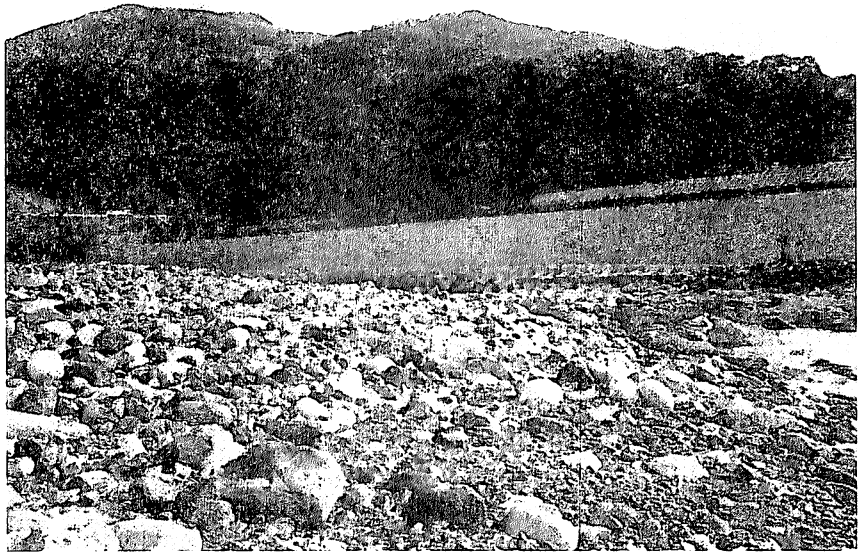


図－4

もしやむを得ず河原でキャンプをするときには、次の要点に気を配って下さい。図-3のようにUの字形に曲った川の場合を考えてみましょう。3本の矢じるしが流れです。水流は外側が速く、また遠心力により外向きの力も加わっています。反対に内側の流れは遅くなります。表面から見るぶんにはさほど問題はありませんが、断面図では外側の下部はすっかりえぐり取られています。



図－5



写真－1　河原でのキャンプは避けたいもの

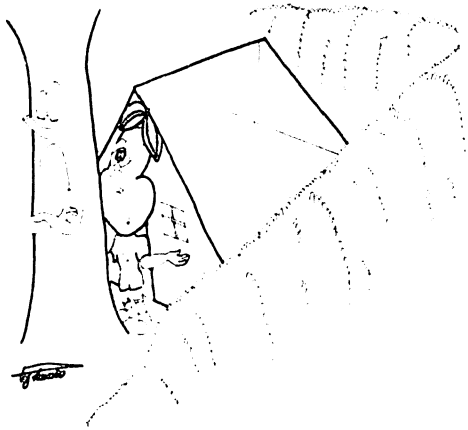
特に大水が出なくても、やがて崩れていく可能性があります。ふたたび図－3にもどりますが、流れを示している矢じるしの中央と内側の2本の線を見てください。曲がりきったところで流れがもどり、岸に向かっています。カヌーなどはこのような流れを巧みに利用して岸に着けて休んだりします。つまり水流の吹きだまりと思ってください。水流に運ばれている小石、岩などがここに流れ着きます。つまり、A地点もB地点も見かけは同じ河原ですが、Bの方が新しくできたもので不安定です。Lの字形をした川も考え方はほとんど同じです。図－5。これらはあくまでも基本的な考え方です。実際には、川の中央に大きな岩があったりして流れはそれらの影響を受け複雑に変化します。安全地帯の大きさ、位置などもいろいろの条件からずいぶんと違ってきますので、岩から何mなら安全ということはできません。なるべく川岸から離れた1段高いところにサイトを設置することです。

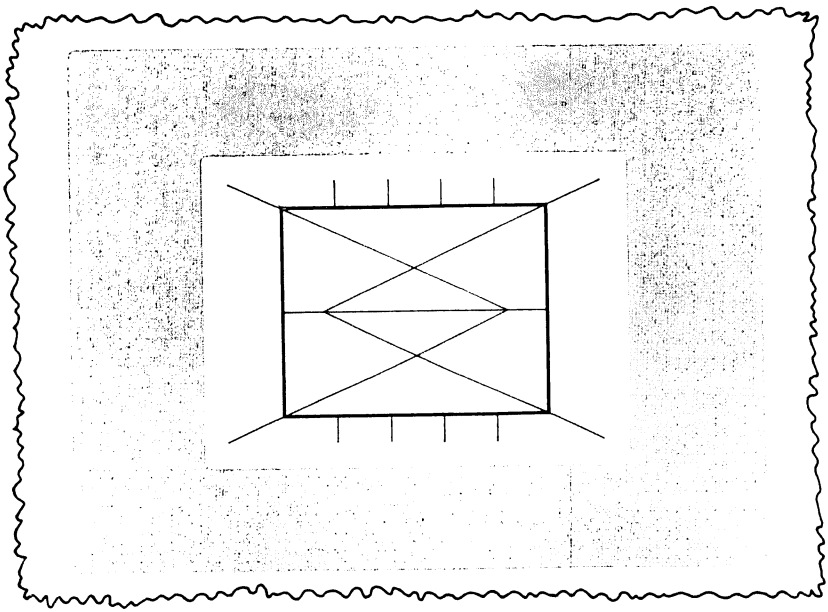
参考文献:「地質学入門」柴田秀賢　著
「カヌーアンドカヤッキング」ウルフ・ロック　著

■テントを張る ①

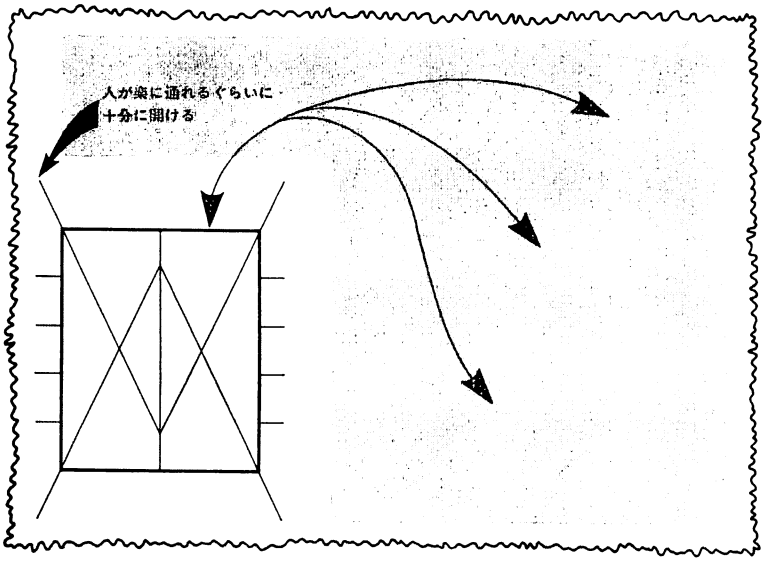
位 置

キャンプサイトがかん木で囲まれ、テントを張る面積の5倍ぐらいの広さがあるとします(このような理想的なサイトはなかなか見つかりませんが)。慣れないとサイトの真中にテントを張ってしまいます(図－1)。これですとサイト内で何を行うにもじゃまになります。

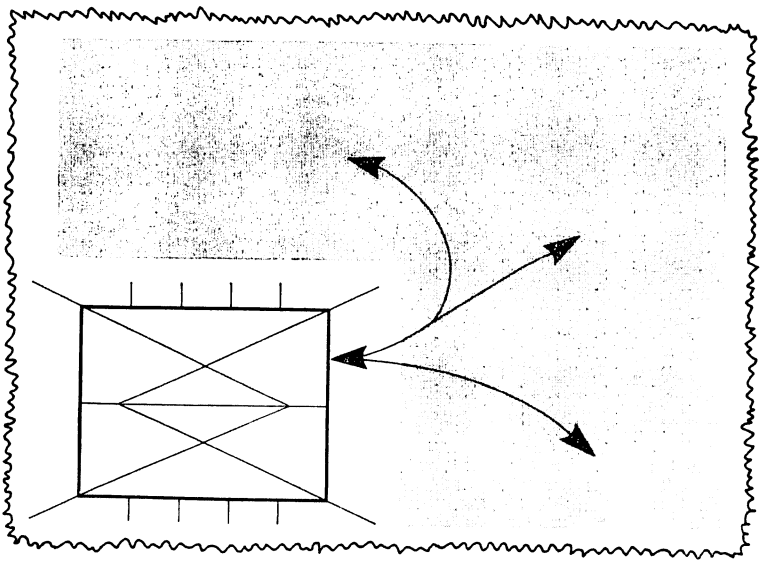




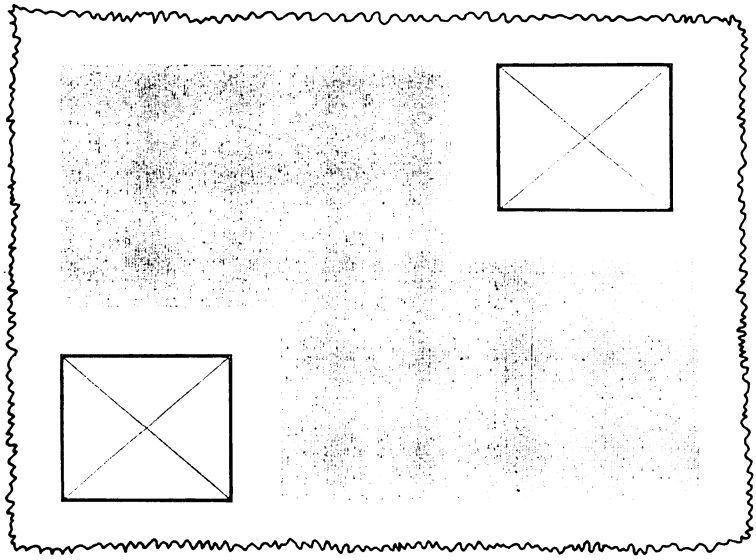
図－1



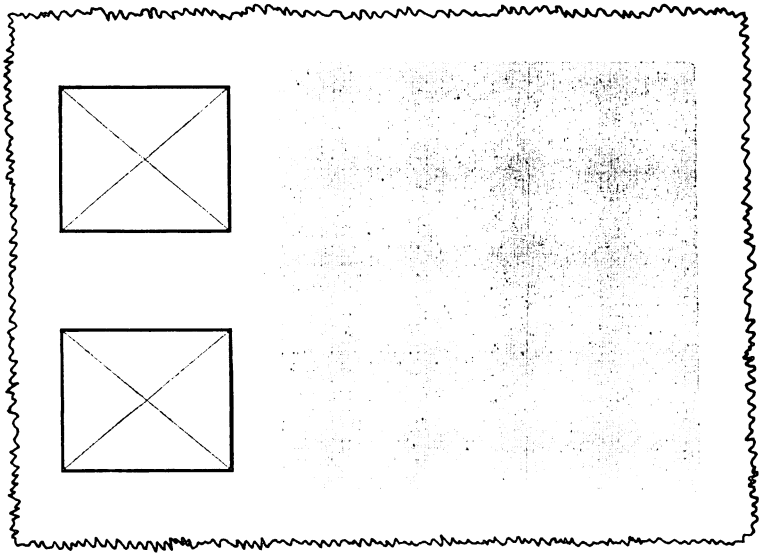
図－2　このように張ると、サイトはフルに利用できるが、入口が活動区域に向いていないので、テントの出入りがわずらわしい。



図－3　これだと、生活区域の専有面積は少なくなるが、テントの出入りがしやすい。食堂マーキーを張る場所や、野営工作をどの程度作るかによって決める。



図－4　サイトの対角位置にテントを張った場合。



図－5　2つならべて張ると、サイトを広く使える。

つぎに失敗するのは逆にサイトの端ぎりぎりにテントを張ってしまうことです。しかし実際にはフライがかぶさりその張りづなが左右に大きく広がっていくので張れなくなってしまいます(図－2)。もっとやっかいなのは入口の通路にメインロープが横切り、出入りするたびにしゃがんだりまたいだりしなければなりません。

サイトに面して高さ20mほどの針葉樹がありますと、その辺りの地下には単一乾電池ぐらいの太さの根が張っています。ペグを打ったりミゾを掘るのにじゃまになるばかりではなく、その根も痛めてしまいます。

このように十分に広いサイトで4人用テントを2張り張るときは、サイトの端と反対側の端に1張りずつ張るより、2張りならべて張って生活区域と活動区域というように分けた方がサイトを広く活用できます。(図－4、5)

テントを張る位置は十分に余裕をもたせ、まわりの樹木などを見わたし、また食堂マーキーも張る予定があるのならその位置との関係も頭に入れます、後で張り直したりするようなことのないように、十分に考えてから張りましょう。

ドームテントの張り方

テントはできるだけ少ない人数で短時間にし、設営のときは、他にもカマドを作ったり配給の資材を取りに行ったり、色々と忙しいものです。

まず中型(4～5人用)テントの主流になりつつあるドーム型からお話ししましょう。写真は2～3人用ですが中型テントとまったく同じです。

このテントは1人でも張れますし、前にもお話ししたようにペグなしでも自立します。張った位置が良くなかったら、そのまま持ち上げて移動できます。

みんなのじゃまにならないようにサイトの端の方で張りましょう。

☆ ドーム型テントは構造上、本体とグランドシートが一体になっていますので、そのままグランドシートを下面にして広げます。

☆ フレームを組んでください。

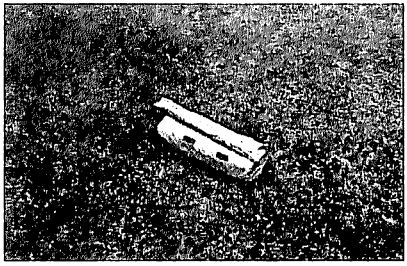
☆ テント本体の上部についているフレーム用の袋の中に対角線方向に各々のフレームを入れて、グランドシートの所に付いているポケットに収めます。

フレームはコンパクトにするために本数が多くなっているはずです。(5本～9本)セルフエレクティング(フレームの項参照)ですと問題はありませんがそうでないものですと、入れるときに袋の中で抜けてしまうことがあります。袋の外側から指でさぐって差し込むと、別のところで抜け、そこを直すと又別な所で抜けてしまい、しまいにイライラしてきてフレームを折ってしまいたくなったりします。途中で抜けたら、全部袋から抜き出して、入れ直した方が早いです。慣れないうちはビニールテープなどで軽く止めておくのもよいでしょう。

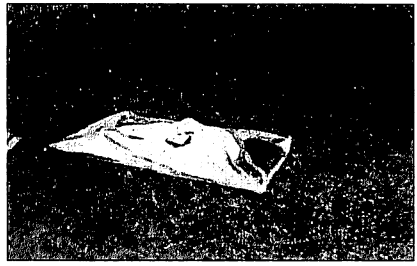
両方のフレームも反対側のポケットに収まりましたら、いよいよフレームを張ります。

袋を引きフレームをずらし手前のポケットに入れてください。ドーム型のテントはナイロンで作られています。このようなときに滑りやすく好都合です。ですが手前のすそを力まかせにひっぱったり(写真－9)するとフレームを折ったり、痛める原因になります。 1度、頂点でたぐり寄せます。このとき写真のように左足でフレームを止めておくと、わけなくたぐり寄せられます。

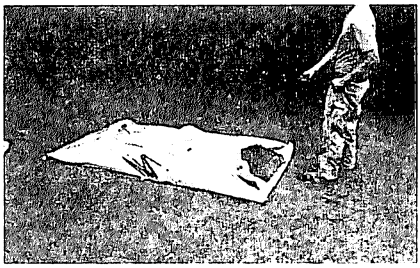
半分がすんだら、今度はしゃがみこんで残りの部分をポケットに差し込んでください。



写真－1 このテントは張ってから移動できるので端の方で作業する

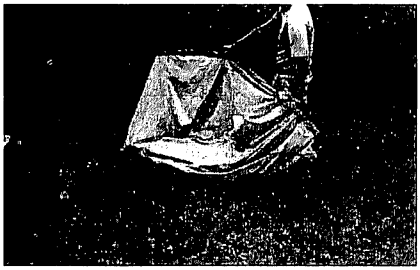


写真－2 グランドシートと本体が1つになっているので、そのまま広げる



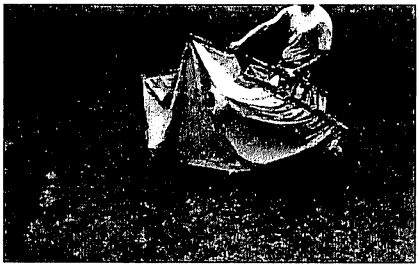
写真－3　フレームを組む

写真－4　フレームを袋の端から入れてゆく

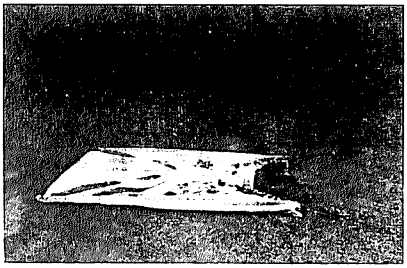


写真－5　フレームを、はずさないよう注意する

写真－6　そのまま、グランドシートに付いているポケットに入れる



写真－7　反対側も同様に入れる



写真－8　これで張る準備ができた

写真－9　無理にひっぱるとフレームを痛める

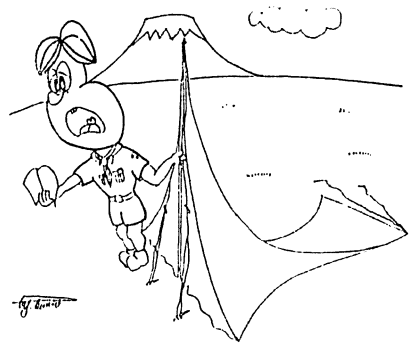
写真－10　このときの左足が重要な役割をはたす

☆ もう一方のフレームも同じように、半分ずつたぐり寄せポケットに収めます。

☆ 本体の頂点にあるリボンテープでフレームの交点を結びます。

☆ フライシートはそのまま上からかぶせてください。

☆ フライに付いているリボンテープをフレームに結びます。



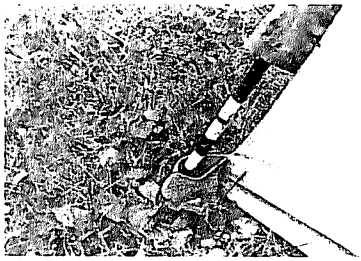
これで一応テントは張れました。

☆ テントを持ち上げ、実際に使う位置に運びます。しかしこのままでは雨が降ったとき、フライシートがテント本体に接し、雨漏りの原因になります。フライに付いている側づなをペグでとめましょう。

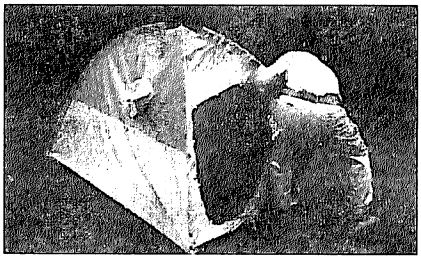
4～5人用でグランドシートが正方形をしている物は問題ありませんが、2～3人用でグランドシートが長方形（写真のテントは130cm×200cm）をしているドーム型テントは横からの風にたわみやすいものです。風はいつでも決まった方向から吹いてくるとは限りませんが、地形や林などの関係によって、ある程度一定（90度ぐらいの範囲）になるサイトも少なくありません。日没から消灯まで気を付けて観察し、ある一定の方向から吹いているようでしたら、テントの向きを調整しましょう。

ドーム型のフレームは他の型のテントのものに比べると弾力性があり、風に対して強くなっていますが、その反面、わずかな風にもテント全体がたわみます。慣れないとこの「バサ！バサ！」という音が気になって寝つきにくいものです。

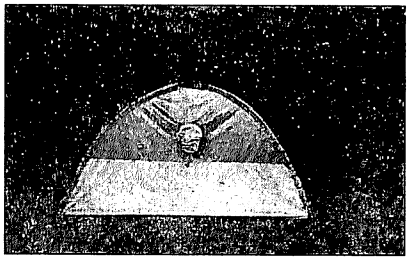
写真－11　しゃがみこんで、残りの半分も張る



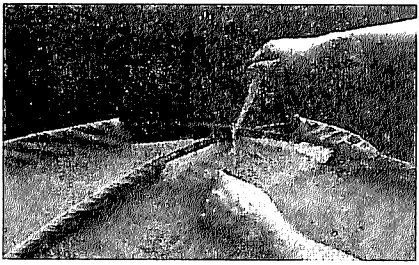
写真－12　ポケットに収められたフレーム



写真－13　反対側も同様にポケットに収める

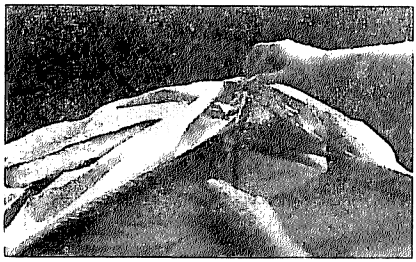


写真－14　フレームを張り終えたテント

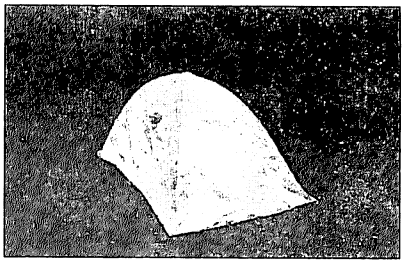


写真－15　リボンテープをフレームに結ぶ

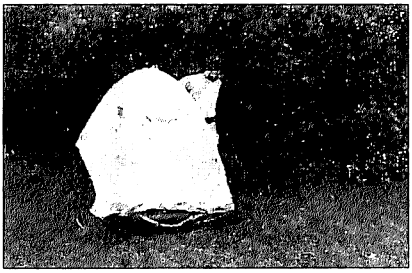
写真－16　フライシートをかぶせる



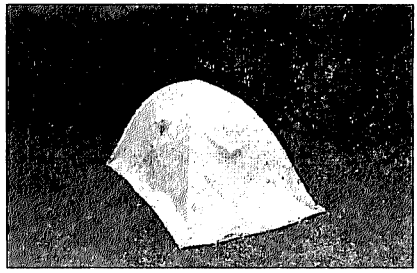
写真－17　フライに付いているテープをフレームに結ぶ



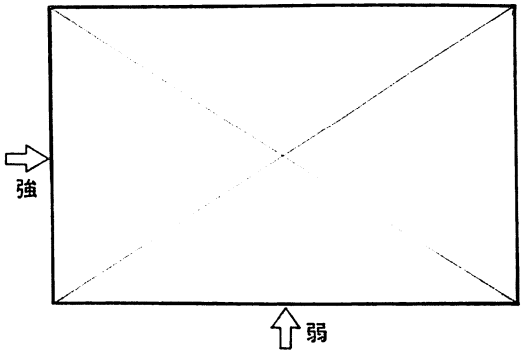
写真－18　一応張れたドーム型テント



写真－19　使用する位置に運ぶ



写真－20　側づなを張り、ペグでとめる



小型ドーム型テントは横風にたわみやすい

■テントを張る ②

家型テントの張り方

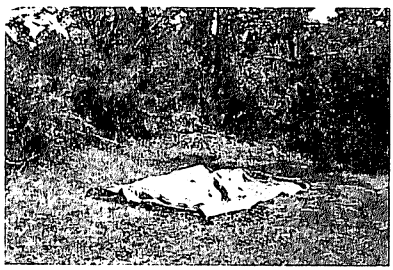
家型テントを張るには色々な方法があります。ですから、ここで紹介するのもたくさんの中の一つの方法と思ってください。この方法なら6～8人用の大きなテントでも、十分2人で張ることができます。

☆ テントを用意します。テントはキャンプに来る前に点検されているわけですから、ペグが一本たりないとか、張りづなが切れているということはないはずです。

☆ テントを張ろうとする場所にグランドシートを広げましょう。一つ注意しておきますがこの順番は晴れているときに限ります。雨の降りしきる中でこの順にやり、乾いているグランドシートをぬらすことはありません。
(雨天の場合の張り方は後載いたします)

☆ テント本体を出しグランドシートの上にかぶせます。

写真－1 グランドシートを張る場所に広げる



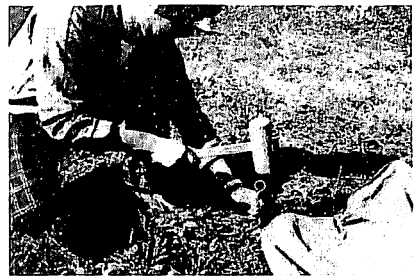
写真－2 テント本体をグランドシートにかぶせる

☆ 出入口、およびウォールに付いているチャックをすべて下まで閉めましょう。

☆ チャックを閉めたら本体下部にあるピン用の穴にピンを打ちます。これでテントと地面の位置は、固定されたわけです。

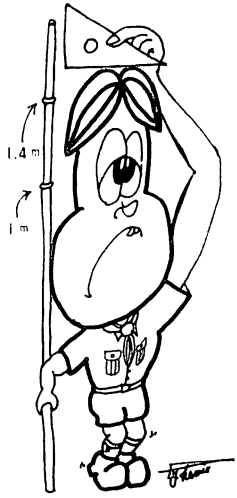
☆ 以前にもお話ししましたが重いハンマーで、力まかせに打ち込んでピンを曲げたり、本の根に差して抜けなくなることもあります。必要最少限の力でやさしく打ってください。途中でピンが入らなくなったら石や本の根などの障害物に当ったのです。すぐに抜き、角度を変えて打ちましょう。

写真－3 出入口等のチャックをすべてしめる

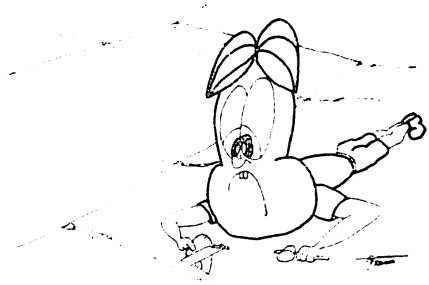


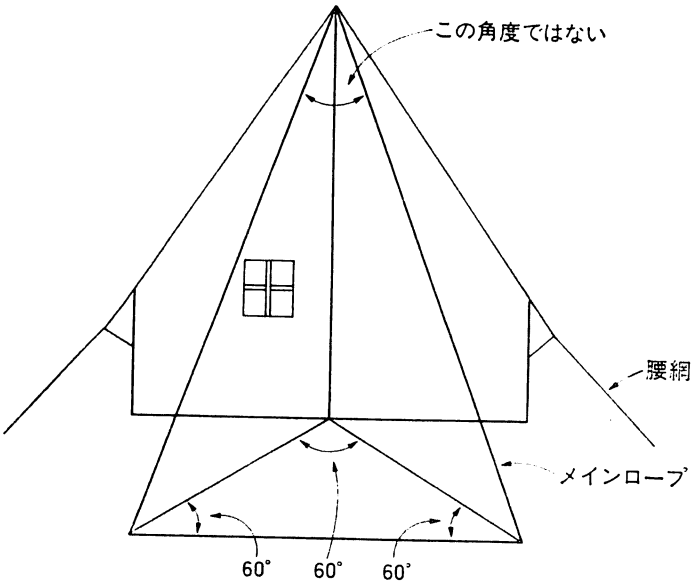
写真－4 必要最小限の力でやさしく打つ

テントを2人で張るには、ポールを立てる前にペグを打ち込んでおかなくてはなりません。これは各隊で使っているテントによって違います。グランドシートからどのくらい離れた位置にペグを打つのかなど、テントの袋に消えないように図を書いておくと便利ですね。四隅のペグは図－1のような角度を目安にして打っておきます。 1mとか80cmとか長さが決まったらポールにビニールテープ等で印をつけてものさしがわりに使うのもよい方法ですね。



ポールをものさしとして使う



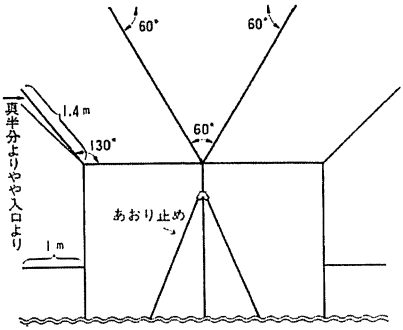


図－1　メインロープを張る角度

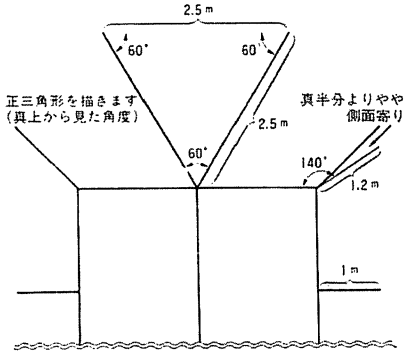
このときペグを打つのに「仮打ち式」と「本打ち式」の2つがあり、どちらも一長一短があります。仮打ちなら早くできますが後で打ち直さなければなりません。打ち直すとすると、はじめに打った位置は土がゆるくなるので二度と打てません。そばに打とうと思ったら石だらけで結局はじめに打った場所が一番よかったということもあります。

本打ちなら時間がかかりますが一度で済みます。雨の日、晴れの日、土質、状況などに応じて本打ちか、仮打ちかを決めるのもキャンパーのテクニックといえるでしょう。

ペグを打つ角度は多くの本に45度と書かれています。ペグは張りづなによってA方向（図－4）に強く引かれますので、ちょうどテコの原理でCが支点、Bが力点、Dが作用点になります。張りづなから掛かる力はDで受けるのです。45度ですともろく、ペグが浮き上がってしまうことがあります。 60度前後で深目に打った方がよいでしょう。

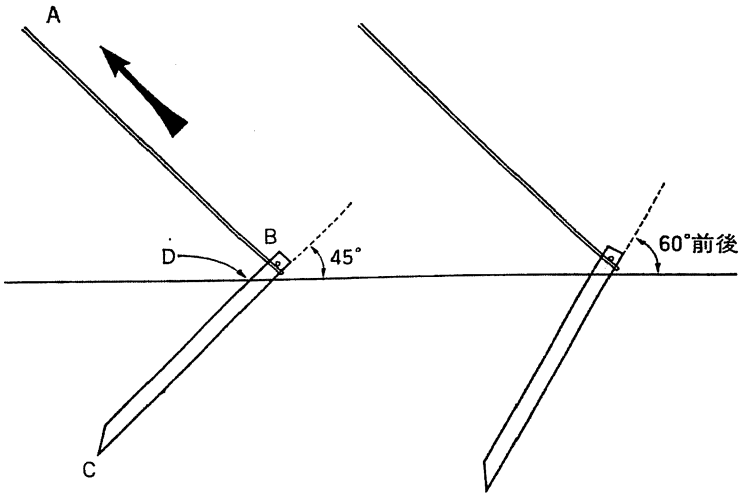


図－2 あおり止めのついているテント



図－3 あおり止めのないテント

大型テント(6～8人用)のペグは、しゃがみ込んで打つより、立った姿勢で腰を曲げ片手でペグを支え、もう一方の手でハンマーを持ち、片足でペグを押さえて打ちましょう。(写真－5)
ペグが安定しますし重いハンマーも使いやすくなります。
(手、指や足を打たないように気をつけましょう)



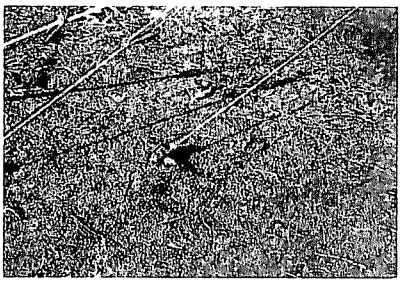
図－4 ペグを打つ角度

☆ めんどうだからと腰綱をかけたまま打ったりする人を見かけます。(写真－6)ロープを切ったりすることがありますのでペグを打ち終ってからロープを掛けるように習慣づけてください。
ペグは頭の所までしっかりと打ち込みます。(写真－7)
ただし腰綱が土などに触れない深さです。ランナーを全部伸ばしきってからペグに掛けます。

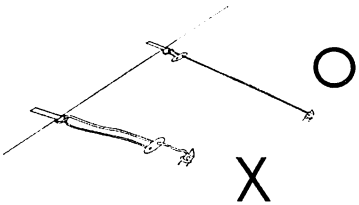
☆ 腰綱の先がアイスプライスになっているテントは、そのまま掛けてもよいのですが撤営のときに雨が降っていたり、雨上りでまだ乾いていないときは綿ロープは縮み、はずしにくかったり、はずれないこともあります。写真－8のようにしてペグに掛けておきましょう。

写真－5 大きいペグの打ち方

写真－6 これは悪い例

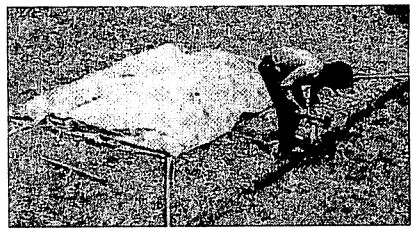


写真－7 この程度打ち込む



写真－8 先がアイスプライスになっているとき

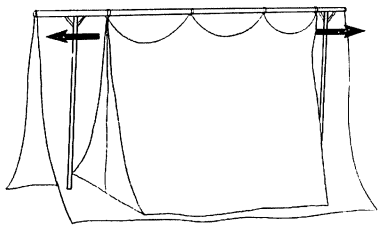
写真－9　まず四隅のペグを打つ

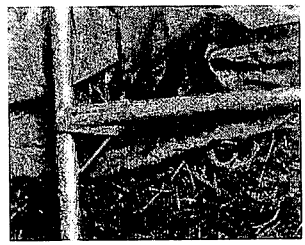


写真－10　つぎに内側のペグを打つ

☆ ポールをテント本体に組み込みます。ポールを差し込むときに泥や砂などがついたままですとかんでしまい、撤営のとき、抜くのに苦労します。きれいに払ってから差し込みましょう。

☆ テント本体がリッジポールにつり下がり、リッジポールの上をフライシートがおおうタイプのテントでは、ポールを立ててからテント本体が十分に延びきらずにリッジポールにつり下がっていることに気がつくことがあります。
テントを張ってからでは直せません。
そのようなことがないようにテント本体を両側から強く引っぱっておいてください。本体つり下げテープをポールの外側に（写真－11）引っ掛けておくのもよい方法ですね。



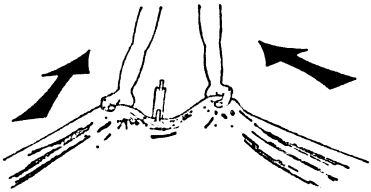


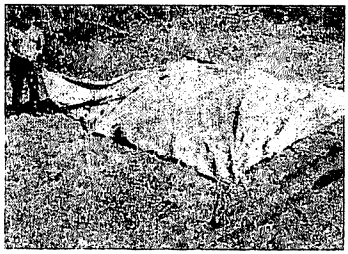
写真－11　こうしておくとよい

☆ フライシートを本体の上に掛けます。

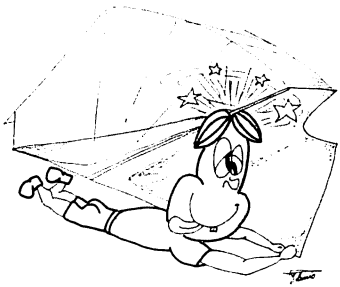
☆ フライシートに付いているキャップをリッジポールに付いているピンに差し込みましょう。フライシートはピッタリと張るように作られています。キャップをピンに入れるときは少しきつい程です。無理にキャップの頭だけつまんで入れようとするとフライシートが裂けたり、キャップだけ取れたりします。片側のキャップを入れたら反対側シートを両手で一度強く引き延ばしてから入れるようにしましょう。

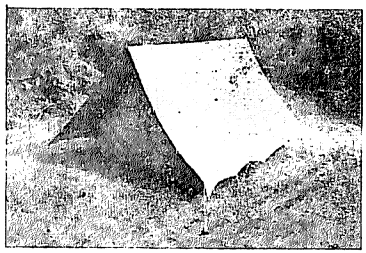
あおり止めの付いているフライシートはロープを振り分けておきます。
これで用意ができました。フライシートのペグは打っておかなくても張れます。


このように引っぱる


写真－12　フライのあおり止めは振り分けておく

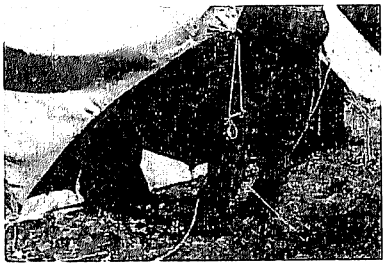
ポールを立てます。今まで二人で張るということでお話ししてきましたが、大型テントは大変に重く、無理をするとケガをします。もし不安だったらこのときだけ何人か呼んで手伝ってもらいましょう。手慣れている人でも、いざポールを立てようとすると長い間に張り綱が短くなっていて、ポールが立てられなかったり、張り綱が他のロープに引っ掛かっているのに気づきあわてて叫んでだれかに手伝ってもらうことがあるのですから。



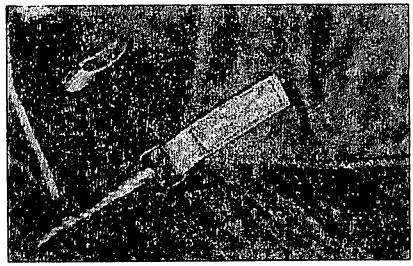

写真－13　ポールを立てたらはじめに四隅の腰綱を張る

声をかけて一気にポールを立てましょう。ポールを立てたら、つぎに四隅の腰綱を張るとテントは自立します。片方ずつ張りますが一度に張りますと、反対側の張り綱がまだ伸びきった状態ですのでポールが倒れてくることがあります。少しずつ何度かに分けて両側の張り綱を同じようにしめてください。

これでテントは自立するはずです。残りの張り綱を調整してください。

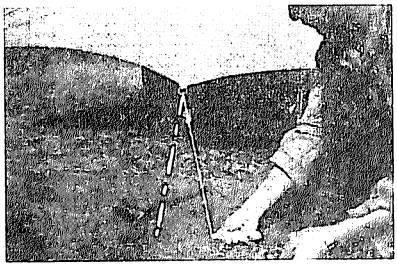


写真－14　残りの張り綱を調整する

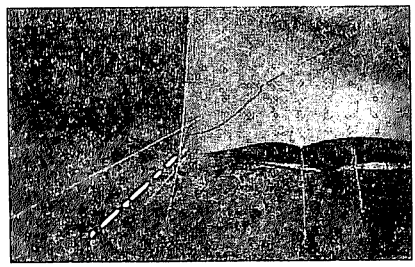


写真－15　D 環テープ

フライのペグを打つ位置を決めるときは、張り綱をD環テープが伸びている方向に正しく引きましょう。そのままロープを引きフライ全体を見渡して、さらに本体とフライの間隔を考えてシワの少ない位置を捜します。



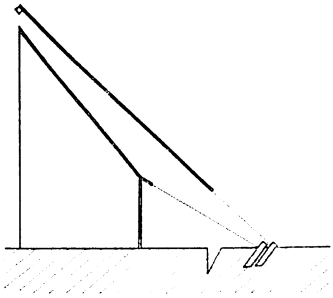
写真－16　D 環テープの伸びている方向に正しく引く

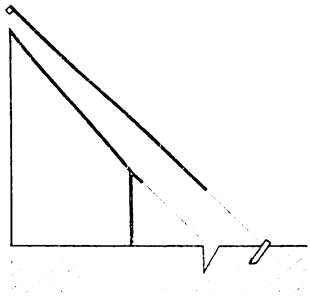


写真－17　シワができない位置を探す

このときに気をつけなければならないのは、フライシートの端がテント本体の腰綱のペグの真上に掛からないようにします。さもないとテントのペグの所にミゾを掘るようになってしまうからです。(図－5参考)テントのメーカーでも十分にこれらのことを考え、多少の傾斜があってもフライの端がテント本体の真上にこないように設計していますが、長い間にはテントや張り綱が縮んでいったりします。どのようにしても真上にくるようでしたらリーダーに相談してから張り綱を取りかえましょう。

ペグを打つときに張り綱を十分地面までもってこないでその位置にペグでしるしだけつけて、打ち込む人がいます。このようなことをして打ち込んだペグにいざロープを掛けてみると下にきすぎたりして、打ち直さなければならなくなることがあります。





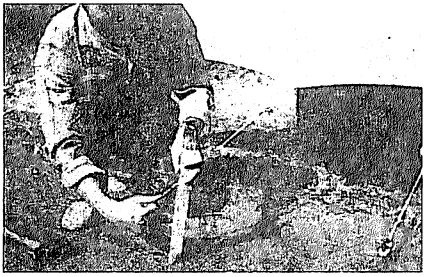
おもいきってテントのペグを後にもってくる

図－5

テントのペグが近すぎる

さらに両側のペグを見くらべ全部打ち終わったあとペグが一直線になるようにしてください。こうすると見ために美しいだけでなく、フライにできるシワが少なくなり、より調整しやすくなります。一度に一直線上にペグを打ち込むときはロープを使うときれいに決まります。四隅のペグを打ったら図－6のようにロープを張ります。そのロープとD環テープの伸びている方向の交点がペグを打つ位置です。(図－6参考)

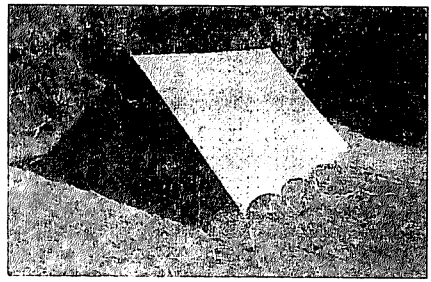
これでシワを作ることなく簡単にフライシートが張れます。



写真－18　高い位置でロープを引きそのままペグを打つと低くなりすぎて張れない

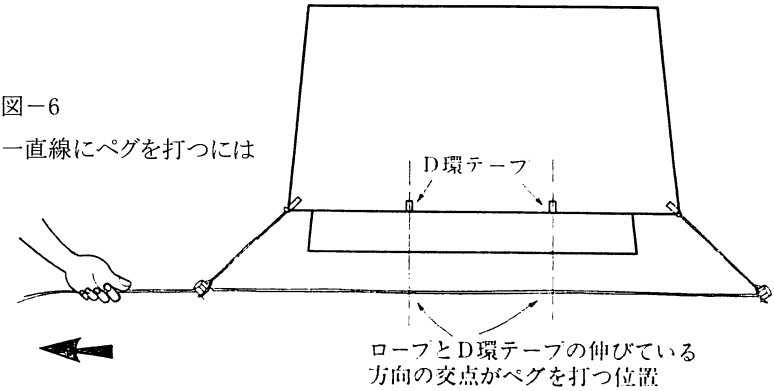
写真－19　張り綱を正しく地面まで持ってくる

写真－20　ペグで軽くしるしをつけてから打つ



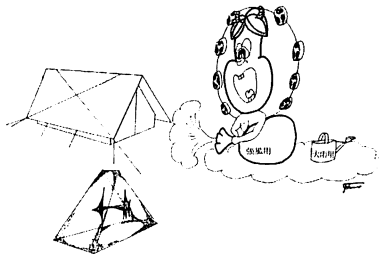
写真－21　ペグは一直線にならぶように打つ

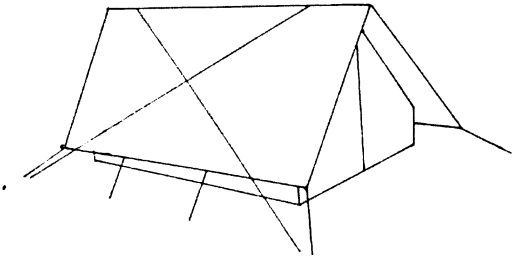
図－6
一直線にペグを打つには



最後のあおり止めですが、これはフライの四隅の角に軽く接するように張ってください。今日のほとんどの大型テントは、テント本体よりフライシートの方が長くなっていて軒を形成しています。こうなったことにより正面から吹いてくる風でフライシートがあおられやすくなりました。少し風のある日はバサバサとうるさいものです。

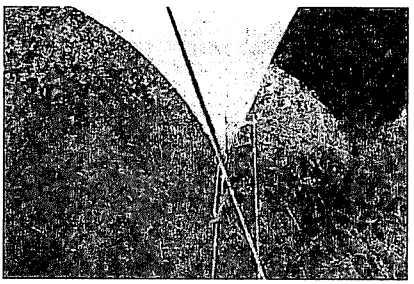
これを防ぐために文字通り「あおり止め」を張るのです。一部のテントのカタログに図－7のような完成図が載っていますが、これでは本来の「あおり止め」の効果がなくなってしまいます。





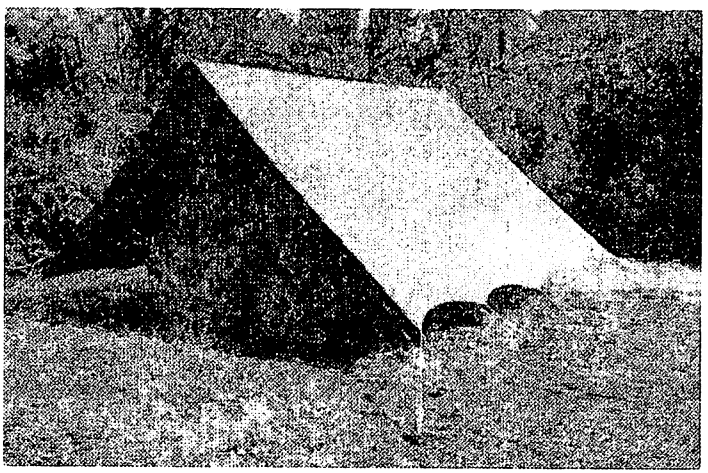
あおり止めの
位置が不適切

図－7



写真－22

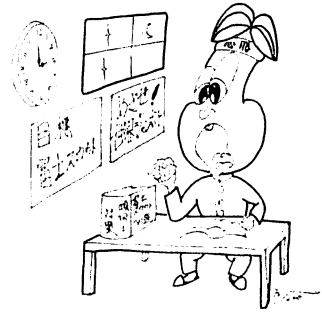
あおり止めはフライの四隅に軽く接するように張る



写真－23　張り終えたテント

■テントの調整

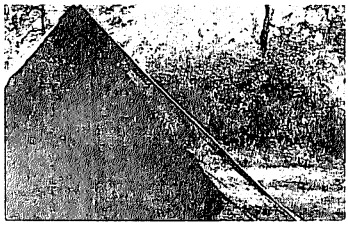
張り綱の調整



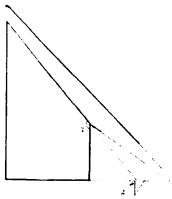
テントはきれいに張れましたか？自然の中ではいろいろとこまかい条件が変わってきますので、なかなか思うようにはいきません。机の上で学ぶ理論よりも経験が重視されるのはそのためです。

テントを張るときに間違ったイメージがあるとうまく張れません。

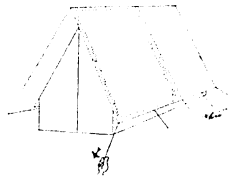
図－1を見てください。これはみなさんおなじみのジャンボリーテントをメーカーの設計図どおりに描いたものです。テント本体の腰綱が随分と遠くの方にきていますね。これも何げなくやると屋根と同じ角度で地面に持っていったりします。そのままA方向にペグを打ちますと前項でお話したようにペグを打った位置にミゾを掘るというようになってしまいますし、Bの角度がきれいに出ないで写真－2のようになってしまいます。つぎにフライシートですが、力まかせに思いっきり引っ張る人を見かけます。フライの張り綱は普通4本から5本でできています。全部バランスよく引かれているときにシワがなくなるのです。一本を強く引くととなりの張り綱がゆるみ、その張り綱をきつく張ると、またとなりがゆるんできてきりがありません。



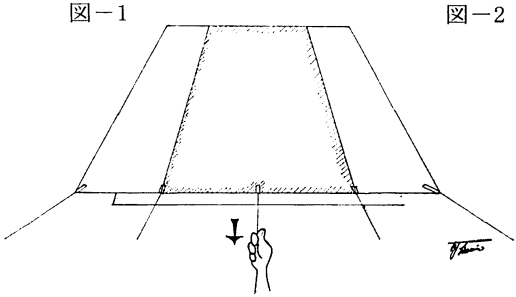
写真－1　正しく張られている



図－1

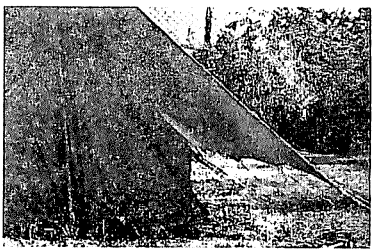


図－2

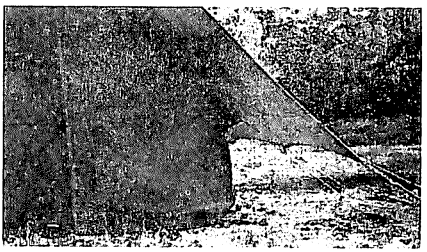


図－3

そのうちペグが地面から浮き上がってきます。一本の張り綱だけでフライシートで全面のシワをなくそうとせず、部分的に分けてシワをなくしていきましょう。四隅のペグはシートの中ほどまで(図－2参照)、内側のペグは両どなりのペグまでが担当です。ありがたいことに最近出まわっている家型テントの多くはリッジポールが入っています。前項でお話したようにペグが一直線に打たれていれば、まず間違いなくシワがなくなります。

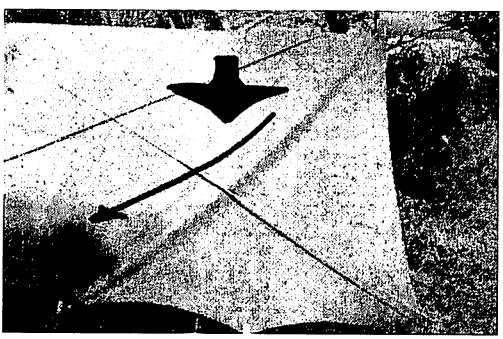


写真－2　ペグが近すぎる



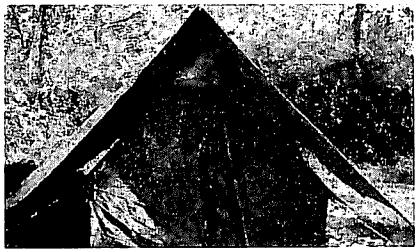
写真－3 ペグが遠すぎ、しかも強く張っているのでスソが上がってしまう

なぜシワをなくさなければならないのか？

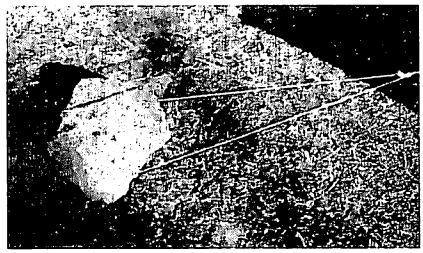


写真－4　このシワが雨ドイのようになってしまう

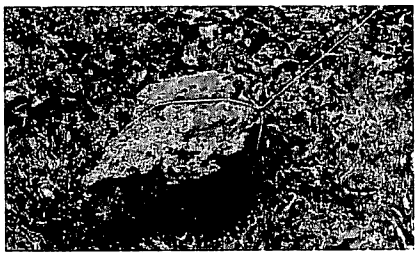
写真－4のようにシワがあるとします。雨が降ってくるとそのシワにそって雨が流れます。雨どいと同じですね。フライシートははっ水性防水(防水の項参照)ですので、長時間雨が降るとそのシワにそって雨が漏ってきます。ですからフライシートはもちろん内側のテント本体もいつもシワができないように、きれいに張っていなければなりません。シニアースカウトやローバースカウトになって行う移動キャンプではフライシートは持っていかないことが多いのですから、今から習慣にしてしまいましょう。



写真－5 ポールが垂直に立てられていないと正しく張れない



写真－6 このように止めておくとすぐに外れてしまう



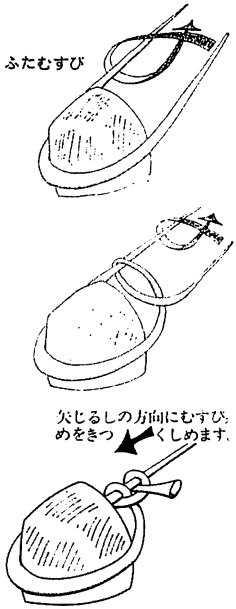
写真－7 ふたむすびでしっかり止める

写真－8 ふたむすびでしっかり止める

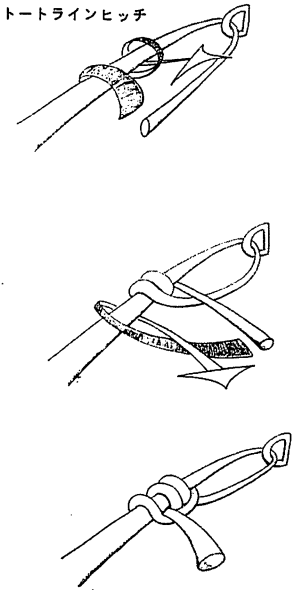
夢中であちらこちらを調整していますと後でポールが垂直でないことに気がつくことがあります。ポールを垂直になおすときはパートナーに少し離れた所から見ていてもらいましょう。地面がやわらかくてポールが沈むようでしたらポールの下に石をしいたりして防ぎます。

ペグを打つ位置が石ころだらけで思うように打てないこともめずらしくありません。そのようなときには、あたりに落ちている石や木を利用してください。写真－6のようにして張り綱を掛けますと何かのはずみにはずれたりします。写真－7、8のようにふたむすびなどで石や木などにしっかりと結びつけ反対に上の方にトートラインヒッチなどでランナーを作りましょう。

図－4

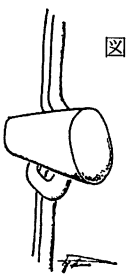


図－5

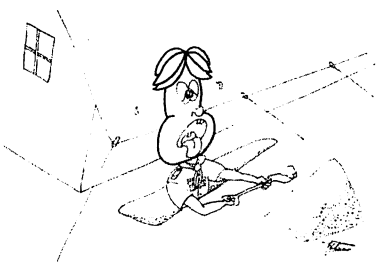


テント内部のグランドシートはひも、ホックなどで本体に付けられるようになっていますから、砂、土をはらってから正しく取り付けてください。(図－6)

たえまなく降りしきる雨がフライシートをつたわり地面に落ちます。また傾斜の強いキャンプサイトでは斜面上部から流れてくる雨水もあります。これらが浸入しないようにテント内外に工夫をしなければなりません。



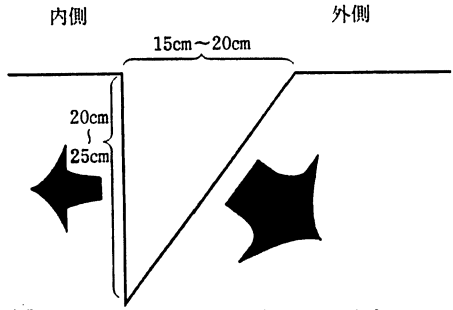
図－6



■側溝・土手

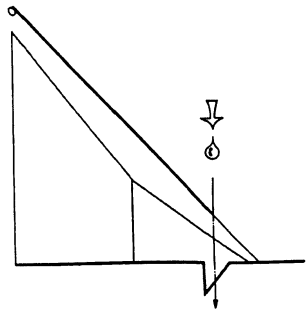
水はけの良い土地の場合

ミゾを掘って地中に染み込ませます。この利点は簡単にできるということです。それで広く利用されていますが水はけの悪い土地ではミゾに水がたまり、まったく用をなしません。



図－1　外側の方に多く雨が染み込みます

深さや幅はテントの大きさ、水はけによっても違いますが、深さ20cm～25cm、幅15cm～20cmもあれば十分です。この大きさで雨水が染み込まずにたまるようでしたら、その土地は水はけの悪い土質ということになります。

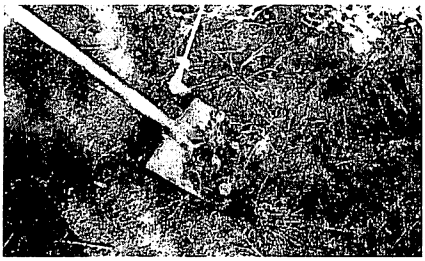


図－2　フライシートの少し内側に掘る

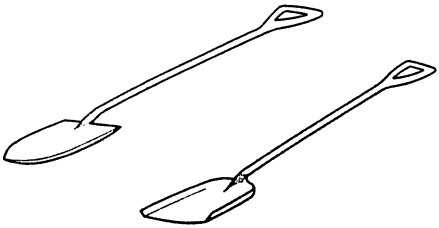
テントに対して内側が垂直、外側を斜めに切り込んだ直角三角形に掘ってください。この形の良い点は、水が染み込むときテントの外側の方が表面積が大きくそれだけ多く雨水がに染み込んでいきます。それと同時に掘りやすいことです。まず写真－1のようにフライシートの端の少し内側に垂直にシャベルを入れます。フライシートがじゃまでしたら張り綱をゆるめてから掘ってください。不精をして、いいかげんに作ると後で雨の降りしきる中で直さなければならなくなります。

写真－1　垂直にシャベルを入れる

写真－2　斜めにシャベルを入れます

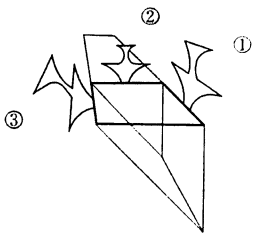


写真－3　取り出した土のブロック

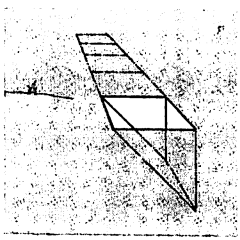


図－3　上側のシャベルを使う

このとき使うシャベルは先のとがったシャベルを使ってください(図－3)。地下には無数の雑草の根がはっています。力強くそれらを一気に切るように足で踏み込みましょう。つぎに図－4②のように横にシャベルを入れます。それから写真－2のように斜めに入れます。そのまま持ち上げるとスッポリとブロックになって土が取り出せます(写真－3)。それをサイトの端の日影にでも並べて置きましょう。一日一回、軽く水をあたえます。撤営のときにはそのままミゾにもどします、雑草は大変丈夫ですので少しぐらい根が切られてもすぐもとのように元気になります。



図－4



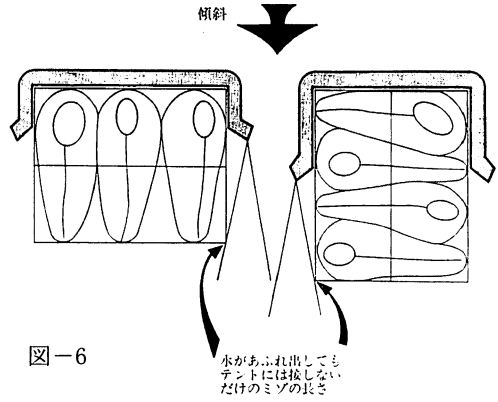
図－5

雨が強く降るとサイト内には大なり小なり雨水の流れができます。それらの流れが表面の土砂をさらっていきます。雑草は表面の土砂が流れていくのを防いでくれます。もちろんサイト内に草がボウボウと生えていて歩いたり活動するのに不自由なら切ってもかまいませんが、いたずらに根こそぎ抜くのは感心できません。キャンプ場はゴルフ場ではないのですから。

ミゾの目的はフライシートから流れ落ちる雨水を受けると同時に傾面上部から流れてくる水を防ぐことです。平担なサイトあるいはわずかな傾斜の所で流れてくる雨水の心配のないときはテントの側面に2本作ります。

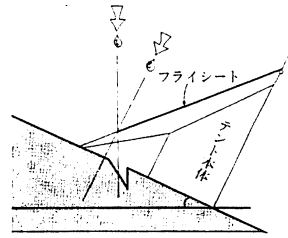
傾斜が強い場合

やむをえず傾斜の強い所でテントを張るときはミゾの配置も形も大分変わってきます。このような強い傾斜では6～8人用の大型テントは張れません。スペースに余裕があるときはサイトの傾斜に対して横向きにテントを張り、ミゾは図－6のような形に掘ります。このときのミゾは少し内側に掘ってください。



図－6

図－7は少し極端な例ですが、フライシートをつたわって流れ落ちるしずくを受けとめる位置に掘りましょう。ミゾの両端はそのまま下方へ伸し、水が流れるようにします。これは土質によって、染み込みやすいようだったり、上部の斜面の距離がそれほど長いようでなければ短くしてかまいません。すそは外向きに掘っておいてください。



図－7

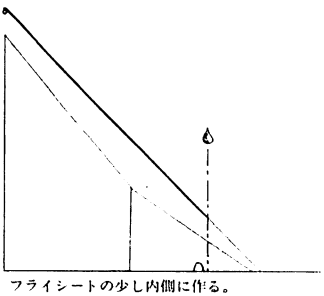
しかしテントの大きさにあまり余裕のないときは中の人が互い違いに寝ますので傾斜に対して縦に張らなければなりません。そのときも考え方は同じです。形はコの字形に掘ります。このミゾも両端の長さを適当に調整しましょう。

水はけの悪い土地の場合

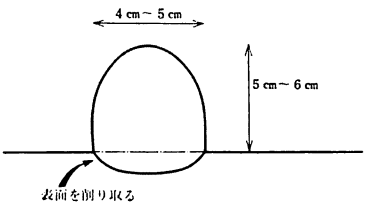
皆さんも畑や花壇に水をまいたことがあると思いますが、まかれた水はすぐに染み込んでいきますね。しかしこれは、十分に耕してあるから染み込んでいくのです。これからキャンプをする土地が公園の花壇と同じようだから水はけが良いだろうと思ったら大きな間違いです。

土手

水が染み込みにくい土質、さらにまず絶対に染み込んでいかない粘土、赤土のキャンプサイトでは、ミゾを掘っても水は土中に染み込まず、たまってしまい効果はありません。そのようなサイトではミゾを掘らずに土手を作ります。



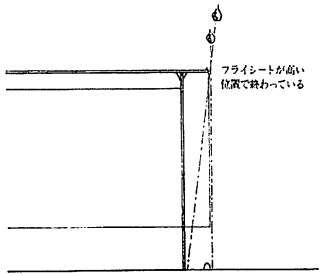
図－8



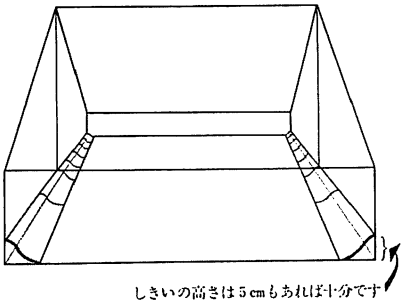
図－9

ミゾを掘ることに比べると土手を作る方が手間がかかります。それでこの方法はあまり利用されずに今日まできてしまったのです。しかし日本のようにローム土の多い国土では大変に有効な手段です。図－8の位置に図－9のように作ります。作る位置に草が生えていたりするとそこから雨水が染み込んでしまいますので表面を削り取ります。水の染み込みにくい粘土質の土は適当に水分をふくませるとベタベタして土手を作りやすくなります。作ったときにちょうどよく水分を含んでいた赤土や粘土も天気が良ければ数時間で乾燥しヒビが入ったり、くずれたりしてきます。夕方、日が落ちる前に必ず点検し乾燥していたら手で水を軽く加えてください。

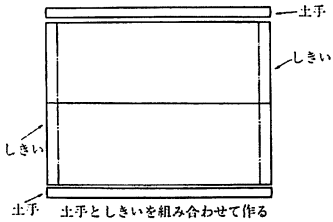
水はけの悪い平坦なサイトでキャンプをすると雨が降った翌日もビチャビチャと湿っていていやなものですね。なかでもテントの出入口となると、人の出入りが多いものですから、足跡が徐々に深くなりそのまま水たまりになってしまい出入りの際に水がグランドシートに流れ込んだりすることがあります。かといって入口に土手を作ってもすぐに踏みつぶされてしまいます。またテントの前後はフライが高い位置で終わっていますのでわずかな風でもフライシートの内側に雨が入り込みます。(図－10参考)これらの問題を防ぐためにグランドシートの下にしきいを作りましょう。図－11のように作ります。高さは5cmもあれば十分です。水はけの悪い平坦なサイトでは土手としきいを組み合わせて図－12のように土手2本、しきい2本を作ってください。



図－10



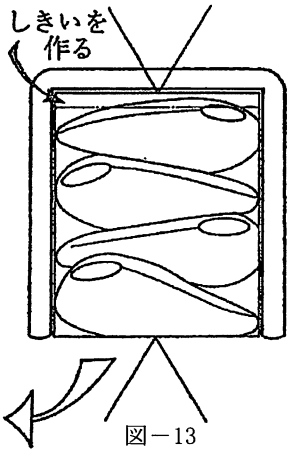
図－11



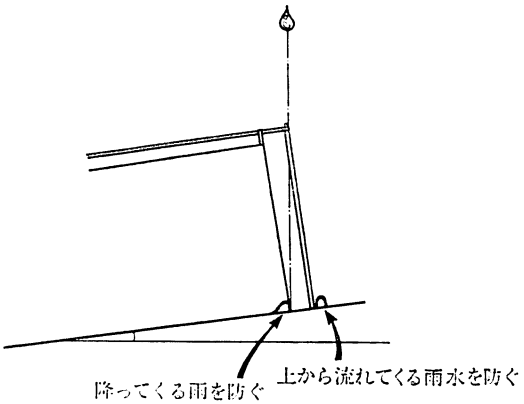
図－12

傾斜地の土手

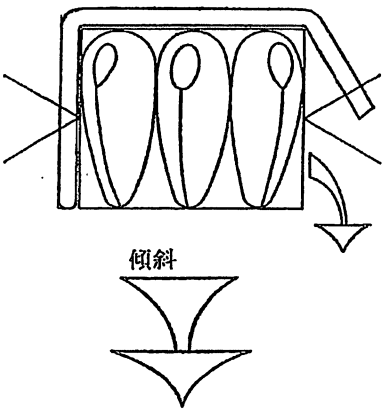
傾斜地でテントを斜面に対して縦方向にテントを張るときはコの字形に土手を作りましょう(図－13参考)。このときは水はけが悪い土地ですので完全にテントの端まで土手を作ります。上部はフライシートが高い位置で終わっています。垂直に落ちてくる雨はグランドシートのところまで降ってきます。(図－14参考)水はけの悪い土地ですので上方から流れてくる雨水の量は多くなります。そこで少し手間がかかりますが土手としきいを作り二重に防ぎます。



図－13



図－14



図－15

テントを横向きに張るときは、コの字形に土手を作りますと出入りのときに踏みつぶしてしまいますので図－15のように変形コの字形にしてください。

水はけの悪い斜面でテントを張るときはサイトの傾斜の上部にしましょう。そうすれば出入りしやすくしかも土手を踏みつぶす確率は少なくなります。

土手のもう一つの作り方

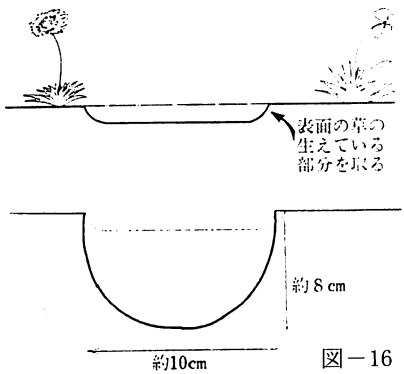
この土手にする材料をキャンプサイトもしくはサイトのそばでどのように集めるか？これがこの土手を作るときの最大の問題です。一か所から取ったりすればそこに雨水がたまってしまいます。もし土を十分に集められないようでしたら、ミゾを掘りその土を利用して土手を作ります。

図－16のように表面の草の生えている部分を取ります。この時にスプーンを利用するとわけなくできます。スプーンは小さな穴を掘ったりミゾを作るのに大変便利ですのでいらなくなった金属性のスプーンを一つペグ袋の中に入れておきましょう。

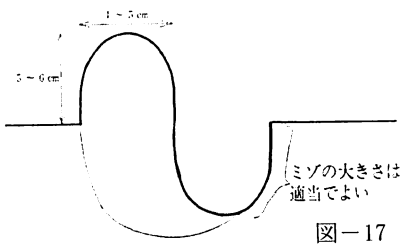
図－17のように幅約10cm深さ8cmに掘り、土をよくほぐしてください。ほどよく水を加え写真のように肩をもむような手つきで形をととのえましょう。作ってみると意外に簡単にできます。

土手の内側にできたミゾは雨水を吸いこますためのものではありません。

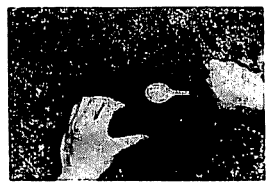
ミゾに雨がたまらないようにしっかり作りましょう。設営のときは、自分の家を建てるようにていねいに土手をならしていきます。



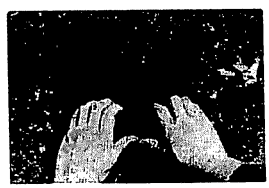
図－16



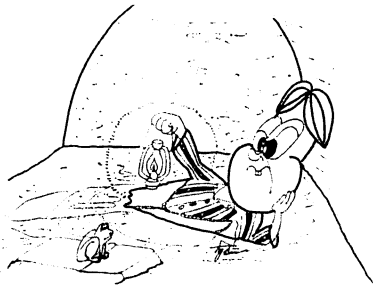
図－17


スプーンを使いミゾを掘る

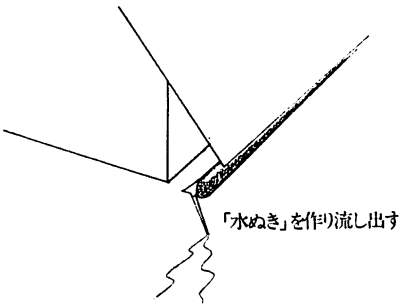
作りやすいように水を加える


親指と人さし指で形をととのえていく

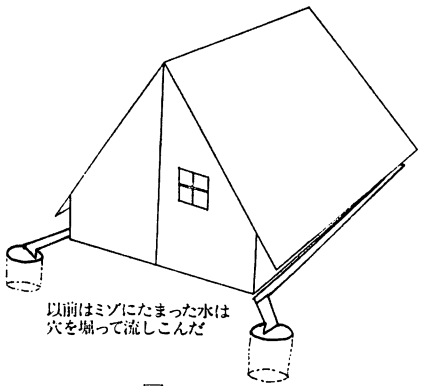
もし土手の内側に水が入ってしまったら、傾斜の強いサイトの場合は水ぬき(図－18参考)を作り水が流れ出るようにしてください。平坦なサイトやゆるい傾斜地なら、しかたありません面倒でもスプーンなどを利用して雨水をかき出しましょう。



かつては、水はけの悪い土地でミゾにたまった水は一か所に穴を深く掘って水ぬきを作りました。(図－19参考)しかし雨水が染み込みにくいことには変わりありません。第一サイトが荒れます。キャンプ場でキャンプをするかぎり、皆さんのすぐ後に、また別のキャンパーが来ます。キャンプサイトに掘る穴やミゾの深さ、ペグの大きさなどは必要最少限であることが望ましいのです。



図－18



図－19

ドーム型テントの場合

ドーム型テントは家型テントと違い、完成されたパターンまで今1歩という状態ですので、各メーカーでいろいろと試行錯誤が繰り返されています。日本工業規格でもまだ規定されていません。したがって型がそれぞれ違い説明しにくいのですがごく平均的な規格のドーム型テントを想定して話をすすめていきましょう。

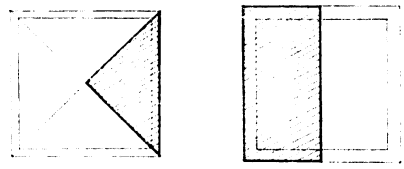
またドーム型テントはテントを張り終わってからも移動することができますので、もし張っている場所よりも雨水を処理しやすい場所がありましたらそちらへ移せます。

しかし、そこしかテントを張る場所がないとして、以下お話します。

平坦なサイト

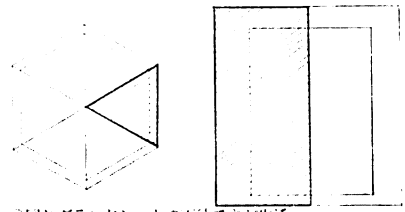
・水はけの良い土地

サイトが平地もしくは理想的な傾斜でドーム型テントを張るとしたら、ミゾを掘る必要がありません。図－20、21を見てください。おなじ床面積でも家型とドーム型ではフライシートの一



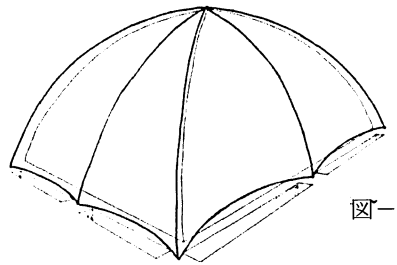
グランドシートの面積が同じでもフライシートの一面が受ける雨水は2倍以上違います

図－20



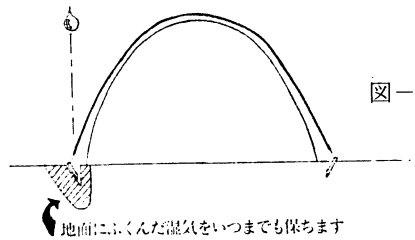
※同じグランドシートの面積ですが生活有用面積はドーム型は少なくなります。

図－21



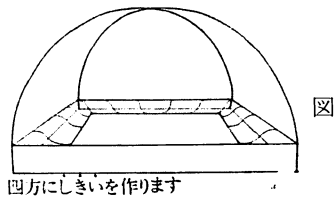
図－22

「ないやすめ的掘り方」



図－23

地面にふくんだ湿気をいつまでも保ちます



図－24

四方にしきいを作ります

つの面の面積はこれだけ違います。ふりわけられて落ちる雨量自体がすくないという理由とフライシートと本体が近すぎて事実上ミゾを掘るスペースがないということからミゾを掘りません。無理に「気やすめ的掘り方」(図－22参考)をしますとミゾから染み込んでいく水がグランドシートまで達したり、翌日は晴れても、たっぷり雨水を含んだ土はいつまでも乾きません(図－23)

・水はけの悪い土地

この場合は四方にしきいを作り外部からの雨水をふせぐ方法しかありません。ここで、問題になるのは、四方にしきいを作ることによってグランドシートが盆地のように囲まれてしまうことです。

今日のドーム型テントはフライシートと本体が近すぎ、しかも素材のナイロンは水にぬれると伸びるという性質をもっていますので、雨が少し長く強く降るとテントとフライはビッタリとくっついてしまい、雨水がしだいに染み込んできます。加えて風が吹こうものなら弾力性のあるフレームは前後、左右、上下にたわみ、寝ている人の顔やテント中に雨水を振りまきます。また何かの拍子にしきいがくずれたりして雨水がテント内に入り込む恐れがあります。

いったん水が入ってしまったらグランドシートの上はプールと同じです。平坦な水はけの悪い土地では雨水の行き場がありません。

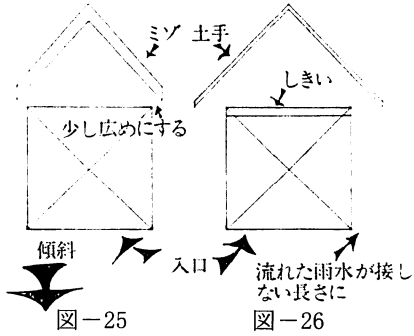
このように、水はけの悪い土地でドーム型のテントを張るときは細心の注意が必要です。

やむをえず水はけの悪い平坦なサイトでドーム型テントを張るときは下に新聞紙をしきましょう。もし雨水がしきいを越えて入ってきたときも新聞紙が少しは防いでくれます。また、はっ水性防水のきいたグランドシートはある程度なら浸水を防ぎます。

傾斜のある場合

・水はけの良い土地

基本的にはミゾを掘る必要はありませんが斜面の下の方にテントを張った場合、上から流れ下ってくる雨水に心配のあるときは図－25のようにくの字型にミゾを掘ってください。これで一度水を染み込ませてしまいます。



図－25　図－26

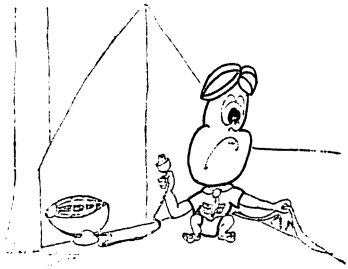
このミゾは十分に幅を広く掘り、もしあふれても直接雨水がテントに接しないだけの長さを取って掘りましょう。

・水はけの悪い土地

図－26のようにくの字型に土手を作ってください。このときは水はけの悪い土地ですので十分にテントから離し、流れてきた雨水がテントに接しないようにします。それからグランドシートの下に一の字型にしきいを作ります。先ほどお話したように平坦な土地にテントを張って水がたまる危険性に比べれば、傾斜地で張った方がより安全です。

移動キャンプ

参考までに移動キャンプの場合をお話ししますと、1～2人用のテントを使用する場合はミゾ、土手などはいっさい作りません。



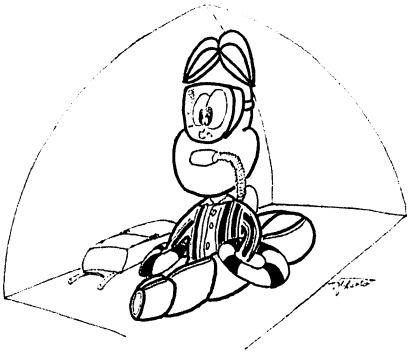
その理由は

① 移動キャンプですので自由にサイトを探せる（私有地はのぞく）ので雨水の流れ道になっていない水はけの良い場所を選べる。

② テントが小型なのでテントの屋根をつたい落ちる雨量が少ない。

③ 滞在時間が短い(12時間前後)

④ 水が入ってくることを想定していつも防水のスリーピングバックカバーを寝袋と併用する。



当然ですが、辺りの地形、水はけ、雨水の流れ道をよく読むことがいちばん大切です。私も今までにそのようにして一人で移動キャンプをしてきましたが、それでテント内に浸水してきて夜眠れなかったということは一度もありません。

移動キャンプを1人ないし2人で行うには充分な経験が必要とされます。ラジオから天気図を取り、雲の動きなどから降雨の可能性を知り、そのうえで適切なサイトを選ばなければなりません。

基本がしっかりできていないのに高度なことを望んだりすることはたいへん危険ですので、今は基礎トレーニングをしっかりと積みましょう。

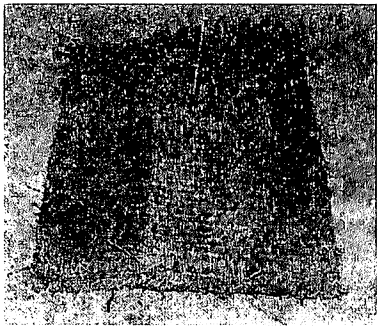
結局ミゾと土手のお話しをしてきましたが、手間のかからない方法がけっきょくキャンパーにも自然にとっても良いのだということがわかったと思います。大雨注意報の出ている場合、台風が接近している場合については、ベースキャンプ、移動キャンプとともに後載いたします。

グランドシートの下の整地

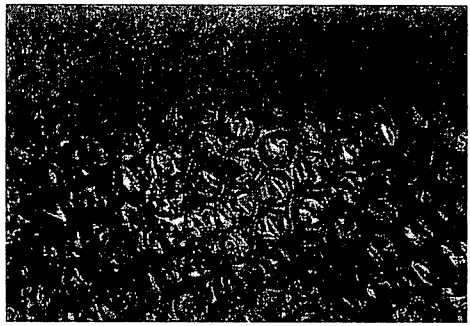
以前は天気の良い朝はテントのウォールを上げてテント内を乾燥させ、グランドシートをはずし床の部分の土を掘りおこし、毎朝整地したものでした。そうすることによってちょうど毎日ふとんを干すように軟らかく、気持ちのよい寝床にしていたわけです。

しかし今回のようにキャンパーがふえ「人間と自然の接点」であるキャンプ場に多くの人が出入りするようになっては、その整地さえも自然を荒しているのと同じことなってしまいます。自然を強引に変えて快適さを得るのではなく、

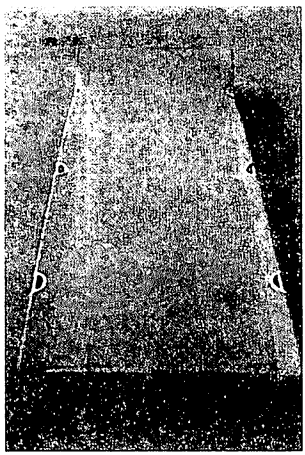
自然にはなるべく影響を与えないようにして生活をしていくことが望ましいのです。いつもふかふかのふとんに寝ている文明人には土のわずかな起伏はむしろすばらしいリフレッシュメント。寝ようとするところにたまたま石が飛び出していたら取ってもかまいませんが、あくまでも自然の中で勉強させてもらっているんだという謙虚な気持ちを忘れてはなりません。



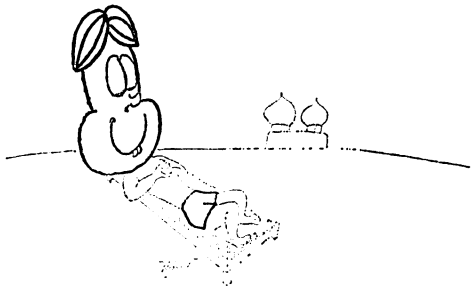
昔よく使われたムシロ



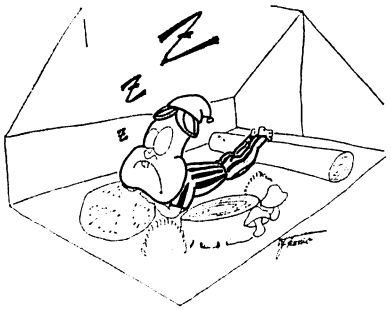
お菓子の缶などに入っているこん包材。
断熱性にすぐれている



市販されている簡易ベッド



キャンプサイトにおける外界とのしゃ断について



ミゾや土手の形をこまごまとお話してきましたが、テントやその付属構築物の目的が完全なる外界からの影響のしゃ断であるとの印象を持ってしまわないよう希望します。

テントを張り、それをグランドシート、さらに各種のマット類、それでもたりないならいっそのことキャンプベッドだと、シンプルなはずの野外生活も考え方を少し変えるだけで際限のないエスカレートを見せはじめます。“そんなにまで完全な外界とのしゃ断が希望ならバンガローを利用する方が、いや、いっそのことカントリーハウスでもお建てになったらいかがでしょう” たしかに、キャンプは安全で快適であるはずですが、それは自然から自分を隔離することではありません。そんなことなら、わざわざ自然の中に出向いていって生活をすることはないわけです。できるかぎり安全と快適さを確保しながらも自然と一体化して生活するというのが本来のねらいであるはずです。

そんな生活を実現するために、1度グランドシートを使わずにテントを張ってみるのもおもしろいのではないでしょうか。

つまり、テントの中も外と同じように草が生えたままで、かろうじてテントが区切った草原が君の一夜の寝床となるのです。そこに直にしいた寝袋に横たわれば、草の香りが君をとりまきゆっくりと大地に沈みこんで自然の一部と化していく自分自身をみい出すことでしょう。全身を包む緊張と安堵感、そして充実感、グランドシート1枚で、キャンプイメージはこんなにも変わってしまうものなのです。たった一枚の布片が、これほどまでに外界と人間をしゃ断していたのか、きっと君も驚かされることでしょう。

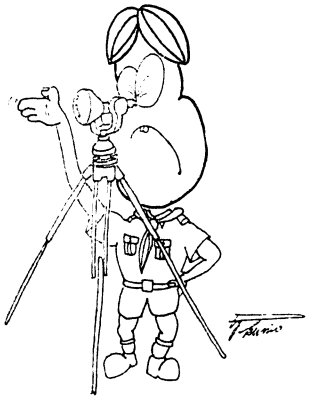
こんなことを書いてきたからといって、何も私は用具を使わずにキャンプをせよといっているわけではありません。一度シンプルで基本的な生活を試してみれば、現在市場にあふれている野営用具や関係書物に書かれていることがらのうち何が大切なのか、信じるに値するのかを見きわめることができるも

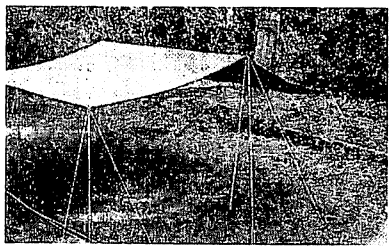
のだと言いたいのです。用具に頼りすぎたり、またまったく無頓着であったりすることは、自然の中にあっては、大きな危険をまねきかねないのです。現時点で得られるもっともすぐれた用具を見極め、使いこなせること、またもっとも基本的な用具だけで生活できること、という2つはともに野外生活を楽しもうとする者にとっての両端のゴールであるといえます。

■マーキー

マーキーテントの張り方

キャンプの期間中ずっと、晴れの日が続くということはまずないでしょう。雨が降ってもプログラムを円滑に進めることができるよう、多くの隊でマーキーが使われています。各班に一つずつ支給している隊もかなりあるようです。マーキーはなにも市販されているものでなくても、大きなシートが一枚あれば十分代用することができます。雨の多いわが国では、マーキーはキャンプの(準)必需品といえるのではないでしょうか。



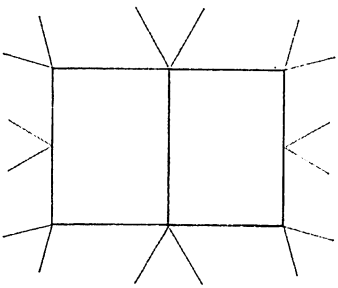


写真－1　小型マーキー

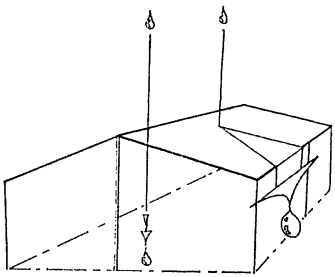
はじめに市販のマーキーについてお話ししていきましょう。

市販されているマーキーも(基本的には)テントを同じく2人で張れるように練習しておきましょう。

まず第一の問題は、サイトのどの辺にマーキーを張るかということです。張る前に、張りあがった後のことを考えてください。



図－1

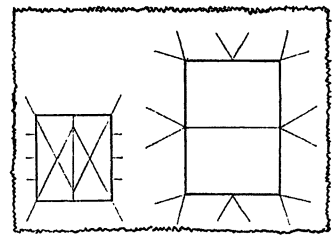


図－2

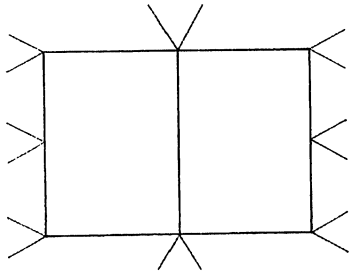
マーキーはわりあいに高い位置に張ることから、どこからでも自由に出入りできると錯覚しがちですが、これも出入りしやすいところとそうでないところがあるのです。写真－1をみてください。これはボーイスカウトでよく使われる小型のマーキーです、布の大きさはタテ4m、ヨコ6mですが、実際に張るとタテ4m、ヨコ5.8mということになります。そして張り綱が四方八方にのびています。(図－1参考)これでもう出入りしやすいところとそうでないところのあるところのあることがわかったと思いますが、もう一つちょっと気がつかなったポイントがあります。マーキーはリッジ(むね)ポールを頂点にして、その両側の辺に向かって下向きのなだらかな傾斜をつくります。もちろんマーキーには雨どいなどはついていません。そこで雨が少し強く降ると出入りがわずらわしくなります。(図－2参考)

そこでいちばん無難な張り方は図－3のような配置ということになります。

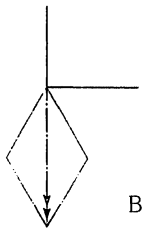
図3



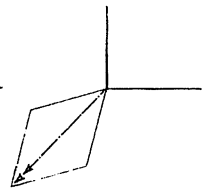
図－3



図－4



図－5



図－6

マーキーの張り綱の方向については、私も以前図－4のように張っていたことがありました。しかし前にお話ししたように、四隅の張り綱はシートの中央あるいは45度方向の延長線上に向けて引かれていなければなりません。つまり図－1のように張ることでバランスよくシワのない、そして頑丈なマーキーが張れるのです。

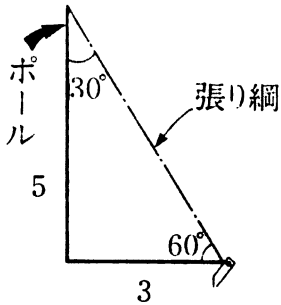
みなさんは理科の時間に合力と分力というのを習ったと思います。2本の索で張られるものは、平行四辺形の法則により、たとえば図－5の場合ならA方向に引かれていることになります。図－6のように張ったときにはじめてB方向に引かれるので、マーキーを張る場合に有効となります、(学校の勉強もおろそかにできませんね！)

位置と向きが決まったら、いよいよ設営です。まずシートを広げて、メインポールの立つ位置に印をつけます。このときにサイドポールの位置に印をつけておくと、そのあとの作業がやりやすくなります。

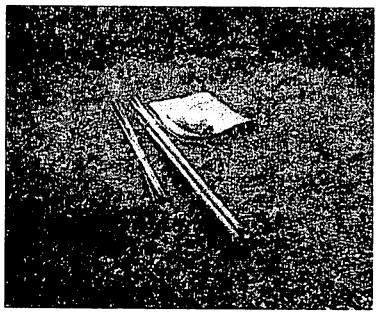
メインポールの長さとポールの基部からペグまでの間隔(直角方向)を5:3にすると、十分な強度でしかも綱やスペースのムダをはぶくことができます。表－1は種々の長さのメインポールに対し、どれくらい親綱のペグを離せばよいかをまとめたものです。ただ、これらの数字は一つの目やすなので5cmや10cm違ってもどうということはありません。まき尺など持ち出さずに目測でするのがスカウト的というものです。

表－1

ポールの長さ	:	線A,Bの間隔	参考
2.5m	:	1.5m	
2.0m	:	1.2m	
1.8m	:	1.08m	1.1mで良い
1.7m	:	1.02m	1mで良い
1.5m	:	0.9m	
5	:	3	



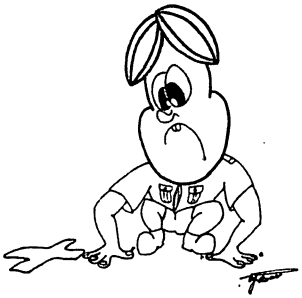
たとえば、君たちのマーキーのメインポールの長さが2.5mだとするなら、ポールを立てる位置から1.5m離して線A(マーキーの縁線)と平行な線Bを引きます。この線Cから左右それぞれ1.5mの点DEを求め、これを親ペグの位置と決めます。これで平面的には90度の角度で親綱がふり分けられたことになりますが、立体的に見れば、2本の親綱はだいたい60度でペグの方向に向かっていることになります。

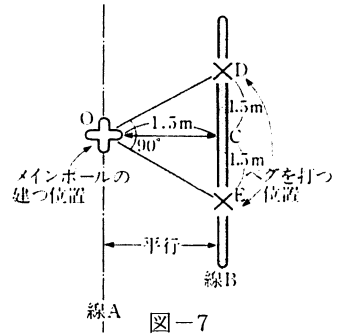


写真－2　張る位置を決める

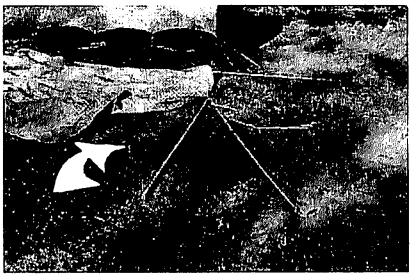
以上の準備が終わったら、親綱を適当な長さに調節してペグにかけ、両方のメインポールを一気に立て上げます。マーキーが立ったらただちに親綱のランナーを調節して自立させます。

マーキーは両側の軒を何本かのサイドポールで支えますが、これはそれぞれ中心のポールから立てていきます。方法はメインポールとまったく同様ですが、ただ角綱だけは前に説明したような方法をとるようにしてください。

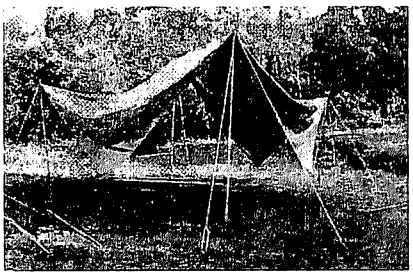




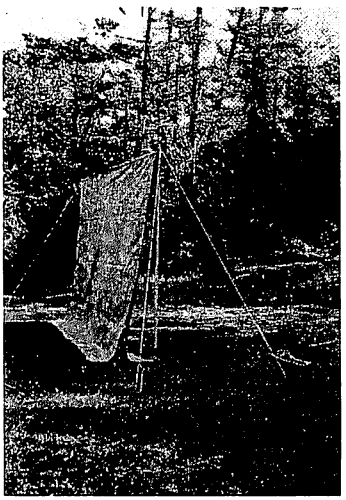
図－7



写真－3
90 度にのびる方向にペグを打つ

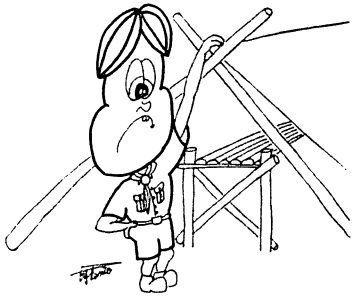


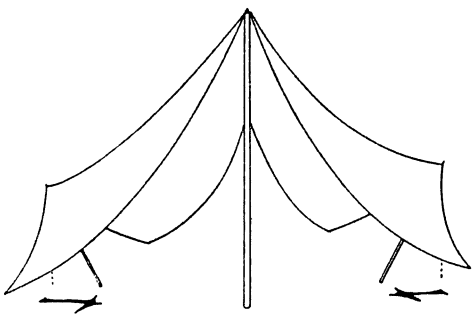
写真－5
3 本のサイドポールの中央から立てる



写真－4　自立させる

マーキーはグランドシートがないので、テントのようにあらかじめ床を決めることができず、したがって最初からペグの本打ちをすることができません。たとえばシート本体の長さは6mでも、これを屋根型にすると5.8mになってしまうことは前回お話ししましたが、しかしこれも理論の上のことで、実際にはサイトの傾斜や起伏によってシートはある方向にたるみを生じ、本来の寸法に影響を与えてしまうのです。





図－8

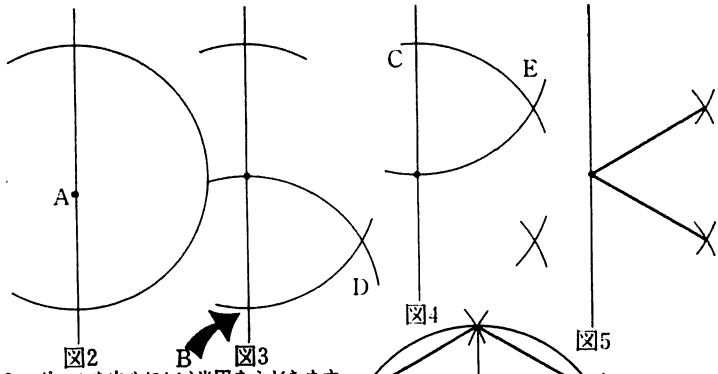
サイドポールを立てるときには、最初から垂直にせずに、まずポールの基部をテントの内側にもってくるようにして立てます。こうすれば張り綱をピンと張らなくても自立します。中央のサイドポールが立ったら、四隅のポールも同じように立てていきます。

6本のサイドポールがとりあえず立ったら、張り綱を調整してポールを一本ずつきちんと垂直に立てていきます。

張り綱の方向やマーキー全体の形を確認しながらペグを本打ちしていきます。メインポールと同じ要領でペグを打ってください。

・簡単な60度の出し方

十分な時間があってもう少し教科書通りに綱を張りたいのでしたら、簡単に60度を見つける方法があります。用意するものは1m以上の麻ヒモこれ一本です。あとは図－2～5にしたがってえがいてください。これは技術の時間などに習う正六角形の書き方の変形ですね。ですから麻ヒモの長さは1mでも1.5mでも正確な60度がえがけます。ただしこれもサイトに変な起伏があると、正しく60度に張られたためにかえって張りを弱くしてしまうこともあります。杓子定規にやることがいつでも最善だとはかぎらないのです。ランナーを調整してもシートのたるみがなくならないようでしたら正しく張られていないのです。ペグを打つ位置を変えましょう。



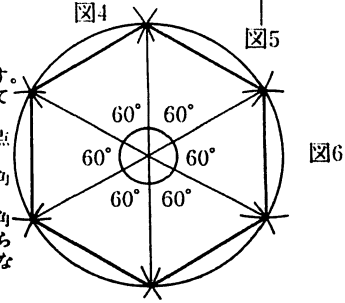
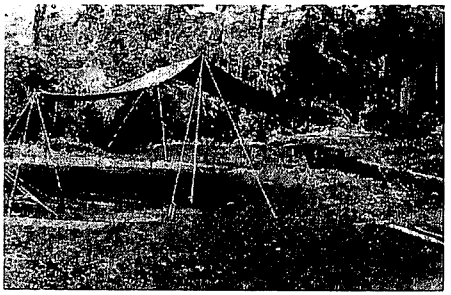
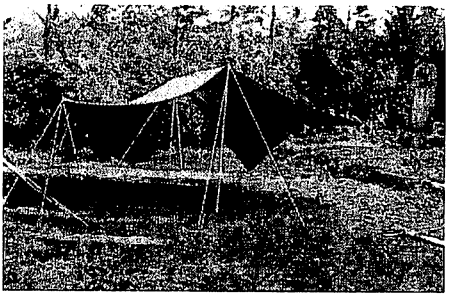


図2　ポールを中心に(A)半円をえがきます。
図3　B点を中心に同じ半径で弧をえがいてください。その交点をDとします。
図4　同じようにCを中心に弧をえがき交点Eを見つけましょう。
図5　AからE，D方向にのばし，できた角度が，まさしく60°です。
図6　これは技術などの時間に習う「正六角形の書き方」の変形ですね。ですから麻ヒモの長さは1mでも2mでも正確な60°がえがけます。

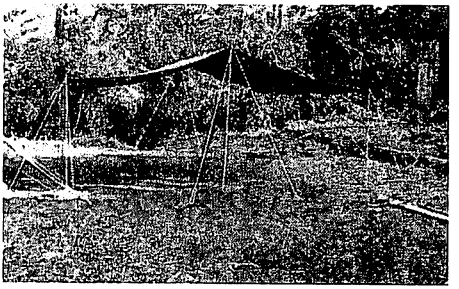


写真－1　ポールを内側にもってくる



写真－2　どうにか張れた形

写真－3　サイドポールを1本ずつ垂直にたて、張り綱を調整

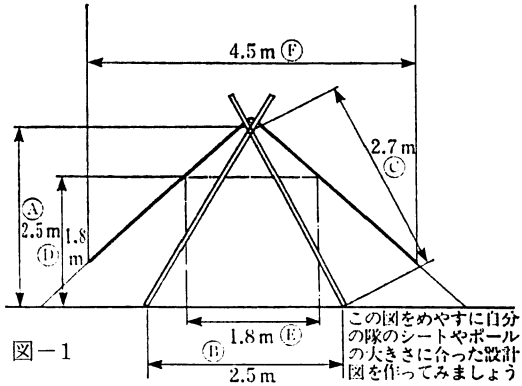


写真－4　これで完成

マーキー作り

今度はありあわせのシートを使ってマーキーを張ってみましょう。用意するものはシート、長めのポールや竹、あるいは水道管や細めの丸太などを5本、それにペグとロープが少々です。

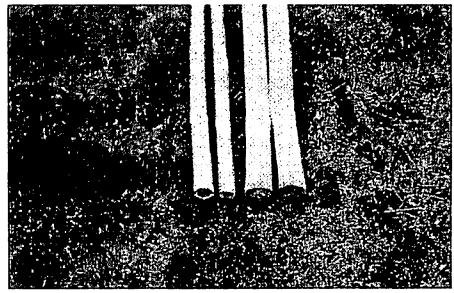
まず張ったときどれぐらいの高さが必要なのかをよく考えてフライの高さを決めます。



図－1

ここでは2.5m、図－1のような高さにしてみます。これから作るマーキーは図－1のように丸太のまたのところに材木をわたした形のものです。マーキーの屋根は高いほど活動しやすいのですが、逆に高さが増すほど作りにくく張ったあとで風の影響を受けやすくなります。高さをそのままでシートのすそだけむりに広げるとシートがたわみを生じ、雨水に対して弱くなり活動空間もほとんど変わりません。

図－1の例を見てください。長さ3.4mのポールを利用して作るとこのような大きさになります。人がらくに歩ける高さ1.8mのスペースの幅は1.8mです。十分に長いポールが用意できなければ、もう少し小さいのを作ってください。



写真－1　ポールの根元をそろえてから、しばる位置を決める

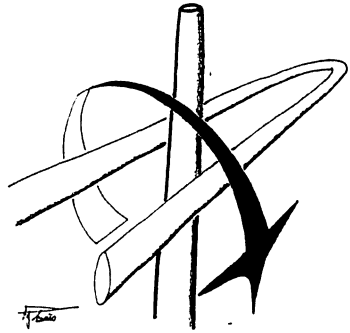
次にポールのすそをそろえ、そこから前ページ図－1のCの長さのところを「はさみしばり」で固着します。竹や丸太などの自然物のポールでは、まったく同じ位置をしばった二組のポールもすそを広げたときに、リッジポールの入る高さが違うことがあります。しかし、このマーキーの下で一年も二年も暮らすわけではありませんから少しの違いは問題としませんが、あまり違うようでしたらすその開きで調節するか、しばり直しましょう。

次に「はさみしばり」の方法を説明します。図－2～図－12を見ながら、実際に試してみてください。

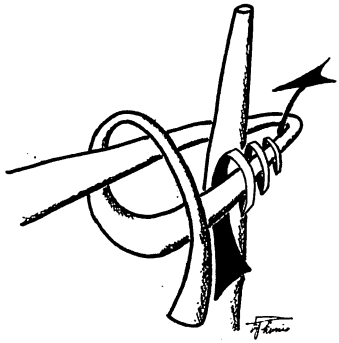
図－2～図－3は「はさみしばり」の一番始めに行う「ねじ結び」です。丸太の周囲1/4をめやすに結んでください。(図－5)

ここでまき結びをするのですが一度にやろうとすると、せっかくきつくしばったロープがゆるんでしまうことがあります。そこで、2回に分けてまき結びをしましょう。図－9のようにロープをとおして下さい。そし図－10のようにもどします。ここでゆるまずがっしりしたまき結びをするコツがあります。図－10のように親指で今巻いたロープを強く押えておいて、いっきに矢印の方向にもどします。これは2本のポールがピッタリと合っているほどかたくやりにくいのですが、どうしてもきつすぎてもどらない時は、ポールの根元を少し広げロープをだましだまし手前に引きます。この図－9と図－10をまったく同じように2度くりかえしますと『あ～ら不思議』立派なまき結びのでき上がりです。このまき結びによる固着の方法は、本に出ているものや先輩に教わったものとは少し違うかもしれませんが、ポールの開き方をまちがえなければ、とても有効だと思います。

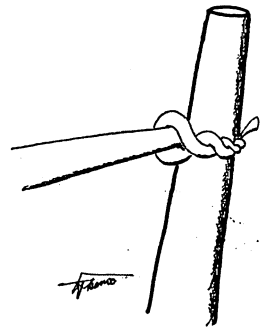
「はさみしばり」
の方法



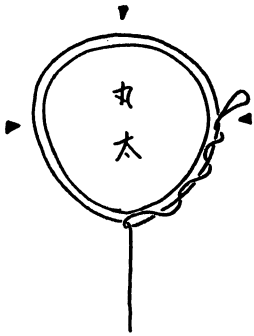
図－2



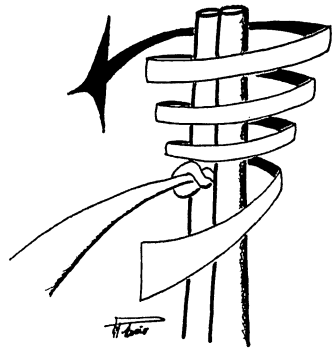
図－3



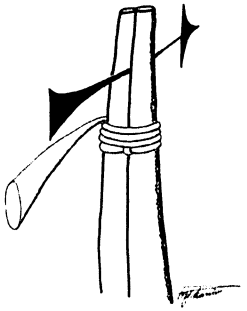
図－4



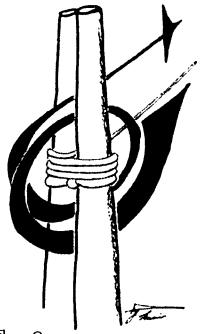
図－5



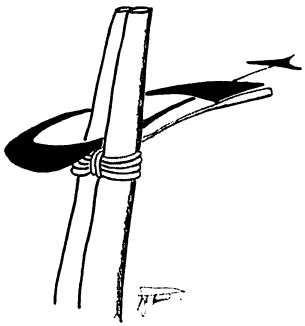
図－6



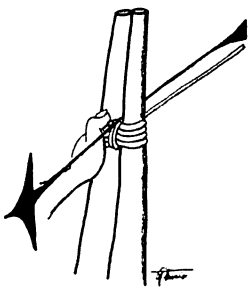
図－7



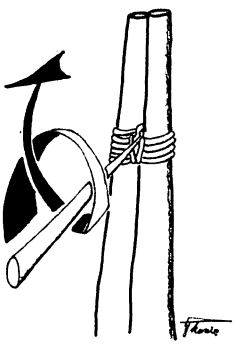
図－8



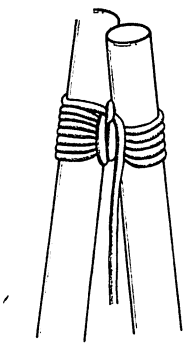
図－9



図－10

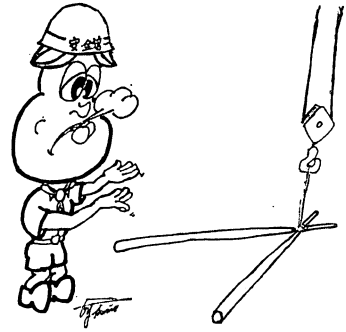


図－11　巻き結びの終わりのところにこのように「とめ結び」を作り、さらに固定する方法もある



図－12　丸太の開き方は必ずこのようにし、丸太が巻き結びの端を押しつけ、ゆるまない形にする

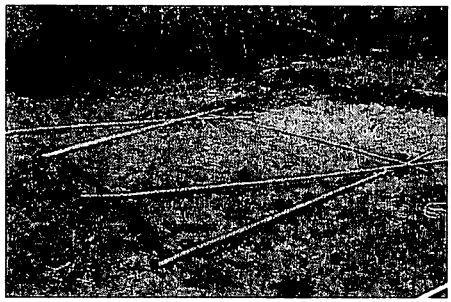
開いた2本のポールのあいだにリッジポールをはさみこみます。



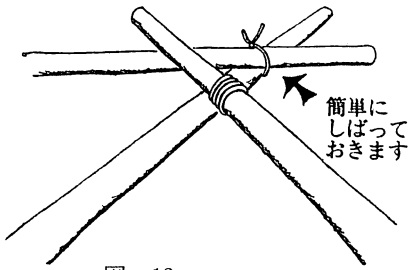
リッジポールは立ちあげるときに、はずれたりしないようシートの長さより十分長いものを使います。(シートの長さが4mなら、少なくとも4.7mは必要です)また図－13のように支柱のどちらか一方の丸太に、リッジポールを簡単にしばりつけておくとさらによいでしょう。(もう一組のポールも同様に)

ポール全体を立ちあげる前に、シートをリッジポールにかけておきます。

前にお話しました市販のマーキーと違い、この場合は2本のポールで支えられているので、加えられる力は半減され方向も狭くなっています。親綱は一本で十分で、片方のポールにねじ結びでしばりつけておきましょう。



写真－2　ポールをはさみこみます



図－13

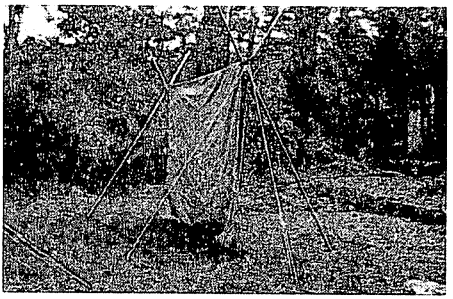
ポールを立てる前にどこにポールがくるのか位置を決めておき、その位置から「マーキーテントの張り方の表－1」を参考にペグの位置を出し、あらかじめ打っておきます。このマーキーはポールが4本あるので、立てるときは1人が1本のポールを支え4人で立てましょう。2人で無理に立てるとそのままくずれたり、ロープが切れたり、竹のポールなどは折れたりすることがあります。声をかけて、みんなでいっきに立てるようにしましょう。

ポールが立ったら手早くメインロープを張り、自立させます。

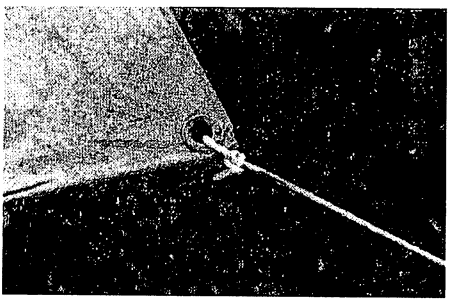
フライシートの両サイドのハトメにふた結びをしたり、写真－5のように二重とめ結びや二重8の字結びを作り、そのループをハトメに通して小枝などをはさみ固定します。二重とめ結びは一度しまるとほどきにくいので、このマーキー専用の張り綱にするのでなければ、ほどきやすい8の字結びにしましょう。

写真－7は表側からは正しく結ばれているように見えますが、裏から見るとロープが途中で交差しています。これは一か所に力が加わりすぎたりしてほどきにくくなります。ロープを二重にして結ぶときはよりを直しながら、交差することがないように結びましょう。張りの強さの調整はロープの他端で、トートラインヒッチを作って行います。

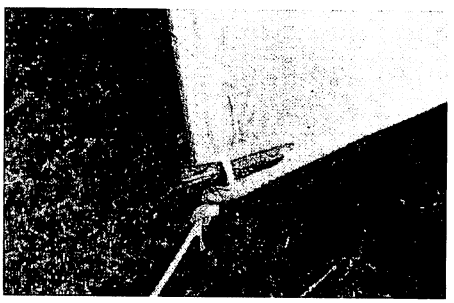
ポールは誤ってけとばされたりして位置がずれることがありますので、ポールの足元にペグを打ちこみ、はさみしばりで止めてください。(写真－9)



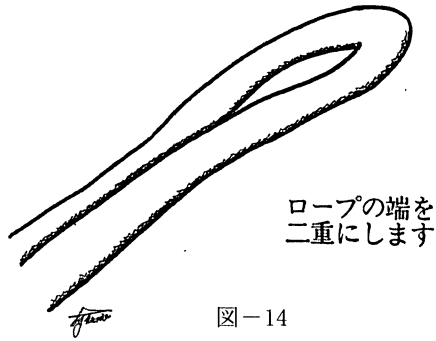
写真－3　メインロープは1本でも十分です



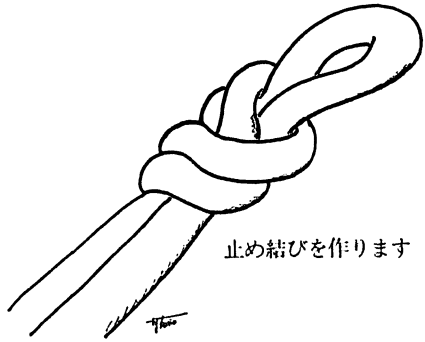
写真－4　ふた結びをする



写真－5　二重とめ結びで張る



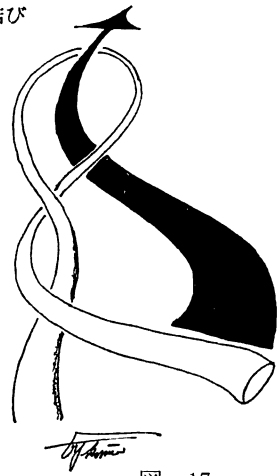
図－14



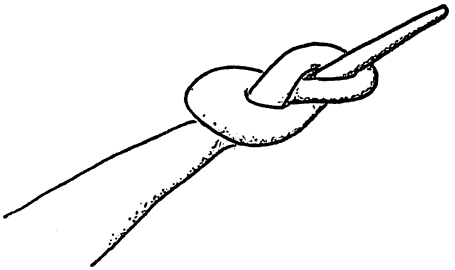
図－15

8の字結び

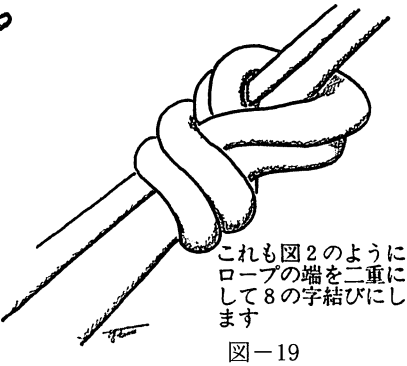
図－16



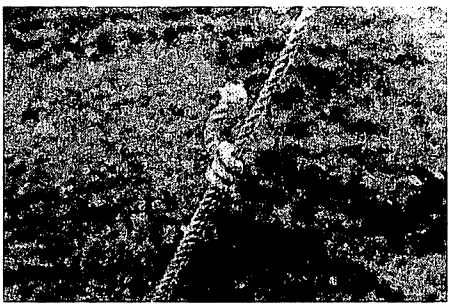
図－17



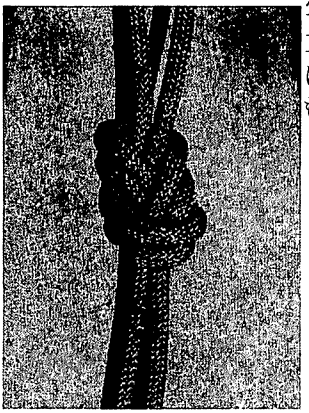
図－18



図－19

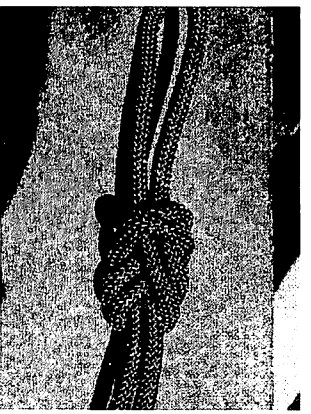


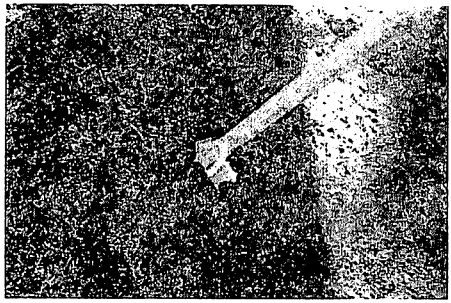
写真－6 トートラインヒッチでとめる



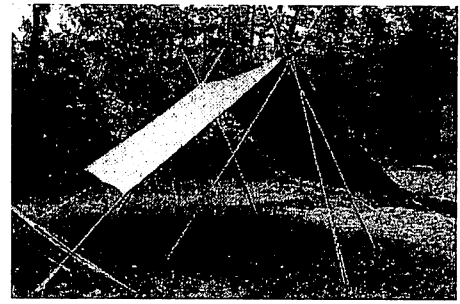
写真－7
正しく結ばれているように見える8の時結びも・・・・・

写真－8
裏から見るとできていません





写真－9　はさみしばりで固定



写真－10　張り終えたマーキー

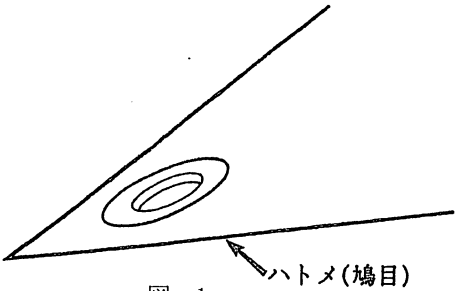
リッジポールのない手作りマーキー

リッジポールに使う長いボールや竹がないときは、中央のハトメの部分（ハトメのない場合は後載します）にロープを掛けて張りましょう。ハトメにロープを掛けるには、前項で紹介した図の方法以外にも、図－2のように8の字結びを利用して止めることができます。

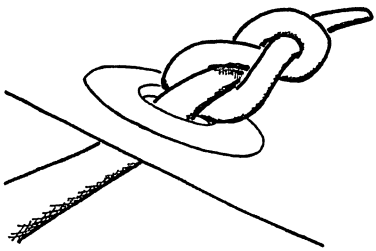
リッジポールを使わない場合の欠点はシートが大きく重たいので、むね（リッジ）の部分にアーチ形の大きなたるみができてしまうことです。便利なことは、前後のポールを別べつに立てられることです。

図－3のように、親綱を2回掛けまわします。まき結びなどでガッシリと止めたくなりますが、これはただ止まっているという程度で十分です。それにまき結びなどでは、水にぬれるとほどきにくくなり、あとがめんどうです。ポールを立てる前に親綱をペグに掛けますが、マーキーに使う大きく重いシートでは、張り終えたあと内側に引っぱられるので、リッジポールのあるものより余分な力がポールに加わってしまいます。ペグはリッジポールのある場合のように5:3ではなく、1:1というゆるい角度で遠くのほうに打ちましょう。しかし、くずれやすい土質では、角度だけでカバーすることはできませんので、大きめのペグを使って強度を高めるようにします。

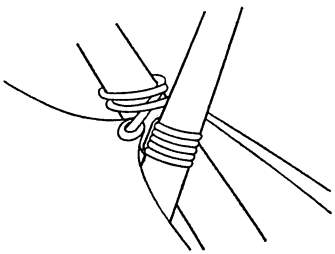
サイトが狭くて張り綱を長く伸ばすことができないときは、緊張保持といってふつうのペグと長いペグを組み合わせて補強する方法があります。ペグに無理な力が加わると、そこの土が浮き上がり抜けてしまいます。



図－1

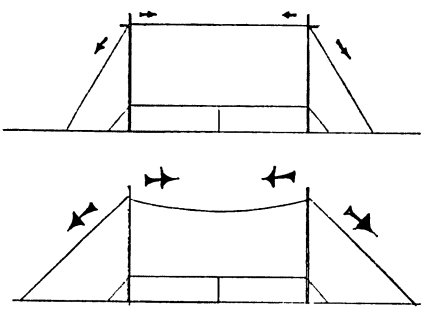


図－2

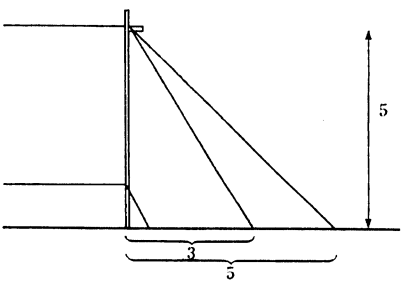


図－3

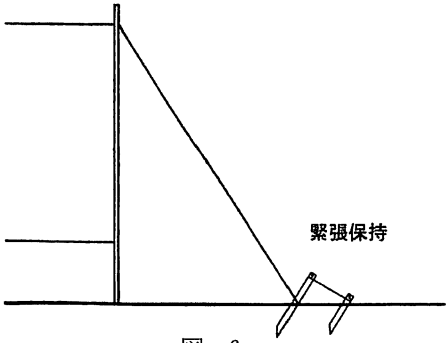
その弱点をカバーするために長いペグを強い、そのペグの上部をさらに別のペグで固定してしまうのです。



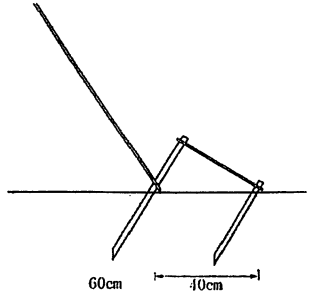
図－4



図－5



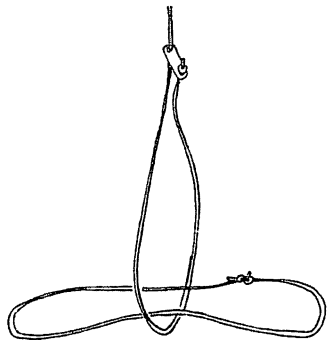
図－6



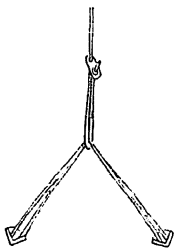
図－7

図－7を見てください。40cmは地中に打ち込む必要のあるサイトでしたら、60cmほどの長いペグを地上部分を十分に残して打ち込みます。そのペグのうしろ40cmほどのところにふつうの長さのペグを打ち、別のロープの上部どうしを固定します。この結び方は次号で紹介します。

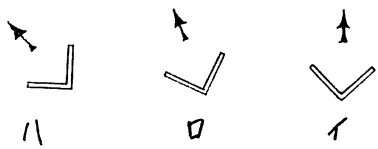
しかし、問題は60cmものペグをどのように調達するかです。そのへんに落ちている枝では、ちょっと間に合いそうにありません。



図－8



図－9

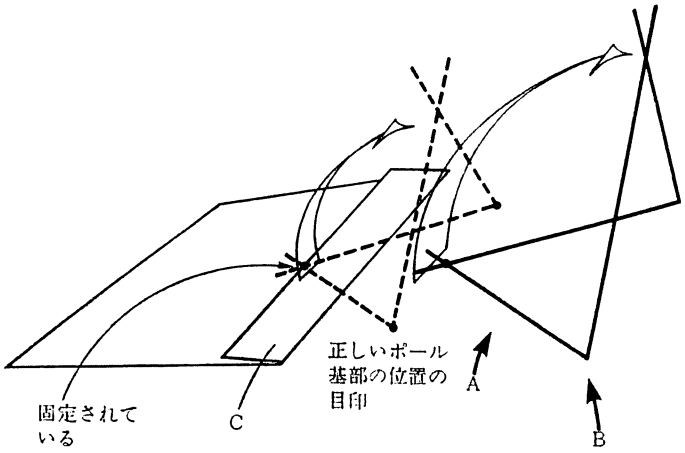


図－10

緊張保持ほど強力ではありませんが、ふつうの長さのペグだけでも強度を増すことができます。図－8を見てください。トートラインヒッチやランナーでできたループの中に、輪にしたロープを通します。その輪の両端を図－9のように2つのペグに掛けます。つまり一本のロープにかかる力を2つにふり分けてしまうのです。この方法では図－10のロのように、ペグの正面が正しくロープの交点方向を向くように打たなければ、最大の保持力は得られません。

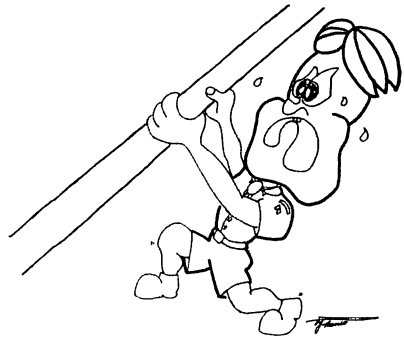
ペグも打ち終わり、すっかり準備が整いました。この段階までは、ポールを図－11のAの位置に横たえて作業をしてきたはずです。しかし、このまま立てたのではポールの位置はBにきてしまいます。あるいは立てながらポールを正しい位置に移動させるようなことをしなければなりません。

そこで正しいポールの位置を確認して目印をつけ、シートとポールがCのようになるまで部分移動させ、ポールを点線の位置に横たえます。

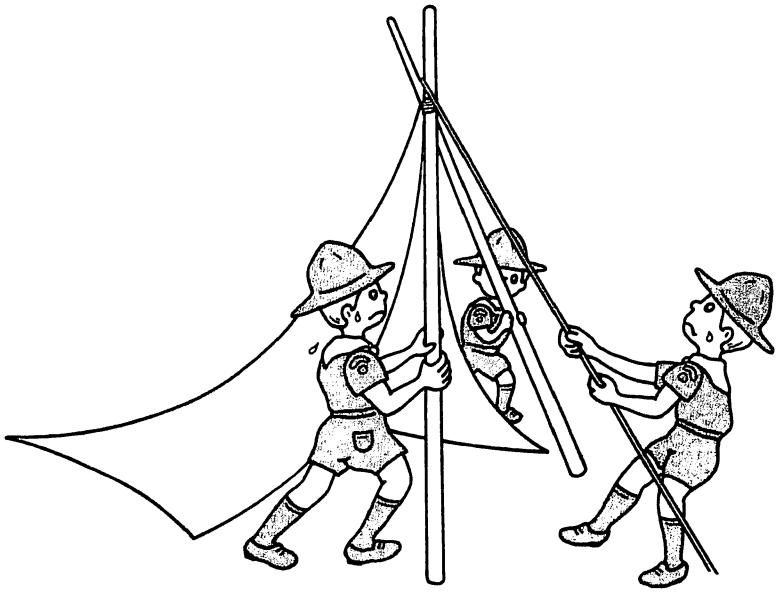


図－11

さあ、それではマーキーを立ち上げることにしましょう。

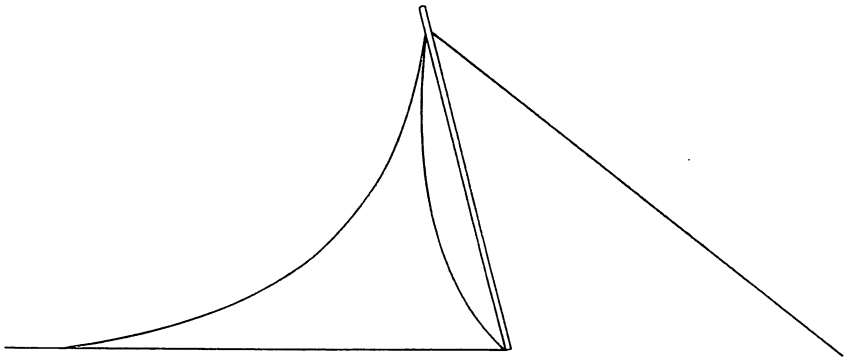


これが班用のマーキーとすれば、そんなに多くの人手が得られるわけではありませんから、片側ずつ立てていかなくてはならないでしょう。しかし、少なくとも全行程では4人必要になります。つまり各ポールに1人ずつ、張り綱に1人、そして後の側のポールを起こすときに先に立ち上げたポールを保持する1人です。(図－1)



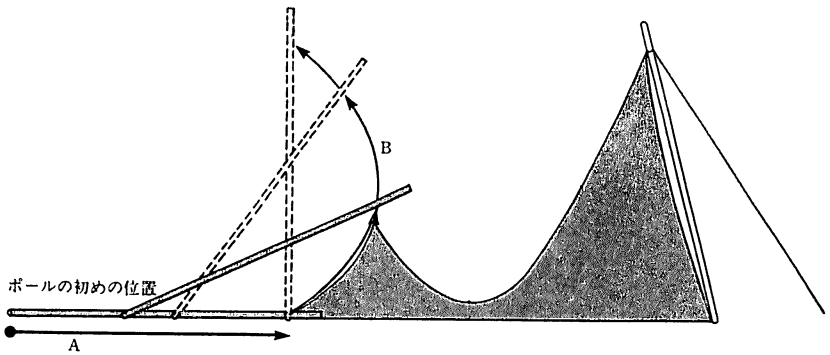
図－1

最初に立ち上げる側のポールは、完全に直立させず、やや内側に寝かせぎみのところで止めておきます。こうすれば、1本の張り綱だけで自立させておくことができます。(図－2参照)



図－2

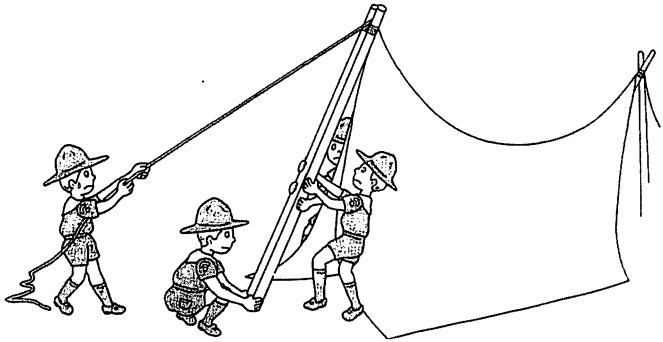
後から立ち上げる側のポールは、最初の側のときとは違ってあらかじめ移動させてはおかず、立ち上げと同時に基部をスライドさせていって、正しい位置にまで持っていきます。この状況は図－3に示してあります。つまり矢印Aのようにポールの基部を移動させながら立ち上げていくことによって、ポールとシートの固着箇所が矢印Bのようにな孤を描いていくわけです。立ち上げの作業前に、正しいポールの位置にあたる地面に目印をつけておくことを忘れないでください。



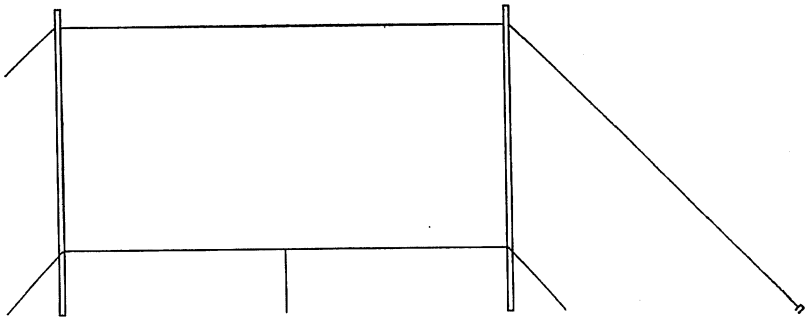
図－3

後の側のポールは、そのまま垂直になるまで立ち上げ、親綱を軽く張っておきます。(ポールを開いたまま立てるのが難しいようなら、図－4のように1つにまとめ、直立させてから広げていってもよいでしょう)

最初に立てた側のポールの張り綱を調節して直立させます。(図－5)両側のポールは、同じ力加減で張られていることが大切です。



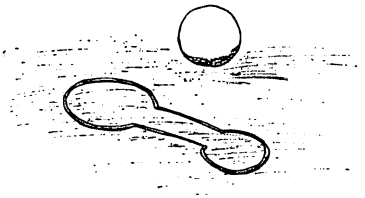
図－4



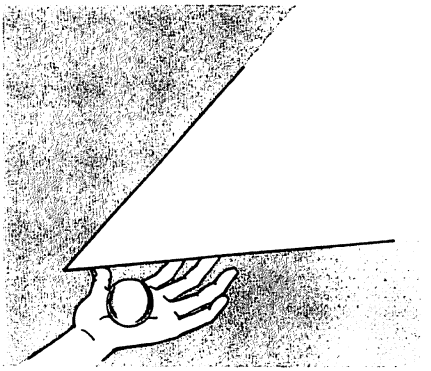
図－5

ハトメなどのない場合

シートにハトメやリボンテープがなく、しかも穴をあけたりしたくない場合には、スポーツ用品店などで売られているビスクランプ（図－1）を用意するとよいでしょう。しかし、何もわざわざお金をつかわなくても、身近にあるものを利用してまったく同じ効果をあげることができます。



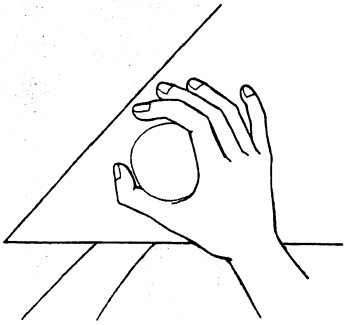
図－1　市販されているビスクランプ



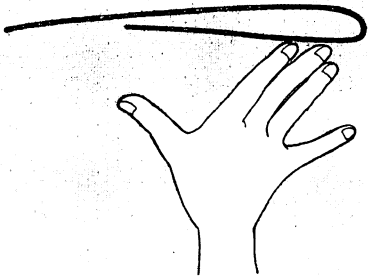
図－2

それにはまず、ゴルフボールくらいの大きさの石、木片、松かさなどを探し集め、図－2～9のようにフライシートの端に近いところでくるんで手がかりとし、それに張り綱をかければよいのです。薄手のナイロン製小型フライなら、ドングリほどの大きさでもOKですし、どうしても適当なものが見つからなれば、新聞紙などをきつくまるめて必要な大きさにしたもので役に立ちます。

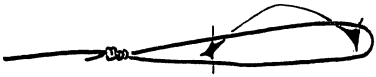
テントを張り、マーキーも立ちました。これから楽しいいろいろなプログラムが。しかし、野外生活を快適に過ごしていくには、毎朝テントを乾燥させたり、夜寝る前に張り綱を調整したりと、まだまだテントに関して知っておかなければならないことがたくさんあります。



図－3



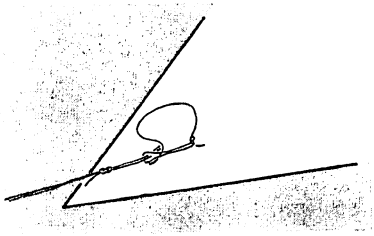
図－4



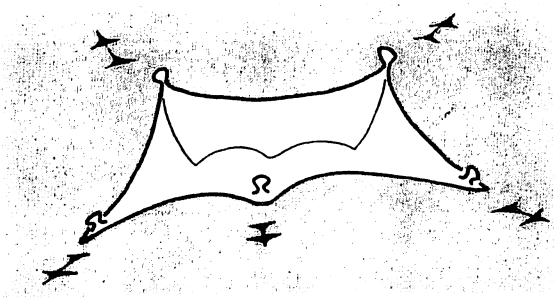
図－5

図－6

図－7

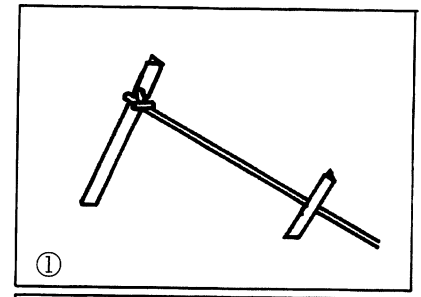


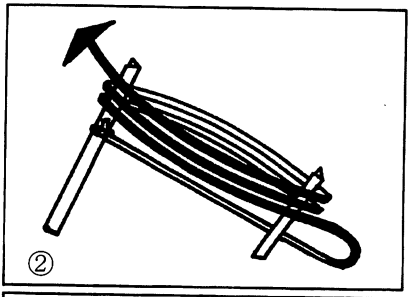
図－8

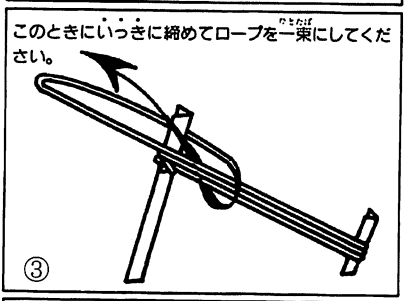


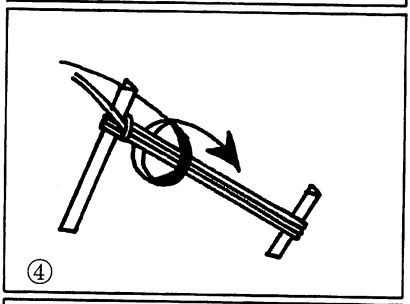
図－9

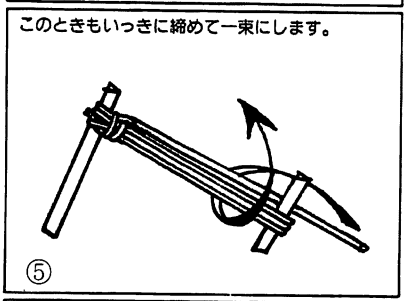
緊張保持の方法

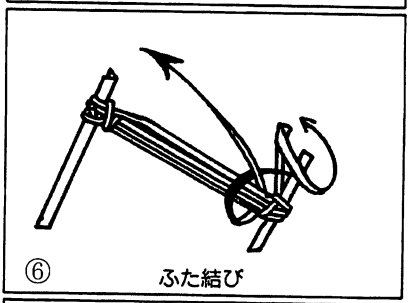

①

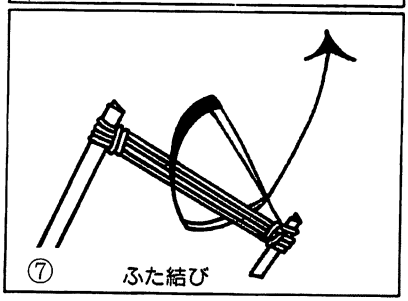

②

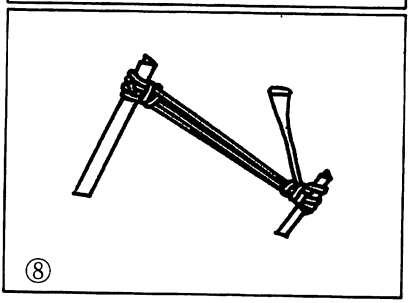

このときにいっきに締めてロープを一束にしてください。
③


④


このときもいっきに締めて一束にします。
⑤


⑥
ふた結び

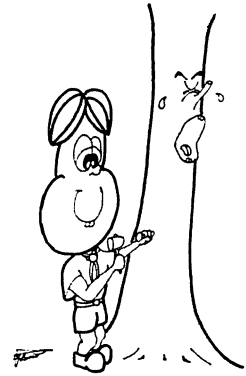

⑦
ふた結び


⑧

■乾　燥

テントの乾燥

山や高原では、たとえ夏であっても、夜は冷えて、テント内は多かれ少なかれ結露が見られるものです。そこでキャンプの期間、毎日、大雨でも降らないかぎり、とびらを開け、ウォールを上げてテントを乾燥させましょう。



グランドシートの乾燥

まずテントの中にある荷物を全部外に出して、一か所にまとめて置き、グランドシートを外してください。

・立ち木の利用

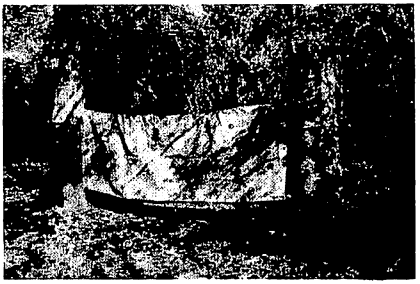
外したグランドシートは立ち木に渡したロープに掛けて乾燥させましょう。

十分に間かくがあり、手でゆすっても簡単にたわむことがない丈夫な幹がありましたら、片側をねじむすび、反対側をトートラインヒッチで結びロープをピンと張ります。木の間隔がグランドシートよりも短いと全部広げて干せず、シワになった部分がいつまでも乾きません。

乾燥させやすくするためには、☆温度が高く☆湿度が低く☆風があることです。湿度は野外では簡単に変えることはできませんから、長い時間日が当たる（森の中では10分もすると日なたは移動していまいます。）風通しの良い所を選んでください。

下草には夜つゆが残っていますので地面の露出している所の方がよいでしょう。高さも十分でないとかけ渡したシートのすそが地面に接っしてしまいます。背がとどかなければ肩車をして適切な高さにロープを張るようにします。またかけ渡したシートは内側がなかなか乾きませんので、30分～1時間したら裏を返すようにします。

写真－1　立ち木の保護も忘れてはなりません

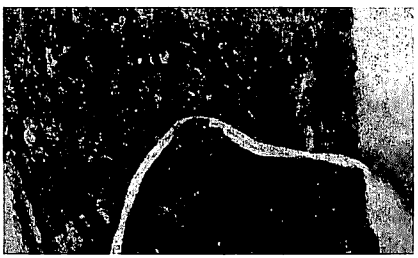


写真－2　森や林の中では日当たりの良い所は少ない

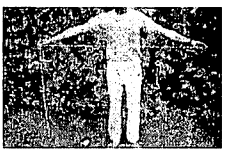
・立ち木の保護

立ち木にロープを渡すときには、厚めの布や新聞紙を巻き付けて樹皮を保護しその上にロープをしばります。樹皮というのは意外に弱く、指でボロボロとはがれます。シラカバの樹皮は紙のようにはがすことができます。しかし、こんなことをすると樹はそこから先のところは枯れてしまいます。もちろんわずかなダメージなら復元することでしょうが、私たちは自分たちのテリトリー（都会、町、村）ではなく自然の中に生活させてもらっているのですから、わずらわしくても、そのくらいの気を使わなくてはなりません。

保護材をとりつけるには、もう一つの理由があります。樹木は樹液（松ヤニ等）を出していて、これがロープにこってりと付いてしまったりすることもあります。ロープの保護のためにも、保護材は役に立つのです。



写真－3　樹木はきづつきやすいのです



写真－4　軽く両手を広げる

写真－5　ひもを二重に

布や新聞紙を止めるには、麻ヒモでそれが落ちない程度にしばれば十分です。麻ヒモはふつう束ねたり、巻き玉にして売られています。たとえば50mあ

る麻ヒモの束を各班に1つずつ配給したとします。何かをしばるたびに、その束をあちらに持っていったり、こちらに持ってきたりしたのでは時間のムダですので、適当な長さに切っておいた方が便利です。

両手を軽く伸ばした長さを一ヒロ(尋)といいます。(写真－4参照)。長さの単位としては一尋は6尺、約1.8mです。これで麻ヒモを測って切っておいてください。

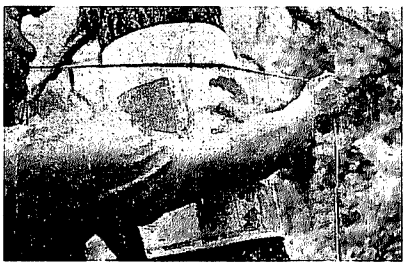
麻ヒモの太さならかさばりませんので2つ折りにした方が(写真－5参照)早く丈夫にしばれます。木の幹が電柱ぐらいの太さなら4ヒロで十分です。

あまりに太い木は手をまわすのがやっと、抱き着いたままどうしようもなくなってしまいます。新聞紙のたての長さが54.5cmですから2まいをあてたとして100cm、直径30cm(LPレコードと同じ)以内の太さの木にとどめましょう。

布や新聞紙をおさえながらヒモをしばるのは慣れないとなかなかうまくいきません。まして新聞紙が2組となるとさらにやっかいです。どうしても1人でやらなければならないなら、口まで動員することになります。

① 新聞紙をまきます

② ずれないようにするのはむずかしい



③ 口を使って第三の手？

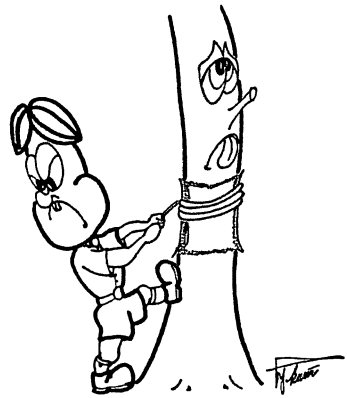
④ 頭を絶対に使わないコツ

⑤ さあもうひといき

⑥ しっかりしばって

⑦ できあがり

結び方について

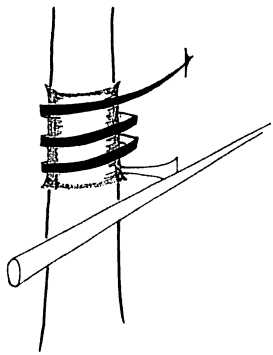


結び方は色々ありますが立っている木や丸太をしばるときには、「下から上に巻き上げる」ということが基本です。そうすれば自然に巻いていくロープがお互いにピッタリと合ってしばり上げることができます。

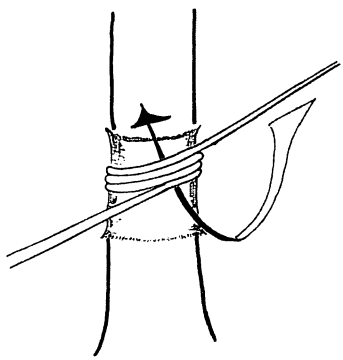
しかし、今回の場合は、布や新聞紙が落ちなければ良いのですから、それほど神経質になったり力を入れる必要はありません。結びやすい方法で行いましょう。

図－1～14の方法でしたら簡単にしばることができ、しかもすぐにほどけます。

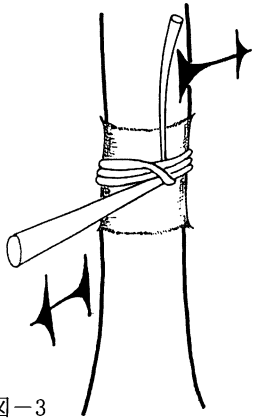
このようにロープの結び方を載せるとコピーなどしてファイルにとじて隊集会に持って行って下さる人がいるそうですが、そのような資料は実際のキャンプにはまったく役に立ちません。ロープワークはロープを使い何10回も何100回もくりかえし練習してこそ身につきます。君たちは自転車の乗り方をどのようにして覚えましたか？まさか図書館に行って自転車の乗り方を読んで乗れるようになった人は1人もいないでしょう。ロープワークも同じです。指先が痛くなるまで、目をつぶってでもできるようになるまで練習しなければマスターできるものではありません。資料はどんなに集めても、それを実際に利用していない人にとっては紙クズと同じです。



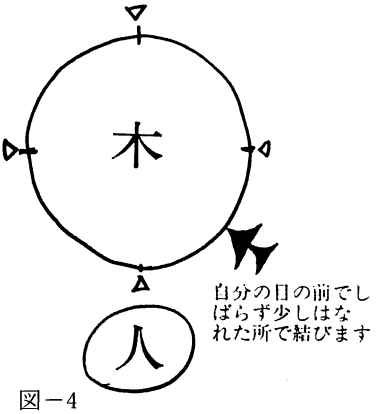
図－1



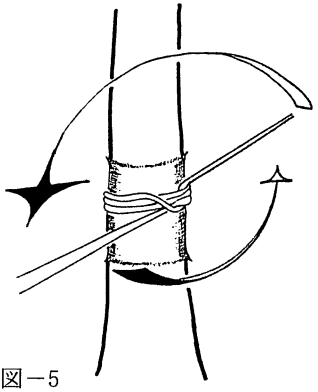
図－2



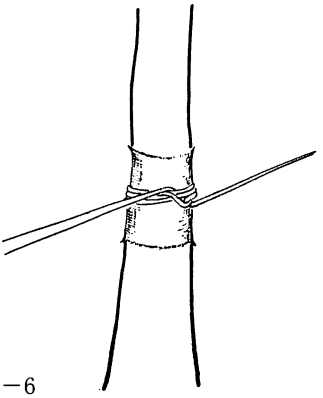
図－3



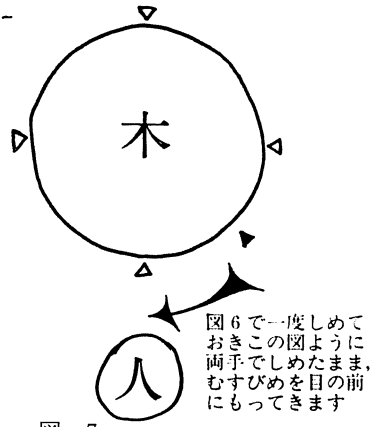
図－4



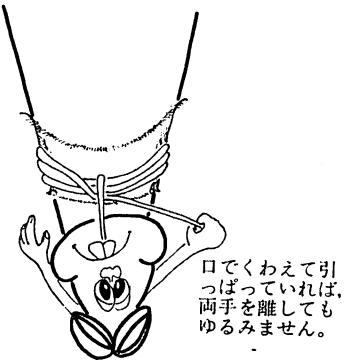
図－5



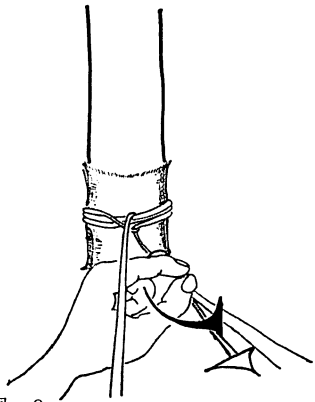
図－6



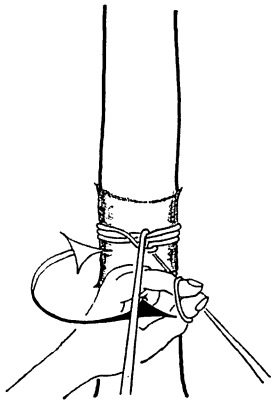
図－7



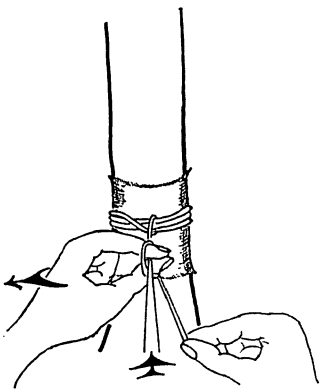
図－8



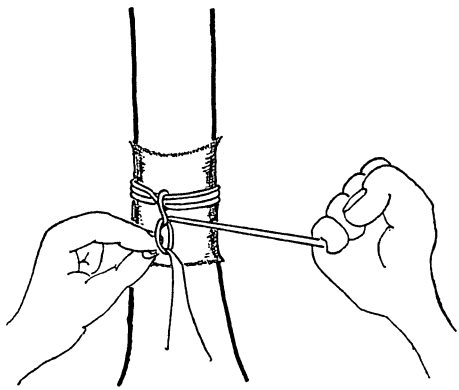
図－9



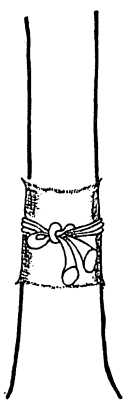
図－10



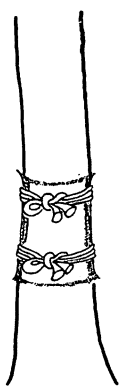
図－11



図－12



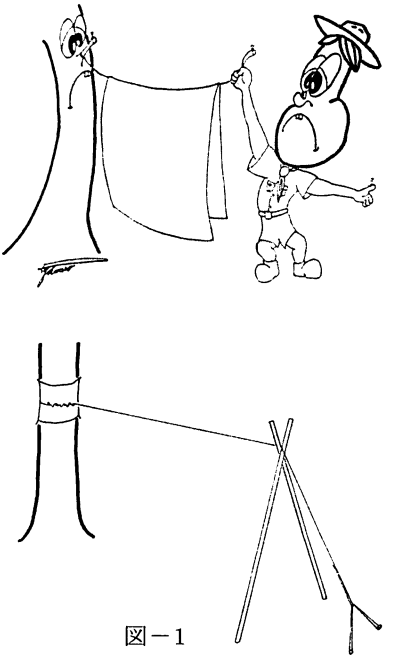
図－13



図－14

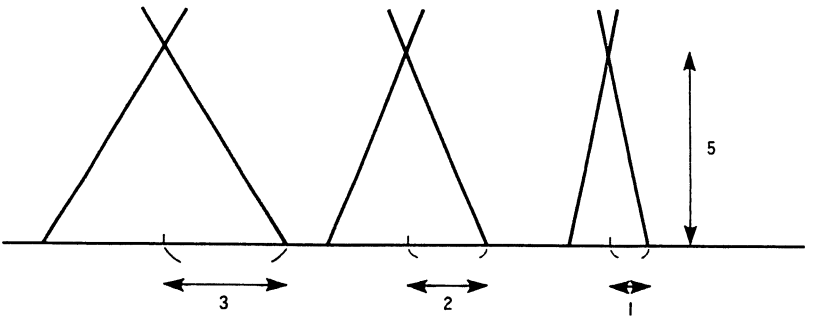
もの干し

グランドシートを干すと同時に寝袋も干しますので、もの干しが少なくとも2つは必要です。しかし森の中でキャンプをしているとはいってもちょうど良い間かくや枝ぶりの木はそう簡単には見つかるものではありません。そんなときには丸太や竹材を利用してもの干しを作るとよいでしょう。



図－1

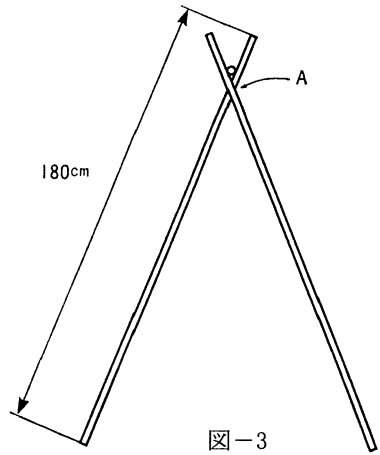
もの干し台にする支柱は5:2の割合で広げるのが安定も良く、特に上から受ける力に強くて丈夫です。(図－2参照)マーキーのところで示した比率は5:2.5で、これに比べると少し広いですね。マーキーの場合には支柱の幅が出入口になります。強さを失わない範囲でなるべく広げ、出入りが楽になるようにする必要があるからです。



図－2

大型のテントのグランドシートは、2つに折っても1m以上はありますし、地面から30cmは離しておく必要があります。また、ロープはどんなに強く張っても中央では20cmはたるみますので、支柱に使う資材は1.8mは必要となります。図－3のA点のところははさみしばりで止めましょう。

地面に接する面に樹脂でコーティングされているようなシートは非常に重く、張り綱に大きな力が加わりますので、補強する必要があります。

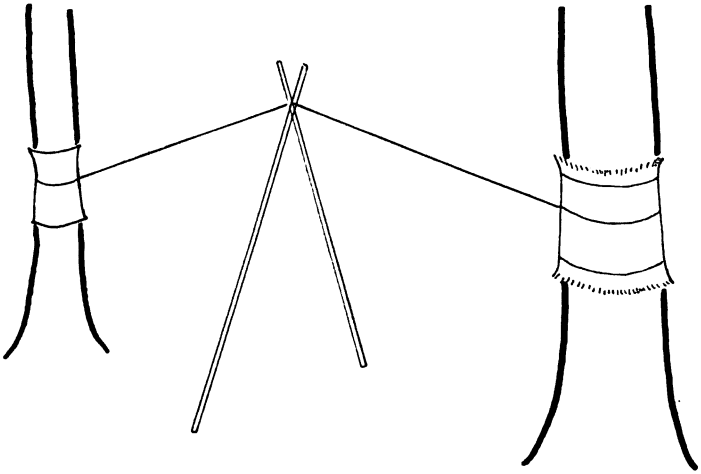


図－3

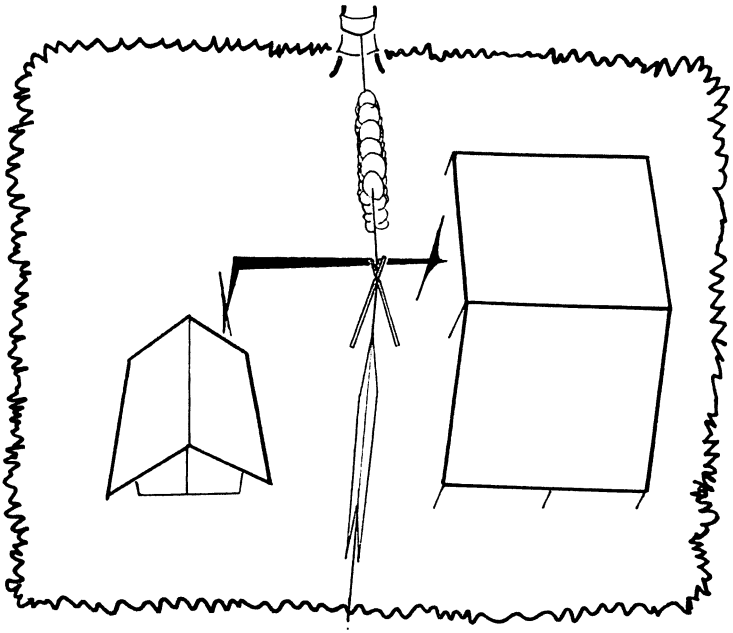
ロープを張りわたす樹が離れすぎているときは、その間に図－4のような支柱を立てるとよいでしょう。こうすれば一度に2つのもの干しができることになります。ただこのとき気を付けなければならないのは、図－5のようにサイトの中央を横切ってロープが張られるような場合、両側のもの干しいっぱいにシートや寝袋を干しますと、サイトの真ん中に壁ができたようになり、活動しにくくなります。一か所、人が楽に通りぬけられるようなスペースを作っておきましょう。

ちょうどよい木があるのに、手前にヤブがあって利用しにくいというときには、図－6のように支柱を中継とすれば、ロープをたるまさずにすみます。このような状況は、野外では結構多いものです。

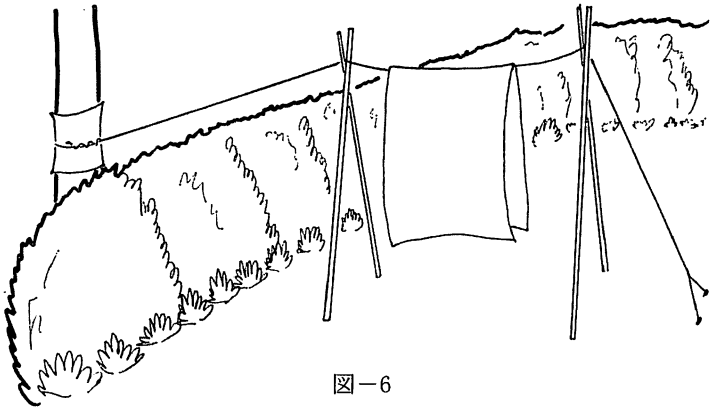
できれば、このもの干し台も図－7のような横棒を渡しておきます。こうしておけば図－8のように支柱を傾けてペグに掛ける荷重を減らすことができるからです。この横ぼうは高い位置にとりつけるとシートを干すときにじゃまになりますので、なるべく低くしましょう。この方法はマーキーを張るときには使わないでください。出入のときに足を引っかけで大ケガをしたり、そのまま支柱を倒してしまうかもしれないからです。矢印のところは角しばりをします。（しばり方は後載します。）



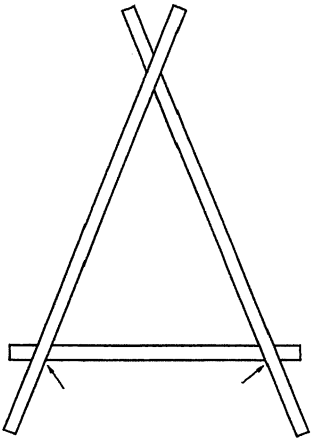
図－4



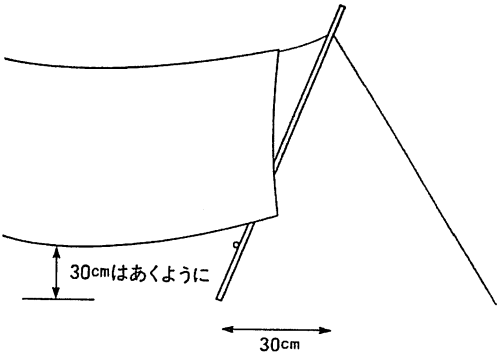
図－5



図－6



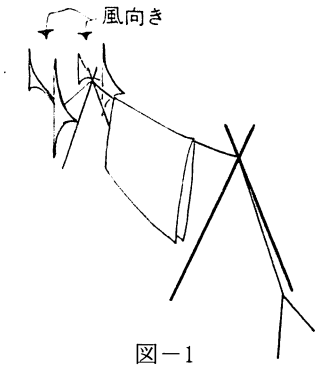
図－7



図－8

・樹木を利用できない場合

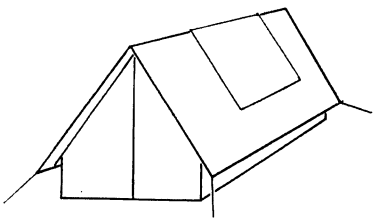
牧場のように開けた所でキャンプをするとしたら、立木を利用することはできません。そんなときに支柱を2組使ってもの干しを作ります。風通しの良すぎるキャンプサイトでは干したグランドシートが風にあおられて、もの干しはかんたんに倒されてしまいます。（図－1参照）風が強く、しかもまわっているようでしたらつぎの「資材がないとき」と同じ方法で干すとよいでしょう。



図－1

・資材がないとき

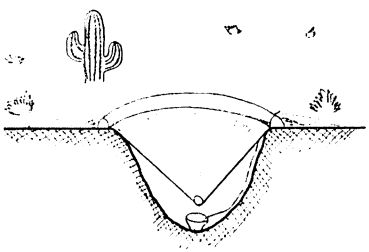
立木が利用できず、またもの干しを作る材料もないという場合は、立て直したテントのフライシートが十分に乾いてからその上でグランドシートなどを干すとよいでしょう。しかし、この方法はリッジポールのないテントではあまり勧められません。



図－2

・地面の上では乾かせない

地面の芝がきれいにおおうように生えている所では、その上にシートなどを広げて干したくなりますが、芝から水分が蒸散していますのでいつまでたっても完全に乾かすことはできません。水を集める方法（図－3）と同じ理屈です。



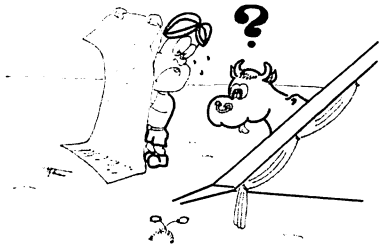
図－3

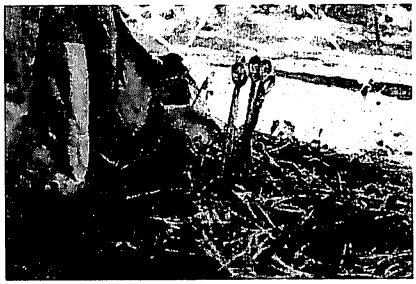
テント本体

グランドシートを外したら、ソドクロースをとめているピンを全部抜いて下さい。抜いたピンは入口の端にさしておきます。そうすればなくすこともありません。(写真－1)

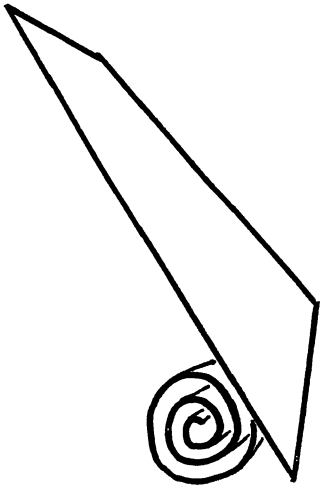
ウォールはグルグルと巻き上げたくなりますが、それでは地面に接していた最も湿っている部分が一番内側になってしまい、乾燥の効果が上がりません。この場合はアコーディオンのようにジャ腹に折って下さい。(図－1)

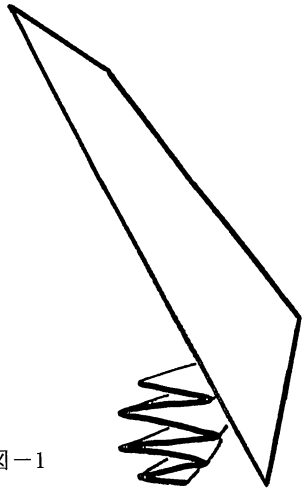
テントにはウォールを上げるためにヒモが2、3か所付いています。これでできるだけゆるくしばり、乾いた空気が通り抜けやすいようにします。(写真－2)





写真－1 ピンはまとめてさしておきます

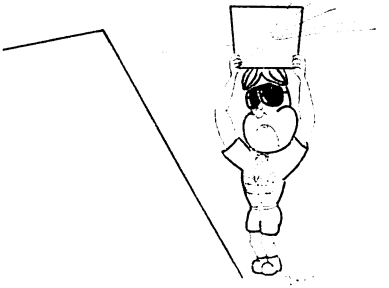




図－1

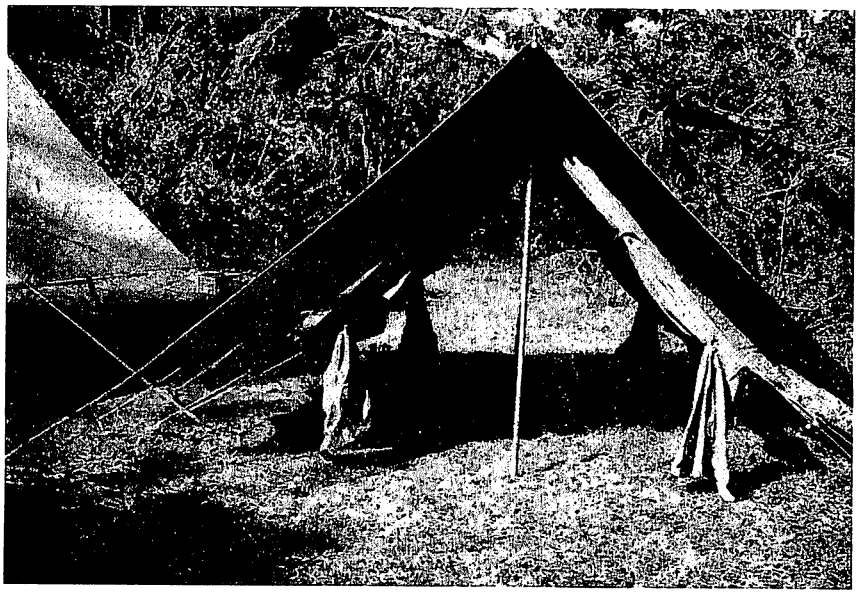
出入口のドアの部分も同じです。ジャ腹折にしましょう。(写真－3)

写真－4のようにウォール、ドア、などを全部上げてください。そうすることによって一番乾燥の必要なグランドシートの下の地面も乾燥させることができます。(写真－4)



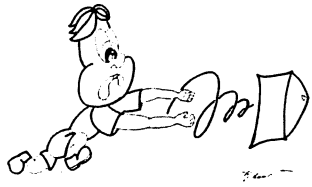
写真－2　ジャ腹に折られたウォール

写真－3　ジャ腹に折られた入口



写真－4　前後左右すべて上げ終えたテント

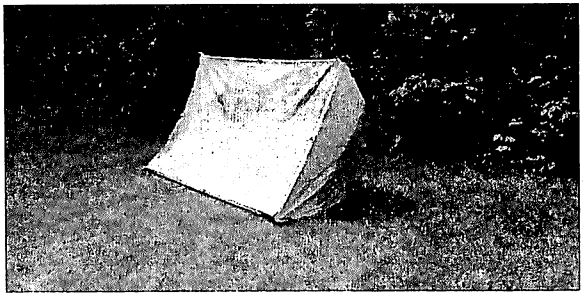
ドームテントを乾かす



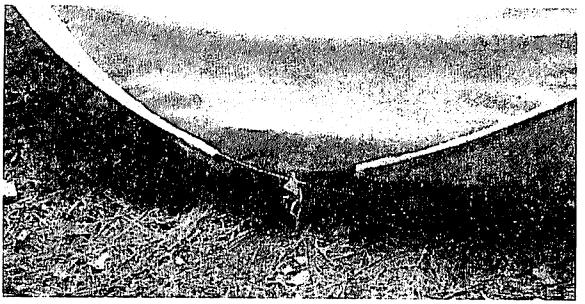
ドーム型テントのフライシートは、普通のグランドシートのようにしてロープに掛けます。ドーム型テントはほとんど、ナイロンなどの化学繊維で作られていますので軽く、風に飛ばされることがあります。そこでフライシートのすそに付いているロープを利用してしばっておきましょう(写真－1)

本体はもっと簡単です。逆さにし、そのまま一番湿っているグランドシートの裏面を太陽に向けておけばよいのです。ただこれも大変に軽いので少し風のある日にはテントごと飛んで行ってしまうことがあります。そんなときは写真－3のようにテントの頂点に付いているテープをペグにむすび、風向きに逆らわずにグランドシートの裏面を風下に向けます。もともとナイロンには水分を保つという性質はないのですから、それでも十分に乾いていきます。(写真－4)

写真－1

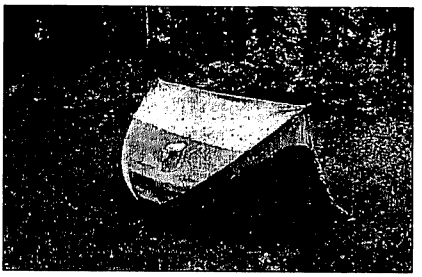


写真－2



写真－3

ドーム型テントは普通本体とグランドシートが一体になっており、細かい砂やホコリは一度入るとまず出ていきません。そこで乾燥した後フレームを外しテントの内側を外に出してテント内にある細かいホコリを出します。(写真－5、6)

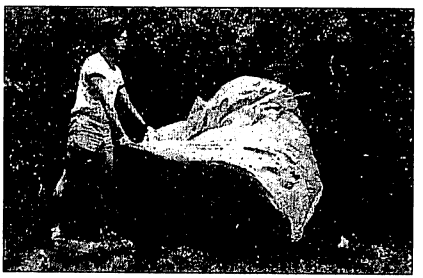


写真－4

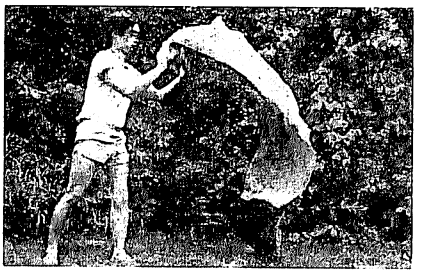
移動キャンプ

移動キャンプではまずテントを干している時間はありません。起きるのは5時～6時、朝食を軽く取りすぐに出発、夜露にぬれたテントをそのままたたみ移動します。目的地に着くのは3時～5時、日が当たるキャンプサイトならまだよいのですが日の入り込まない森の中や谷間でキャンプをするときはそのまま乾きません。

私が移動キャンプをするときは朝5時に起き6時には出発します。歩きはじめてから7時間後(休んだ時間をのぞけば正味6時間)が午後1時にな



写真－5



写真－6

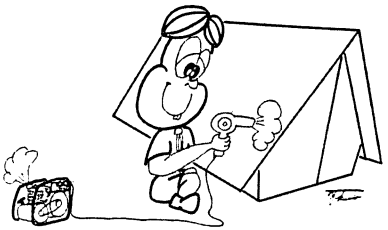
りますが、まだまだ日射しは強く、しかも1日の行程の4分の3は消化しています。精神的に余裕もでてきます。そのころから日当たりが良くテントなどが干しやすいところを探しながら歩き、見つかればそこで30分ほど大休止。テントも寝袋も夏の強い日射しなら10分もあれば乾きます。そして一番大切な靴も乾かします。しかしながらハイキングトレイルのほとんどをしめる森、林の中では30分間、何も妨げられることなく日を受ける所はあまりありません。問題なく干せるのはアスファルトの上です。ハイキングトレイルと一般道の接点を利用します。(写真－7)

写真－7

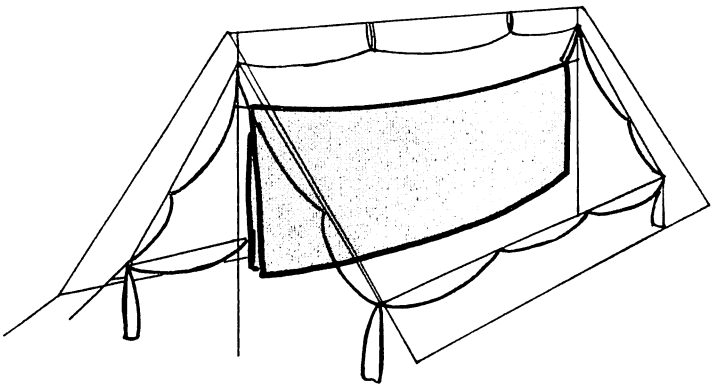
曇りの日

以前お話ししたように物が乾くということは温度、湿度、風の3つの条件が複雑に関わりあっています。空が曇っているからといってまったく乾燥しないとはかぎりません。それに毎朝一度荷物を外に出してウォールを上げた方がテント内の整理がしやすくなります。特に地面はグランドシートでおおわれているので湿気の逃げようがありません。たとえ、曇りの日でも一度グランドシートをはずしウォールを上げるようにしましょう。

雨の日



雨の降っているときには乾燥させることはできません。しかし君たちのサイトにマーキーがあればテント内の荷物を一度その下に移し、グランドシートを外してウォールと戸を開け、テント内を掃除しましょう。外したグランドシートは支柱にロープを張って掛けます。(図－1)



図－1

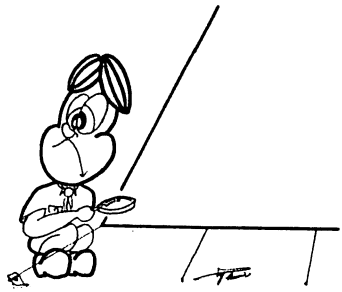
マーキーやシェルター(あずまや)がなければしかたがありません。大変ですが荷物をテントの下に置いたままグランドシートを外し、支柱に張られたロープに掛けてテント内の掃除と整頓をしてください。

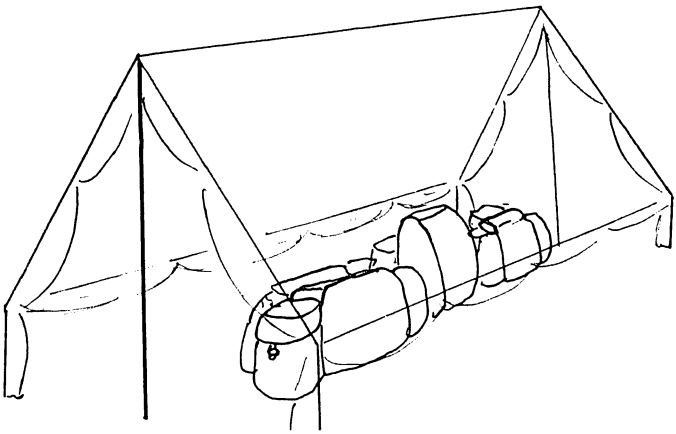
フライシート付きで雨が吹き込む心配がないテントでしたら掃除の後もウォールと戸は開いておいた方が光を取り入れられて中で作業をするのに便利です。グランドシートも掛けたままにしておけば荷物を取りにテントに入るときも靴や雨具を脱がずに用がたせます。個人のザックは中央に寄せておきます。

テントを乾燥させたあと

・キャンプサイトにいる場合

天気がよければ、テントはすぐに乾燥してしまいます。午後の活動がサイト内であれば、ドアを開き、ウォールも上げたままにしておきます。テントを閉め切っておくと、中がむれてしまいます。雨の日と同様、荷物をテントの下に置き、グランドシートははずしておきます。





図－1

・サイトを離れる場合

サイト以外でプログラムが行われる場合、テントのウォールをおろし、ドアも閉めておきます。サイトから離れるときは、どんなに晴れていても、突然雨になったらどうなるかを考えて備えをしておきましょう。フライシートの張り具合や、土手や溝の状態を点検しておきます。特に食料を出しっぱなしにしておくと、野犬に食べられてしまうこともあるので注意しましょう。

・テントを閉じる

気温は午後1時～3時をピークに徐々にさがりはじめます。別に時計を見なくても、これ以上の乾燥は望めないと判断したときにテントを閉じます。

○ウォールをもどすときの注意

乾燥を終えたテントは手早くもとにもどしたいもので、ウォールを束ねていたリボンテープをはずし、すぐにピンを打ちたくなりますが、これにはちょっとした手順があります。

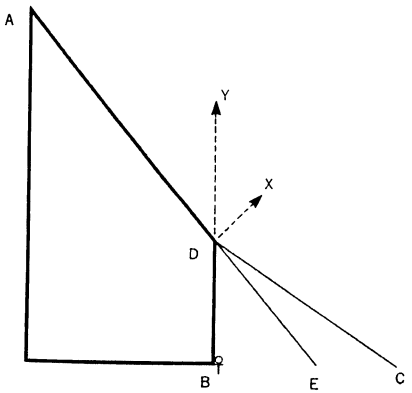
○なぜ、すぐにピンを打ってはいけないのか

私たちがよく使うジャンボリーテントのような家形テントの張力のバランスを考えてみましょう。(図－2参照)張り綱のペグの位置は本来A－Dの延長上のE点ということになるはずですが、実際には、みなさんも経験しているとおり、Eの位置でテントをピンと張ることは不可能です。テントの重みをA、D、Eの直線で支えることはできず、たるみを生じてしまいます。そこでEよりも外側の例えばC点にまでロープを持ってくることになります。

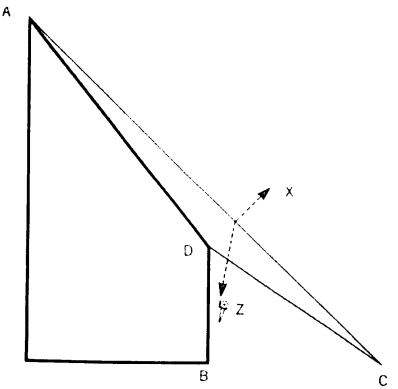
A、D、Cで張るとA、D、Cは一直線になろうとするためピンの位置Bに上向きの力(D、X)が働きます。この力とピンがスソを止める力とつり合わなければなりません。つまり図－3のZ方向に正しく止める力を持たせなければならないのです。Bの力が弱ければピンが浮いてしまいテントにすき間ができてしまいます。これでBのピンの重要性が理解していただけたと思います。

この意味からピンを再び打つ場合は、テントの張り綱をゆるめ、ピンをきちんと打ってから張り綱を張らなければなりません。

話が長くなりましたがこれだけは覚えておいてください。



図－2



図－3

○ピンを差し込むときは、張綱をゆるめてから

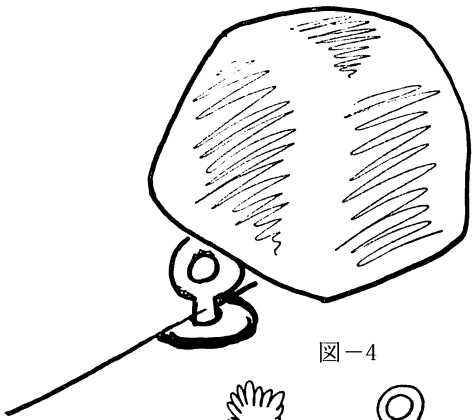
ちょっとした順番の違いですが、結果は大きく変わってきます。

○ピンが浮いてきたら

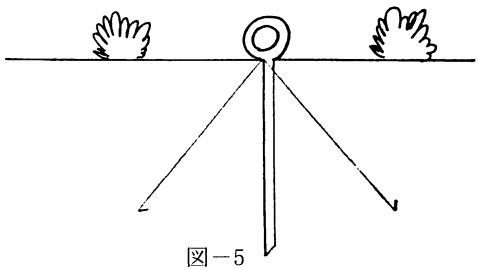
手順どおりピンを打っても、やはり一度打った位置というのは抜けやすいものです。ピンが浮いてくるようでしたら、石などを重しにするか、打つ角度を変えてください。

地面の下に石が多く、ピンを簡単に打ちなおせないようなサイトでは、リーダーに話してテントの乾燥時にもウォールを上げないことです。

こういったことは、自立できないテントの特徴でサイトの状態で扱いが大きく変わります。ゴロタ石ばかりのサイトでも、もちろん張れないことはありませんが、正しく張るためには、それなりの条件が必要になってくるのです。



図－4



図－5

■点検

日没から消灯までのテントの点検

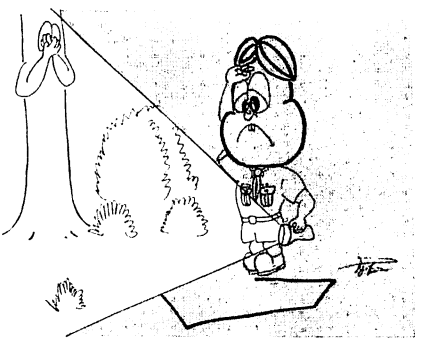
眠りに就く前に、テントのまわりを点検するのは当然のことですが、サイト全体の点検は、日の暮れ前のまだ明るいうちの方がもっと能率良くできます。たとえば、明るいときに一辺1mの正方形を描くのは簡単ですが、暗やみの中で懐中電灯をたよりに描くとなると、これは至難の技。人間は無意識のうちに色々なものを様々な角度から観察し、比べて、今引いている線が真直ぐかどうかを知るのです。つまり、比べるものが一度にたくさん見わたせる昼間の方が都合が良いわけです。テントポールは真直ぐか、刃物やスコップが放置されていないか、ペグが抜けかかっていないかなど、明るいうちにやればわずかな時間ですませることができます。固定キャンプなら日没前、夕食の準備をするころに、テント、マーキーそしてキャンプサイト全体を一度点検しておきましょう。

☆溝や土手がくずれていないか？

☆ポールが地面に沈みこんでいないか？沈んでいたら、ポールの下に石をしきましょう。

☆ポールが傾いていないか？

その原因として、ペグが浮き上がっていることが考えられます。ポールの傾きを直す前にペグを調べましょう。

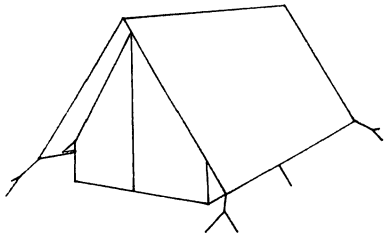


ペグの直し方

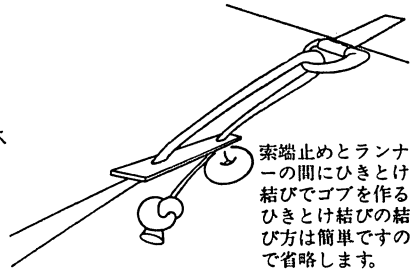
土質が柔らかく、ペグが浮き上がってほとんど抜けそうになっている場合でしたら、図－1のように張り綱を逆Y字形にしましょう。

張りを調整するとき、親綱のよう

に調整区間の長いものなら問題ありませんが、腰綱などではこれが短いのでランナーがペグにまでとどき、まだ余ってしまうということもあります。そんなときには図－2のように引き上げ結びでコブを作り、張り綱の長さをあらかじめ短くしておくとよいでしょう。



図－1

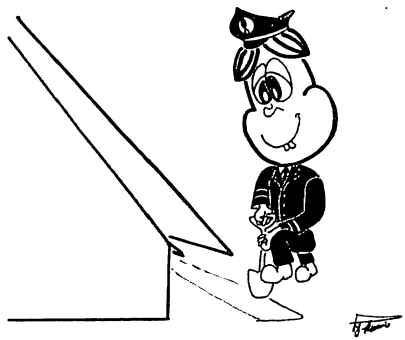


図－2

消灯直前の点検

班長会議が終り、班会議も終りました。この後、眠りに就くまでが、キャンプ中で一番安らぐひとときです。しかし、その前にしなければならないことがあります。日の暮れる前にサイト全体の点検はしてありますが、もう一度点検をしておきましょう。暗くなってからだれかが張り綱に足を引っ掛け、ペグがぬけそうになっているかも知れません。

このようにわずらわしいが、しかし大切な仕事というのは、班のキャンプサイトの責任者である班長が行います。自分たちのテントがどのような状態にあるのかを、班長は知りつくしておかなければなりません。今夜快適に過ごせるかどうかは、班長の双肩に掛ってきます。班長にはこのように、目立たないがしかし重要な仕事というものがたくさんあります。それをグチをこぼさずに行って初めて班をリードしていくことができるのです。

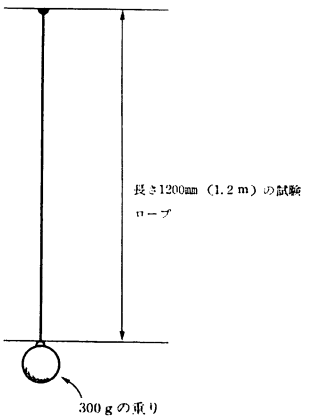


突然、バケツをひっくりかえしたような雨が降ってきたら、この溝や土手は十分に機能を果たすだろうか？それを1つずつ確認していきます。みんな疲れています。「自分も早く横になりたい」と思うのはだれでも同じです。しかし点検を怠ったために、土砂降りの中でペグを打ち直したり、溝を深くしなければならなくなるかも知れません。自然の中で活動するときは妥協は許されません。怠けたり、ごまかしたりすることのない人にだけ、自然は楽しみや美しさを教えてくれます。

以前は、消灯前の点検の注意として「テントの張り綱を緩めるように」といわれていました。夜つゆを吸った綿のテントは縮み、ペグや張り綱に無理な力を加えます。そして、ペグが浮いてしまったり、ひどいときはテントが裂けてしまったりしたからです。

しかしこれは綿のテントであったからでビニロンやナイロンなどの化学繊維が主流になっている現在では、少々事情が異なります。綿と異なりビニロンは、湿度による伸び縮みがほとんどありません。またナイロンは、ぬれることによって逆に伸びます。こんな訳で最近では「寝る前には張り綱をゆるめる」などと一言でいえなくなってしまいました。

その日最後の点検は、テントの材質ばかりでなく、張り綱の材質も考えて行わなければなりません。水ぬれによるロープの伸び縮みの簡単な実験をしてみたところ図－3のような結果がでました。



図－3

品名	太さ	水にぬらすと
クレモナ（ビニロン）	2mm	6mm ちぢむ
ナイロン	2mm	5mm 伸びる
綿	4mm	5mm ちぢむ
	1mm	5mm ちぢむ
麻ヒモ	1mm	5mm ちぢむ

表－1

この実験だけですぐに結論を出せる訳ではありませんが、それでも1つの目安にはなります。今日、テントの張り綱の素材はナイロンかクレモナがほとんどです。ナイロンは君たちもよく知っていると思います。クレモナというのは商品名で、正しくはポリビニルアルコールという長い名前を持っています。そして別名をビニロンといいます。つまりクレモナ＝ビニロンですから、伸び縮みしないはずなのですが、実験の結果は表－1のようにぬれることによって綿以上に縮んでしまいました。

素材表面の感触も、ビニロンとクレモナではかなり違っています。

表－1からは、もう1つおもしろいことがわかります。綿ロープの径2mmのものと4mmのものの縮み方に、ほとんど差がないということです。太さはあまり関係しないのかも知れません。

ロープの素材の見分け方

ナイロンとクレモナは見た目も手ざわりも大変違います。ナイロンは光沢がありよく滑ります。クレモナはフワフワしていて綿によく似た手ざわりです。綿クレモナの見分け方は、ロープの端を燃やし、チリチリと燃え上がれば綿、溶けて丸くなればクレモナです。

「火の扱いにはくれぐれも気を付けましょう」また、燃えているナイロンやクレモナのロープを指で消したりするとヤケドしますので、踏みつけたり石ではさんで消しましょう。

就寝前の張り綱の調整

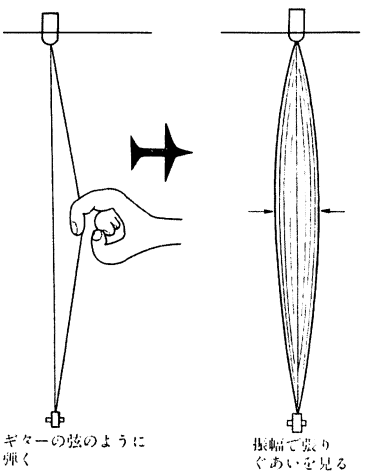
・家型テント

テント本体がビニロンで、張り綱がクレモナという組み合わせの場合は、完全に強く張ってから少しゆるめます。前項でお話したように1.2mで6mmしか縮みませんので少しゆるめれば十分です。あおり止めなどの長い張り綱は、さらにもう少しゆるめます。このような張り綱のゆるみ具合は、指で弾いてみて、その振幅ではかります。

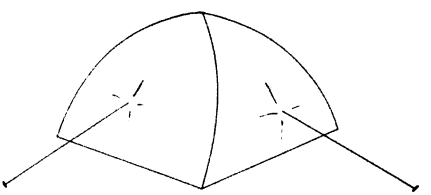
本体がナイロンで張り綱がビニロンのテントでは、張り綱はできるだけ強く張っておきます。夜つゆにぬれて、ビニロンロープが縮んでも、ナイロンの本体の伸びの方が多いからです。

・ドーム型テント

ドーム型テントの場合、素材はまずナイロンです。以前お話したようにフライシートが雨でぬれると伸びてしまい、本体にたやすく接してしまいます。これを防ぐためには、幕体の各面の中央部に何カ所かついている張り綱を、就寝前に必ず強く張っておきます。こうしておけば、ある程度の雨には耐えられます。



図－1



図－2

■ドーム型テントのたたみ方

楽しかったキャンプも終り、テントをたたんで帰るときがきました。さて、よくあることですがテントはていねいにたたまないよ収納袋に入らなくなってしまいます。

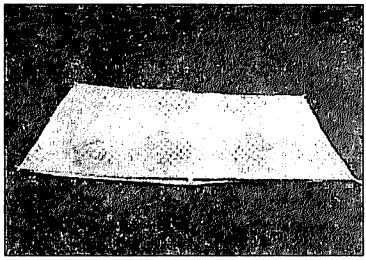
テントのたたみ方

写真は2～3人用のテントですが、大型のものでも基本的にはたたみ方は変わりません。

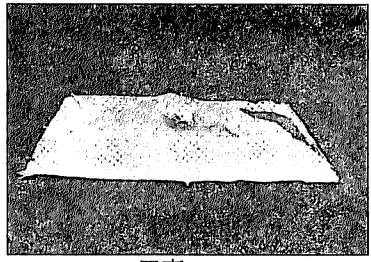
・ペグを抜き、フライシートをはずす。

・本体のフレームを取る

・写真－1のようにグランドシート部分を上向きにして広げる。このときグランドシートのシワを伸ばすだけでなく、本体を軽くたたんでおく。写真－2は写真－1の裏側。



写真－1
グランシートを上向きにして広げる

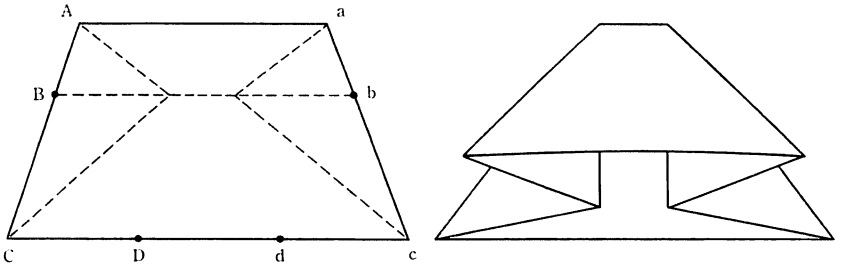


写真－2
反対側から見たところ

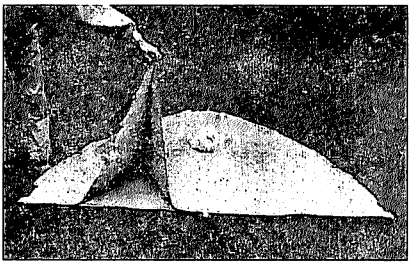
グランドシートは一番厚い布地を使っている部分ですので、この処理を上手に行うことがこのタイプのテントのたたみ方のコツになります。

図－3のB(b)をD(d)にもってきます。そしてA(a)をC(c)に運び、グランドシートを2つに折ります。写真－3は、図－3のようにたたんだところです。手でつまんでいるのがAの部分です。

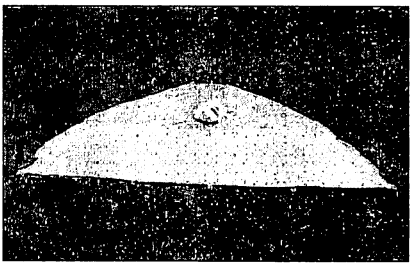
このようにグランドシートをたたむと、図－4の灰色の部分に無理がかかりシワが多くなりますが、この部分は布地も薄く問題はありません。このシワをなくそうとすると写真－5のようになってしまいます。これでは厚いグランドシートが複雑に重なってたたみにくくなります。



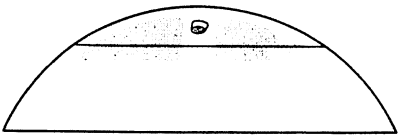
図－3



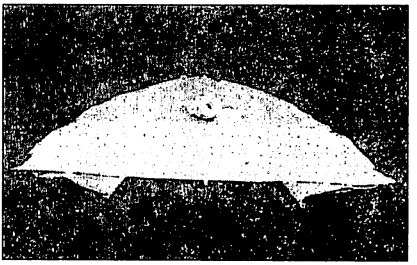
写真－3　手でもっているのがＡの部分



写真－4　グランドシートをたたみおえた本体

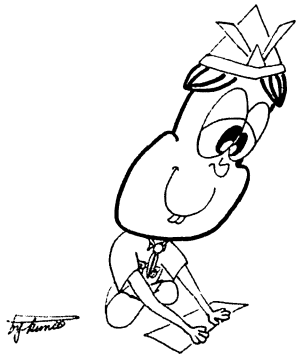


図－4

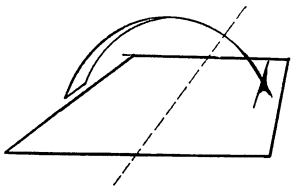


写真－5　これでかさばるだけ

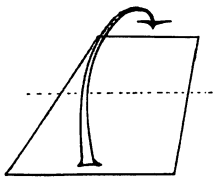
ここでちょっと、テントをたたむときの基本についてお話しておきましょう。わかりやすいように新聞紙を使って説明しますから、皆さんも一緒にやってみてください。



新聞紙(1ページ分の大きさ)を2枚用意し、それぞれ異なる方法で1/64の大きさにまでたたんでみましょう。まず、第一の紙は長い辺の真ん中で半分に折るという極く普通の作業を6回くりかえします。これで、もとの大きさの1/64となります。もう一方の新聞紙は、図－3のように両端からそれぞれ中央に向かって折り込んでいきます。こちらもやはり6回(ただし、両端から折り込むときは両方で1回、3回目と6回目に中央の線で折り合わせるときは1回と数えます)折ると1/64の大きさになります。



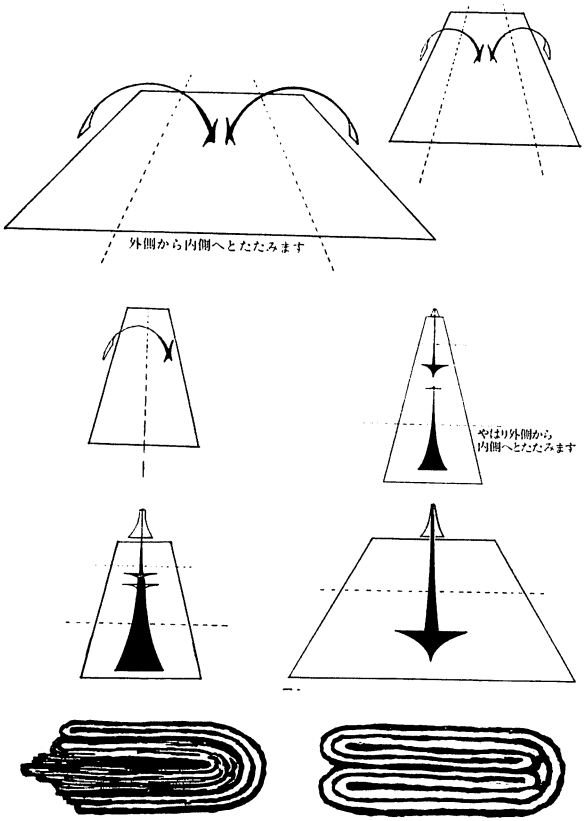
よこに真半分におります　図－1



たてに真半分におりこれを後4回，6回つづけます　図－2

さて、どちらの方法がコンパクトに、そしてきちんとたためたでしょうか？最初の方法では、どんなに丁寧にたたんでも端がきれいにそろわなかったのではないでしょうか？

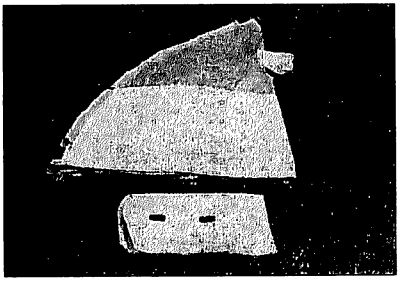
試しに使った薄い新聞紙でさえも、6回目の折りのときはには―特に最初の方法では―中々に大変です。物を何回も続けてきっちり折っていくのは、以外に難しいことなのです。私もボーイスカウトの頃、どうしても収納袋にうまく納まるようにテントがたためず、それが不思議でなりませんでした。「雨や露でテントがふやけたんだ」などと言訳しても、晴天続きの午後の撤営では、こんな言訳は自分でも納得できはしません。



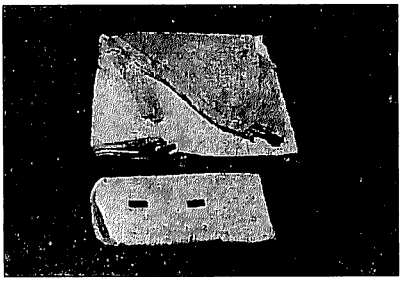
図－3

前置きが長くなってしましましたが、前項の写真－4から先へと進みましょう。これを、写真－6のように半分に折ります。ペグ袋やポール（フレーム）のことも考えて、それら全部が収納袋に納まるように、テント本体やフライシートをたたんでいく訳ですが、この写真－6あたりから、収納袋のことも意識して、形や大きさを考え、厚みに片寄りができないよう心がけなければなりません。

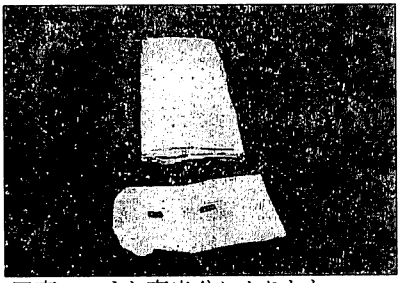
テントの端にはピンホール、ベンチレーターなど様々な付属品が付いていますが、たたみ終わったときにこれらが外に飛び出していないのがよいたたみ方です。そのたみには、必ず外から内へという方向でテントをたたんでいくようにすることが大切です。（写真－9、10、11）



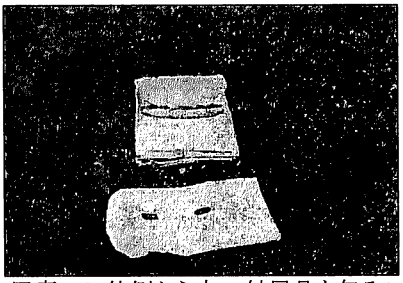
写真－6　真二ツにおります。



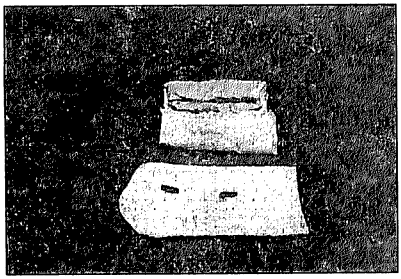
写真－7　無理がないように四角く形をまとめます。



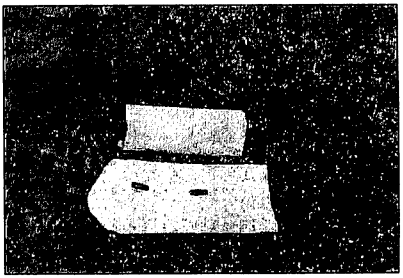
写真－8　また真半分におります。この時にテント袋に入る長さがきまります。



写真－9　外側から内へ付属品を包みこみます。

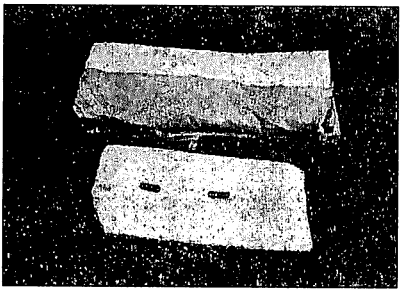


写真－10

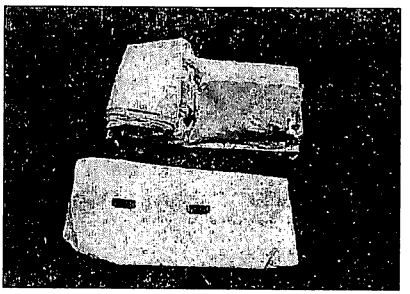


写真－11　見かけのテント袋よりかなり小さくたたまないと他のフライ、フレーム、ペグが入らなくなります。

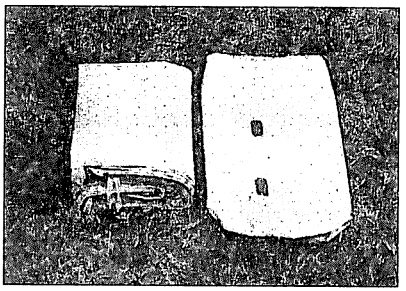
テントを収納袋にピッタリと納めるために、前項でお話したたたみ順を丸暗記する必要はありません。方法は他にもいくつかあるからです。例えば先頁の写真－7の後に写真－12、13、14のように続けます。要はテント、フライ、ペグ袋がピッタリ入ればよいだけのことです。テントをたたむ「基本のおり方」を頭に入れておいて君たちのテントに合ったコンパクトでやりやすい方法を見つけてください。キャンプは創意工夫の場です。



写真－12



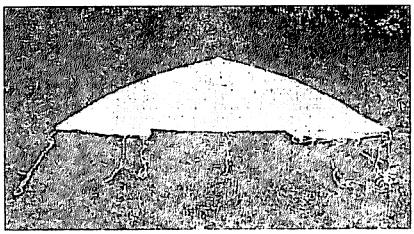
写真－13



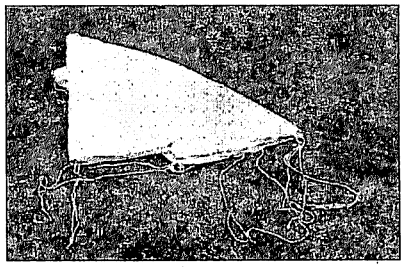
写真－14

フライシートのたたみ方

フライシートも同じ様に「テントをたたむ基本」を理解していれば問題なくたためます。

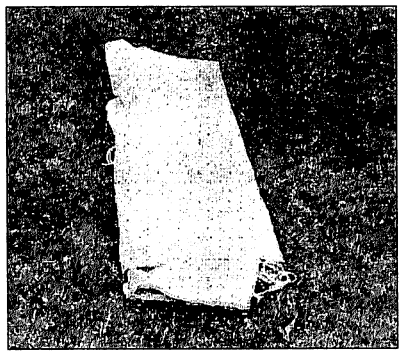


写真－15 張り綱がもつれたりからまないように伸ばしておきます。

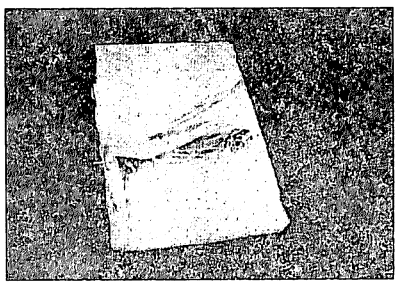


写真－16

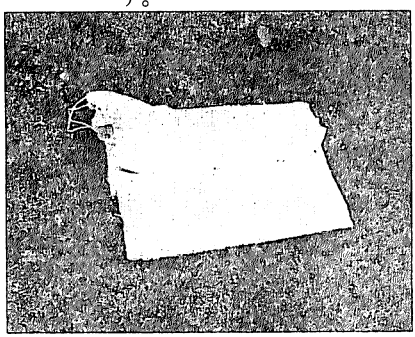
写真－17 張り綱を内側へもっていきます。



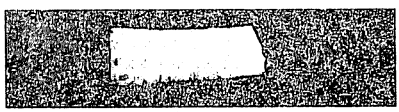
写真－18



写真－19



写真－20



写真－21

たたみ上がったテント本体、フライシート、ペグ袋を収納袋にいれるときは、ペグ袋のような固まりはフライシートと本体の間にはさんだ方が、かさばらず、パックしやすくなります。(図－4)

この種の小型のドーム型テントは移動野営に多く使われます。これをザックの中に入れ、つぎの野営地に向かうわけです。ということはザックに収納しやすくしなければなりません。その重要なポイントは本体、フライ、ペグ袋が入ったテント袋をきれいな四角(直方体)にたたむ、これがザックに収納するときのコツです。

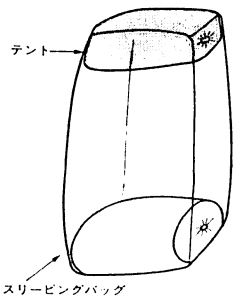
移動キャンプによく使用されるザックは図－5のような幅がせまく、たてに長いフレームザック、アタックザックのタイプ、図－6のような幅が広く高さはあまりないキスリングなどです。

テントをザックのどのあたりに収納するかは、いろいろ考えられますが一般的には図－5および図－6のようです。

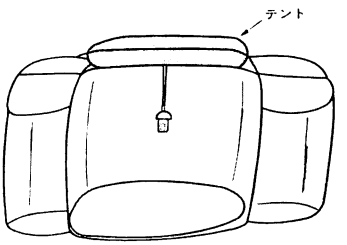
自分のザックの幅に合わせてテント袋を自作すると完璧です。これらの図から分かるようにたて長のザックでは底の幅に合わせてせまくしその分高くなりますし、キスリングでは反対に底板のような長く薄い袋を作ります。

布地はナイロンのやや厚手のものがよいと思いますが、手に入らない場合は古くなったジーパンなどの強い布を利用してもよいでしょう。

図－4

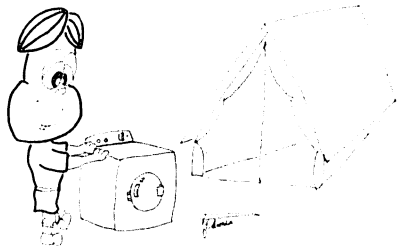


図－5



図－6

■テントをたたむ前に

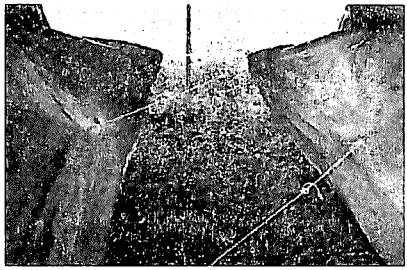


大型テントをたたむときは、まず始めに完全に乾燥させます。テントのソドクロスが湿ったままパックして隊の倉庫に入れたりすると。次のキャンプのために出してみたら、ムレて臭くなっていたりカビが生えていた、なんてことになってしまいます。

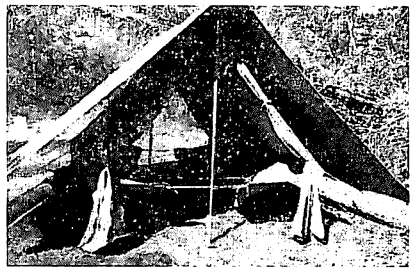
完全に乾燥させる

テントをたたむ前の乾燥は、今まで毎朝行っていたやり方とは違います。写真－1、2のようにロープなどを利用してウォールとソドクロスをテントの内側に伸ばし、風が全体に通るようにして、完全に乾燥させます。

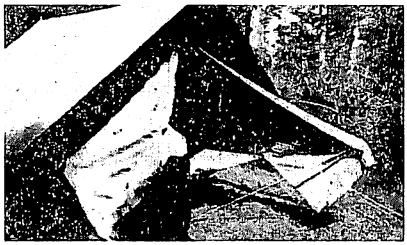
とびらの部分は木の枝、補助ポールなどを使って張り出すようにします。



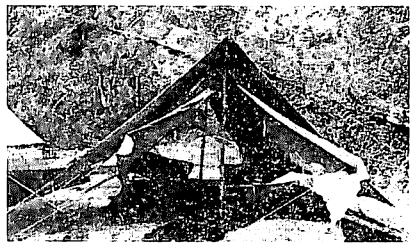
写真－1 ロープを使いウォールとソドクロスを内側にもってくる



写真－2



写真－3 その辺に落ちている枝や竹、補助ロープを利用して「とびらを張る」

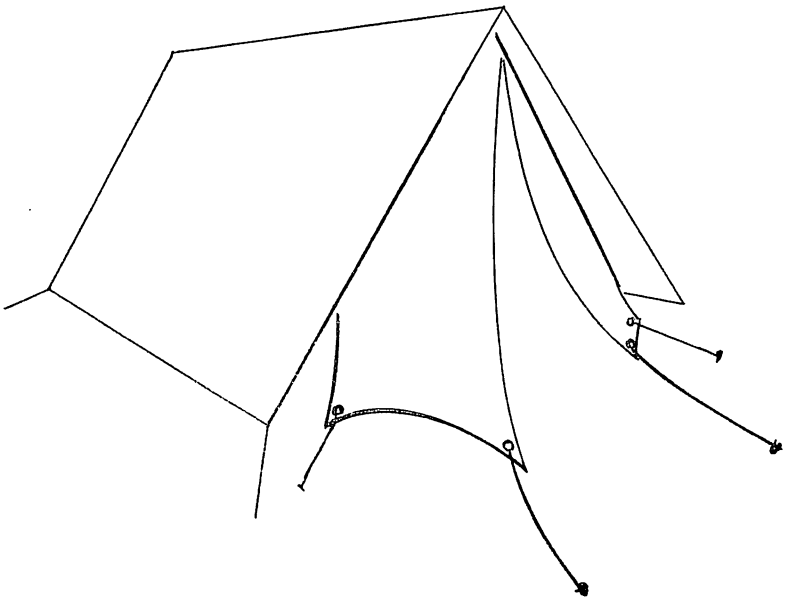


写真－4 これでテントは乾燥しやすい状態になる

枝・補助ポールがない場合

手ごろな木の枝などが見つからなければ、ビスランプで図－1のように張ります。しかしこの方法ですと、ロープを掛けている部分がいつまでも乾きません。時間を見計らってビスランプの位置をずらします。しかし写真や図のような形にしなくても、要はウォールやとびらを全体に伸ばし切り、そのすべてが地上20cm以上のところにあるようにすればよいのです。

乾燥のための時間は、朝何時ごろ撤営をはじめるかで違いますが、晴れていれば数十分で完全に乾きます。しかし、いろいろな理由からあまり朝早く撤営することは好ましくありません。（移動キャンプは除く）

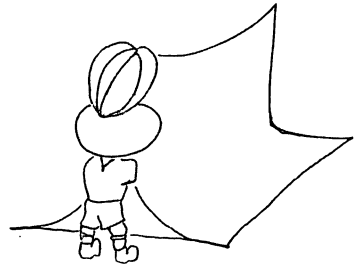


図－1

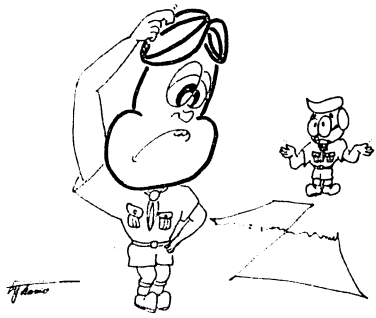
完全にテントが乾燥したならテントをたたみはじめます。

もしキャンプ場のテントを借りているのでしたらキャンプ場の管理者に乾燥が十分かどうか判断してもらいます。キャンプ場にとっては湿ったテントを袋に入れてもどされることぐらい迷惑なことはありません。結局また袋から出して干し直さなければならないのです。キャンプ場の方の指示に従いテントを移動させるなりします。撤営の日には、乾燥が十分にいくように管理者からも日当たりのよい場所にテントを乾燥張りするよう指示してくることもありますのでそれに従います。

テントが完全に乾燥しなかった場合

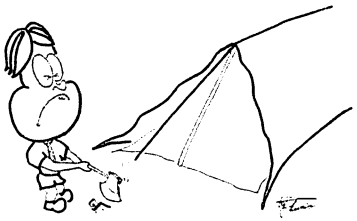


もし時間内に乾き切らなかったなら、その場合はしかたありません。そのままたたみます。ただし翌日かならずテントを干しましょう。このようにキャンプが終わった翌日に集合してテント干しをしたり、隊備品を補修、整備しなければならないことがあります。私がリーダーとしていたときもキャンプに参加しても、そのような日にこないスカウトがいましたが、そのようなスカウトはキャンプをする資格などありません。



高い料金を払って宿舎にでも泊まっていればいいのです。そうでないとみんなが迷惑します。実際にテントに寝泊まりしている期間だけがキャンプではありません。行く前の準備トレーニング、後の点検と整備などと、1年間がキャンプといっても差し支えないくらいです。

テントをたたむ



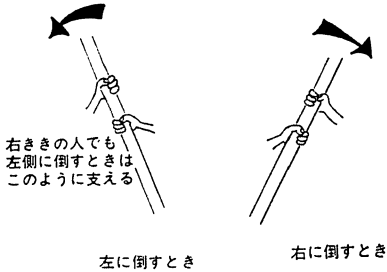
それでは家型テントのたたみ方に入りましょう。テントをたたむとき、つい手当たりしだいペグを抜きたくなりますが、大きなテントでは、ポールと幕体を合わせた重量は相当なものですのでそんなことをすると思わぬケガをしたりテントを破ったりもします。

基本は、テントを立てたときとまったく逆の順でたためばよいわけです。体の大きいスカウト2人がそれぞれのポールを支え、他のスカウトは手早くすべての張り綱をゆるめます。どちらの方向に倒すかは、ポールを支えているスカウトが決めればよいことですが2人はお互いに向かって立っているのですから、ただ右側といっても反対になってしまします。おたがいの顔を見て、二人で相談してどちらの方向にたおすのか指さして決めてください。

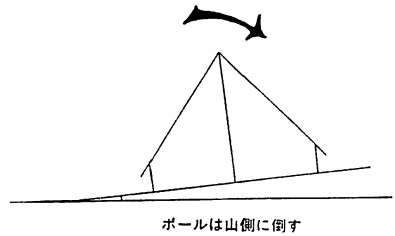
テントのポールを倒すとき、右利きの人では右側にたおしやすく、左には倒しにくいものです。それはまた、ポールをどのように支えるかによっても違ってきます。利き腕とそうでない腕の力の強さ自体はそう違うものではありませんが、長いもの、太いもの、持ちにくいものなどを扱う能力には、かなりの差があります。倒す前に、どちら側に倒すのか、どのように支えたらよいのかを十分に考えてみてください。

テントが斜面に張られている場合は、図－2のようにポールを山側に倒すようにします。

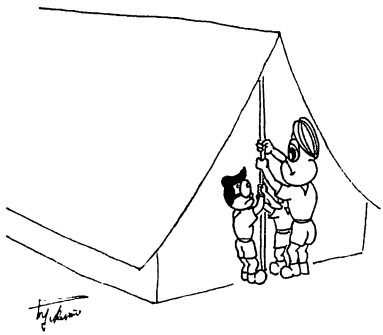
いざ倒そうとすると、ポールが地面に沈み込んでいたり、グラウンドシートにからまったりで、作業がスムーズに運ばないこともあります。それぞれのポールに3人ぐらいに取り付いて、図－3、4のように、まずポールを持ち上げ、ポールの下側を横にスライドさせながら、ゆっくりと地面に寝かせていけば、うまくいくでしょう。



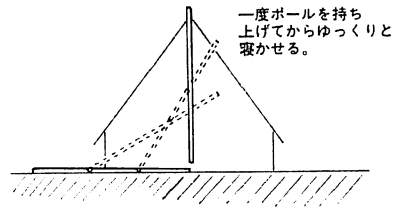
図－1



図－2



図－3



図－4

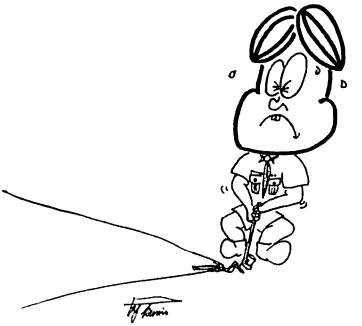
ペグを抜く

水はけの悪いローム土は、これまで敵扱いされてきましたが、ペグの効きに関しては引っ張り強く、しかも必要なときにはかんたんに抜くことができるという良い面を持っています。木の根にでも突き刺さっていなければ、たいていは無理なく抜き取ることができるものです。

さあ、それではペグを抜いてみましょう。あっちょっと待って下さい。テントの張り綱をかけたまま引っ張っている人はいませんか。このようにして無理に引っ張ると、張り綱を傷めたり、切ってしまったりしますよ。

ペグを抜くときは、ロープなどをかけた方が効果的ですが、これには張り綱などは使わず、捨ててもよいような麻ヒモなどを使うようにしましょう。張り綱はテントの大切な一部なのですから。

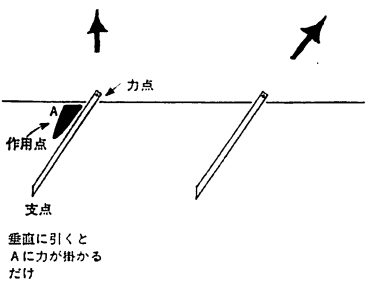
なぜ抜けないのか、抜くときのコツ



ロープを張っても、ペグがなかなか抜けないことがあります。そんなとき、自分がどの方向に力をかけて抜こうとしているのか、よく確かめてください。ふつうペグは、垂直には打ち込まれていないはずです。それを垂直に引き抜こうとしたらどうなるでしょうか？図－5のように一種のテコ状態となって、大きな力が必要となり、最後にはAの部分がゴソッと盛り上がってペグが抜けるというわけです。ペグが打ち込まれたのと逆の方向に力を加えるのが最も楽な方法といえます。

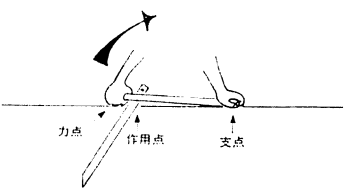
それでも抜けないときは、図－6のようにペグの頭の横を軽くたたいて前後にゆさぶったり、図－7のようにもう1本のペグをテコにするとよいのでしょう。しかし、何をしてもびくともしないことがあります。何かの加減で抜けなかったり、あるいは木の根にペグが刺さっている周辺、特に図－5のAの部分の土を掘りとって、ペグを助け出してやってください。スコップがないときには、スプーンを使うこともできます。

ペグをテコにして抜く



図－5

図－6



図－7

収 納

テントから外したポールやペグは乾いたタワシやブラシで土を落とし、油をひきます。泥がベットり付いているときは、バケツに水を汲んできて洗い流しましょう。鉄製のペグは洗い終わったら乾いた布で乾拭きし、油をひきます。

油をひいたペグは、地面に直接ふれないようにシートやペグ袋などの上に重ねて乾かしましょう。

木製ペグ、プラスチック製のペグは、しばらく水につけてからタワシで洗い、完全に乾かします。

写真－1　ポールやペグに油をひく

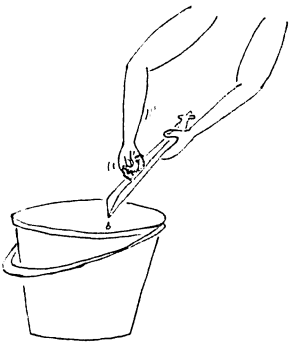
写真－2　ペグをタワシで洗う

油かん

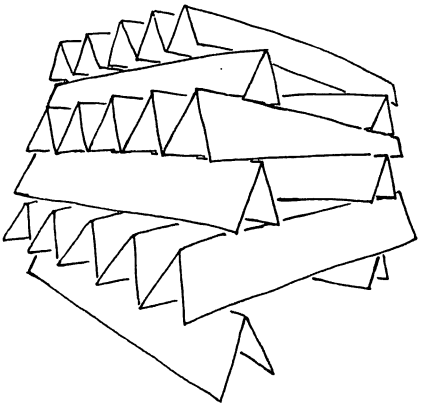
空カンにボロ布を入れ、油を適量注いで油カンをつくっておきましょう。この場合、油は高級なものを使う必要なく、エンジンオイルや使い残しのサラダオイル程度のものがかえって適当でしょう。

なぜ油をひくのか？

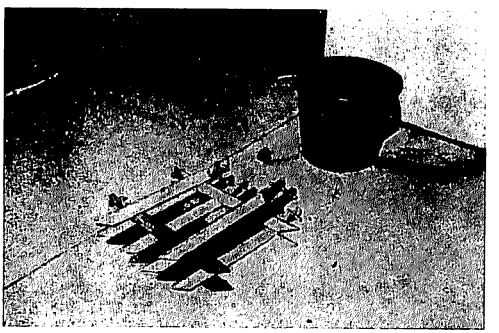
金属の表面を空気から遮断し、サビを防ぐためです。金属・特に鉄がさびるのは水分・酸素・二酸化炭素などの働きによるものですが、これらはどんな場所の空気にもふくまれています。ですから表面に何の処理もしなければ、鉄はそのままでやがてはさびてしまいます。サビを防ぐには、鉄の表面を何かでおおって空気を断てばよいわけで、最もかんたんで効果も割合高いのが、この油をぬる方法です。



図－1　よごれがひどいときには水洗いします

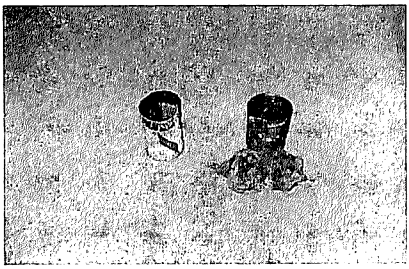


図－2　風通しが良いようにしかもコンパクトに井型に組みます



写真－3
洗ったペグはまた土や砂が付かないように
乾かします

金属製のポールやペグは、JIS規格によりメッキなどのサビ止め処理を施してあります。しかしその効果は新品のうちだけで、一度でも使用したものは細かなキズが付き、そこからサビがきてもろくなってゆきます。工場でどんなにすばらしい製品をつくったとしても、それを使う者の手入れの善し悪しで物の寿命は大きく変わってしまうものなのです。



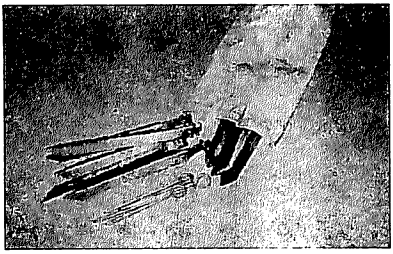
写真－4　アキカンを利用した油カン

図－3

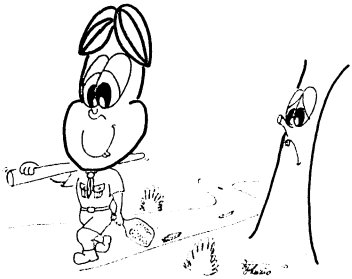
油をひくというベトベトにぬりたくる人がいますが、空気とふれ合わないようにするためです。からそれほど多く付ける必要はありません。金属の平面にわずかに光沢がつくという程度で十分です。指にペトッとつくようでは多すぎます。

袋にいれる

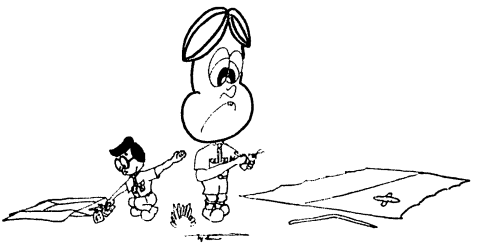
ペグを袋に入れるときにも、注意が必要です。先の方から入れた方が楽ですから、ついそのようにしてしまいますが、それではペグ袋の底を傷めてしまいます。多少かさばりますが、写真－5のようにペグの頭から入れます。



写真－5　ペグ、ピンは頭の方から袋に入れます



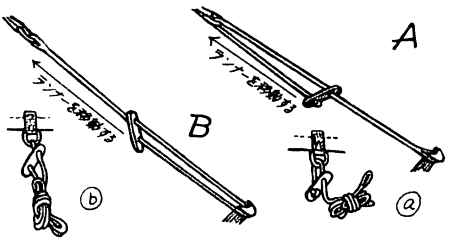
ペグを抜き終わったら幕体類をたたみます。まず、テント本体やフライシートについている張り綱やあおり止めの処理をします。



なぜ張り綱を処理するのか？

テントを立てるとき、前に使った人の張り綱の処理に泣かされることがよくあります。グチャグチャにこんがらかっていたりあるいは細かなクサリ編みがうんざりするほど続いていたり・・・・・。

張り綱は、もし次にこのテントを使うなら、こんな状態で受け取りたいと思える方法で処理しておくのが、次の人への思いやりというものです。たとえ自分が受け取ったときにそのようになっていなかったとしても、君自身はいつもベストをつくすよう心がけてください。

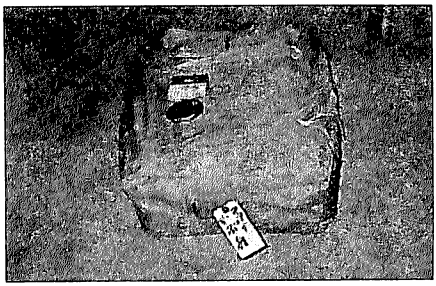


図－4

ところで、張り綱の処理方法は、綱がどのようにテント本体につけられているかで変わってくるようなものです。たとえばジャンボリーテントなど図－4のAのような場合は、張り綱をできるだけ長い1本のヒモとなるように、またBの場合には、ちょうど真半分になるようにランナーを動かします。ランナーから先が長すぎてじゃまに思えるなら、ⓐⓑのようにゆるめにからげたり止め結びをしておけばよいでしょう。

「人は少しソンをするくらいに仕事をするのがちょうど良い」（フランス・ポアー）

張り綱を伸ばすと同時にグラウンドシート、本体、フライシートに破損しているところはないか点検します。入口や窓、ベンチレータの虫よけ網などが開いていないかどうか。張り綱が切れてつないだために短くなっていないか、D環テープが取れそうになっていないか、フライシートのキャップがはずれそうになっていないかなどです。



写真－6

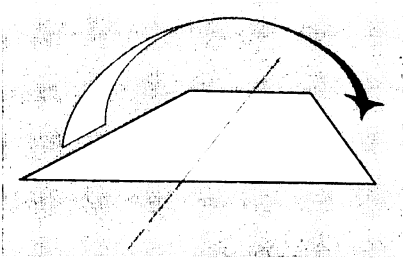
こわれたところがあったら破損内容を荷造り用の荷札に書き、テント収納袋の表に付けておきます。（写真－6）

■家型テントのたたみ方

シート

それではテントをたたみましょう。これからお話するのは晴れもしくは曇りの日の方法です。雨天の場合は後で説明します。

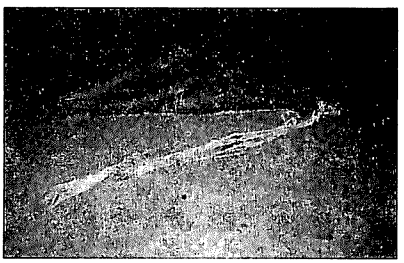
一番簡単な四角のフライシートからお話しましょう。



図－1

シートの内側を上に向けて広げます。あおり止めのロープが出てきます。このロープは大変長く、そのままでは他のあおり止めとからんだりしますので、適当にまとめます。やり方は写真－1、2のように二通りあります。写真－2のような方法ならすぐに束ねられ、しかも解きやすいのですが、結び目のコブが大きくかさばります。写真－2のように引きとけ結びを連続させたチェーンにしますと1ヶ所だけがかさばるということはありません。しかし、作るのに多少時間がかかり、またほどくときもときどきからまって手間取ることがあります。写真－1の方が間違いなく簡単にできるので、いつもそのようにしています。止め結びのところはきつくしめずに祝儀袋の水引のように平らにしておきます。

張り綱やあおり止めがとび出さないように内側に納めながらたたんでいくようにすることが大切です。



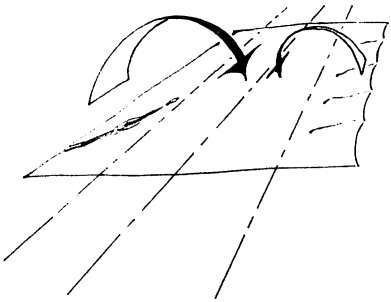
写真－1

写真－2

両端を内側に折り込みます。このとき気を付けておかねばいけないのは、中心でピッタリと両端を合わせないことです。あの薄い新聞紙ですらきっちりたたむのは至難の技なのですから、ましてテントやシートとなると心してかからなければすぐにダンゴになってしまいます。

写真－3　左のフライシートのようにならないように張り綱などは右側のようにすべて内側に折りこむ

わかりやすいように自転車のチェーンを使ってお話しましょう。下の図のチェーンがたたもうとするシートの断面だと考えてください。たたみ終えテント収納袋に入れるときのフライシートの厚さは3.5cm～4cmもありますから、そのことを頭にいれておかなくてはなりません。図－3のように端を合わせてたたもうとしてもたためません。図－4のように図－5のAの高さの分を考えに入れてはばを開けてからたためば無理なくたたむことができます。



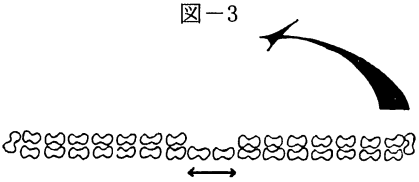
図－2

大型テントをたたむときのコツも四角くたたむことです。

トラックに運んだり倉庫に収納するときも丸型より四角の方がコンパクトに納めることができます。

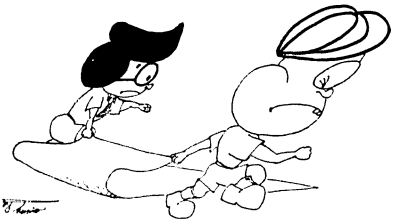
図－3

図－5

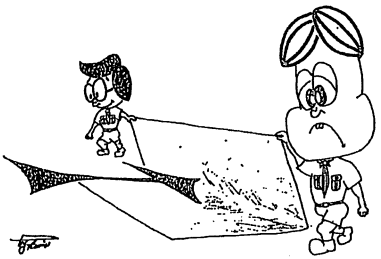


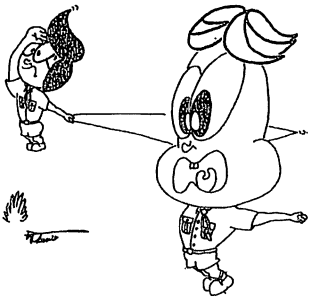
図－4

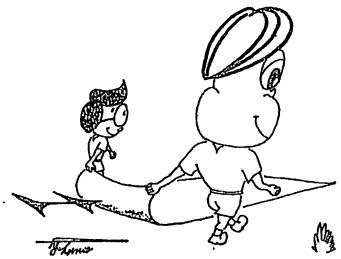
大きなシートをたたむ時のコツ

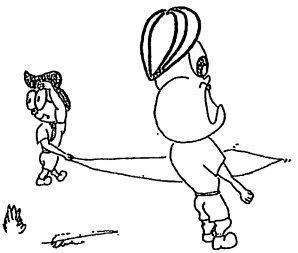


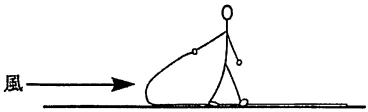
大きなシートはわずかな風がふいても、たたみにくいものです。風上に向かってはたたみにくいので風下方向にたたみますがのんびりたたんでいると、下図のようにシートを風に流されてしまします。このようなときには思い切って風上に向かってシートをおくり、その反動を利用していっきにたたみましょう。そうすればあまり動きまわることなくたためます。



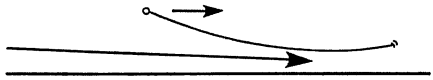






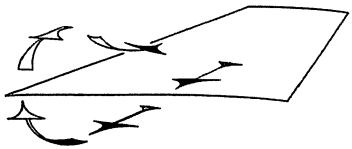


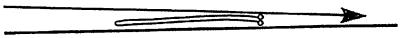
図－1



図－2

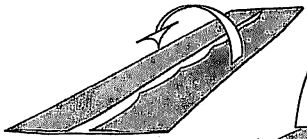
図－3



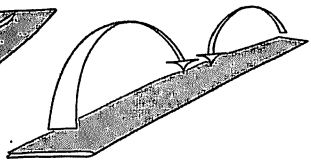


図－4

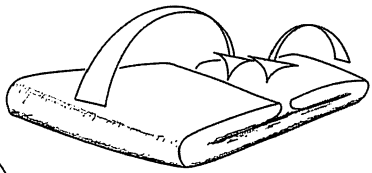
図－5



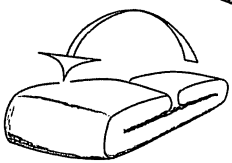
図－6



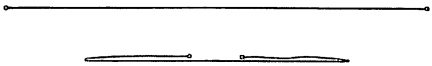
図－7

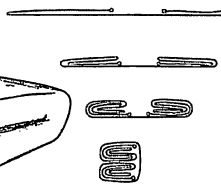


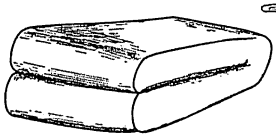
図－9



図－8



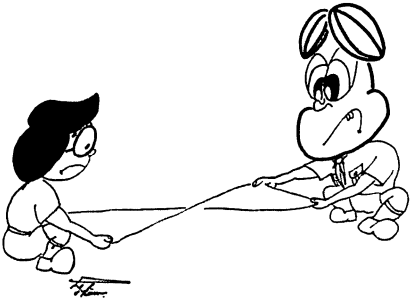




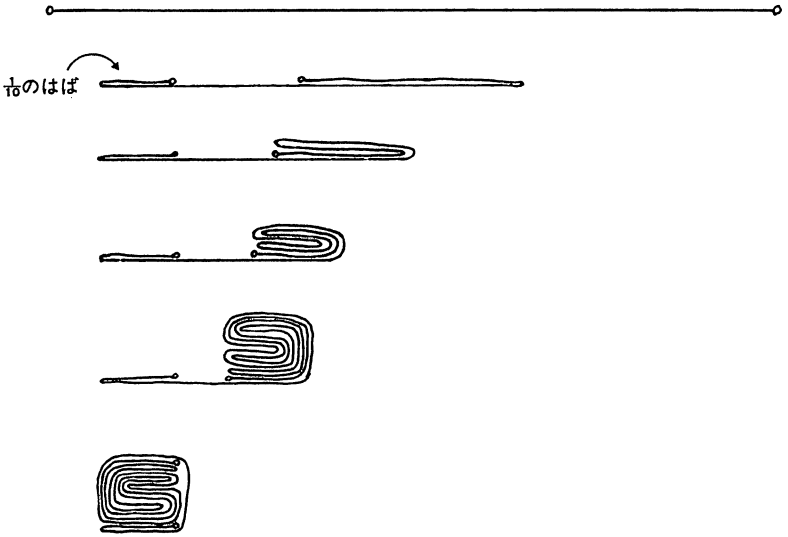
図－10

図－11

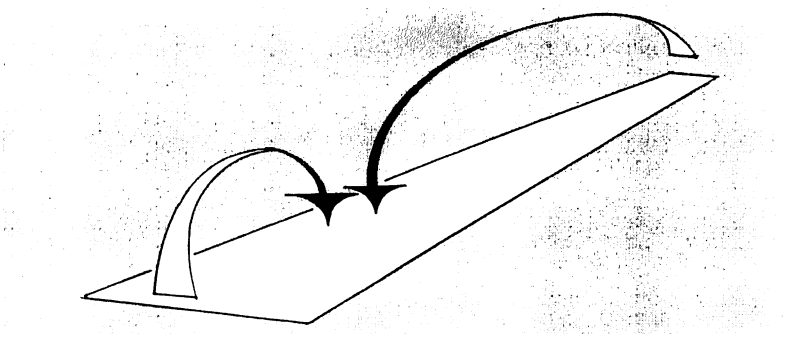
大型シートの基本的なたたみ方です。このたたみ方では少し大きすぎてピッタリと袋に入らなければ色々と工夫して小さくたたんでください。前項のたたみ方では図－7から1/8の大きさにたたまれますが一つの例として1/10にたたむ方法をお話ししましょう。



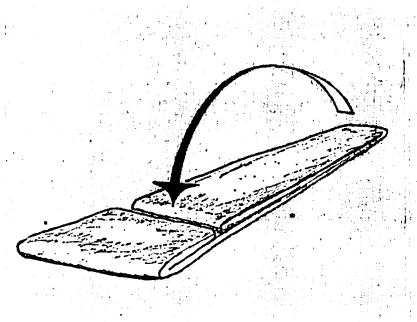
図－7からのつづきです。



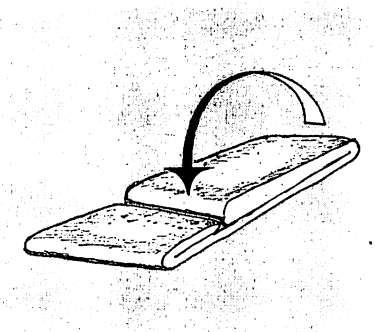
図－7①



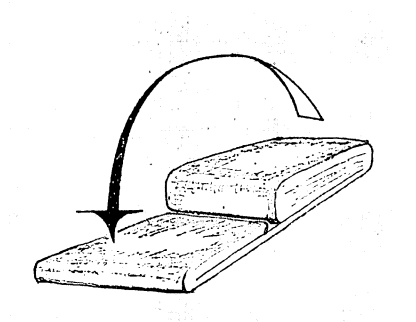
図－7②



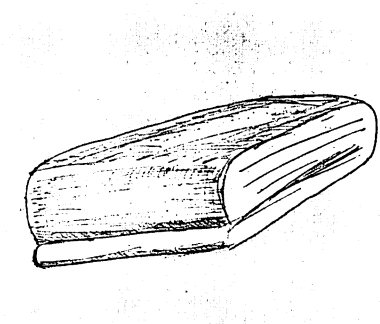
図－7③



図－7④



図－7⑤

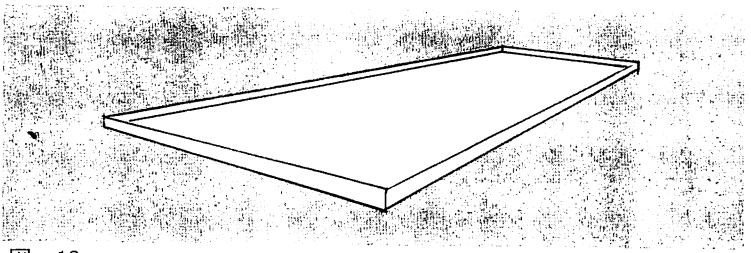


図－7⑥

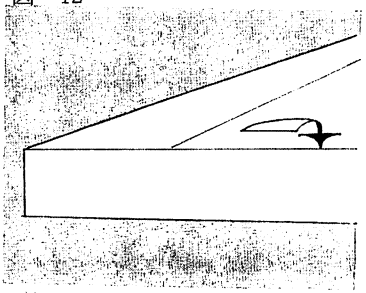
グランドシートのたたみ方もフライシートとほとんど変わりありません。テントをたたむ基本のように両側からたたんでいきましょう。

一部の大型テントにグランドシートの縁が立ち上がり砂や土が入りにくいようになっているものがあります。まず立ち上がりをていねいにおってからたたみましょう。

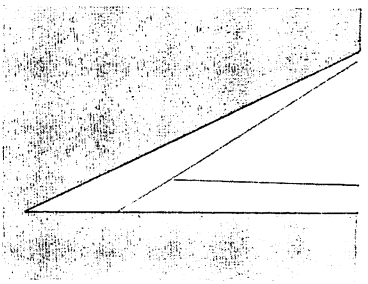
図－15のように五角型になっているグランドシートはAからおり長方型にしてからたたみます。



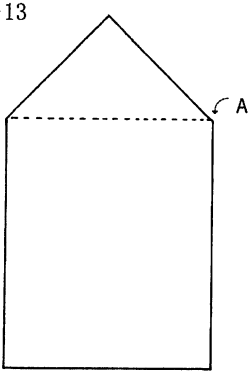
図－12



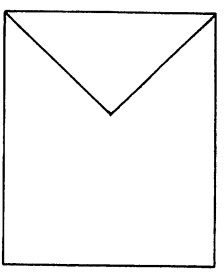
図－13



図－14



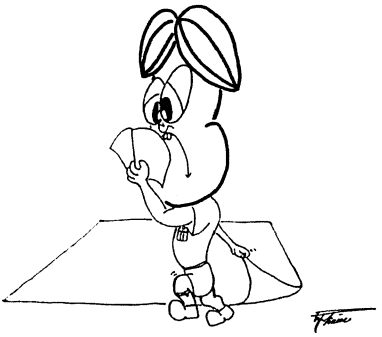
図－15



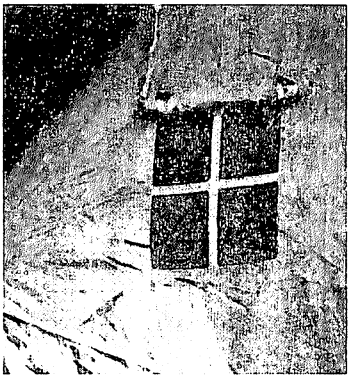
図－16

テント本体

それでは一番複雑な形をしたテント本体をたたみましょう。とびらやウォールに付いているジッパーは全て全開します。逆に窓が開いていたら閉じてください。そのままにしていますとかさばる原因になります。（写真－1、2）

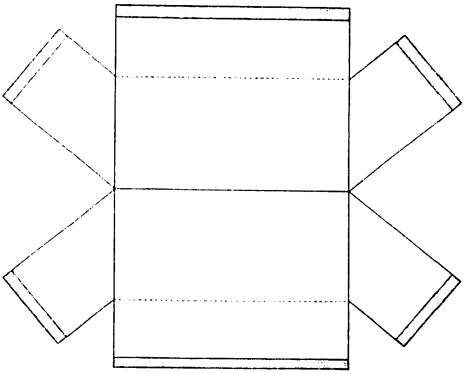


晴れもしくは曇りの日でしたらテントの内側を上に向け広げましょう。（雨の日のたたみ方は後載します。）

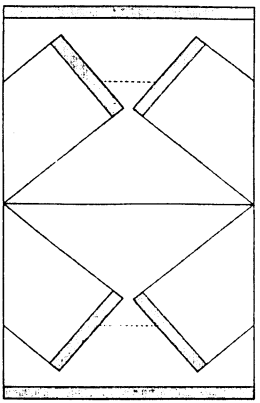


写真－1 窓が開いていたら閉じて下さい

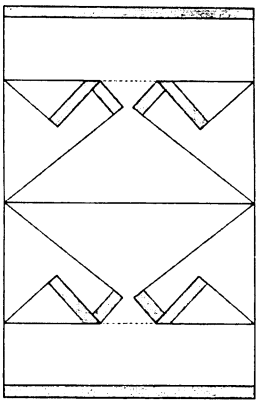
写真－2



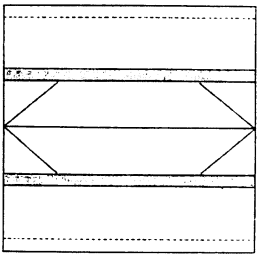
図－1



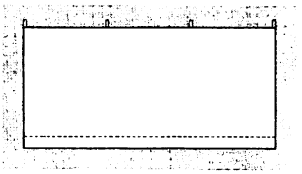
図－2



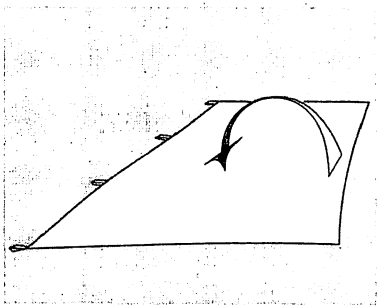
図－3



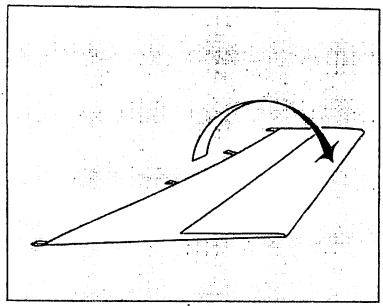
図－4



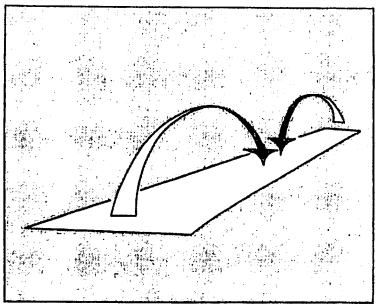
図－5



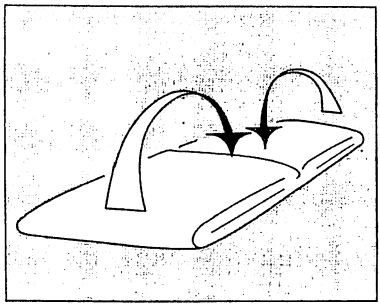
図－6



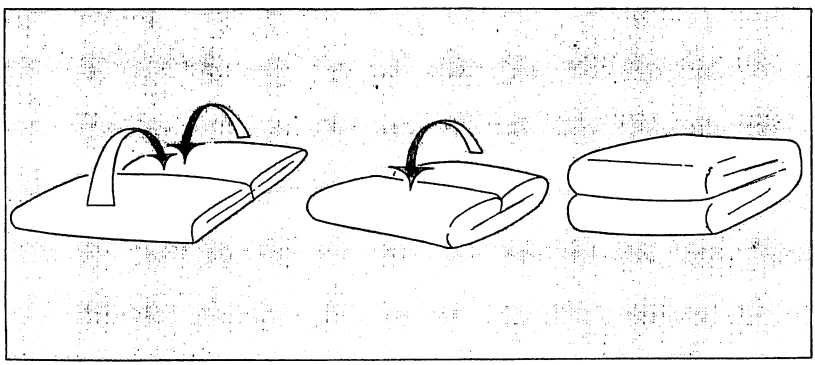
図－7



図－8



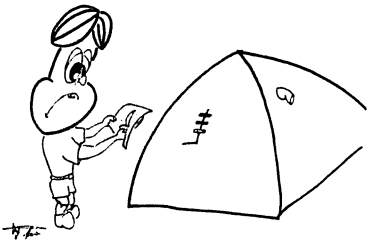
図－9



図－10　図－11　図－12

■テントの収納

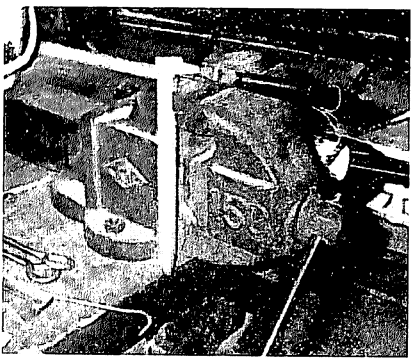
テントの補修



キャンプ場から帰ったら、翌日にはテントや備品を点検し、破損箇所を直しておきます。テントはいつでもすぐにつかえる状態にして格納しておかなければなりません。

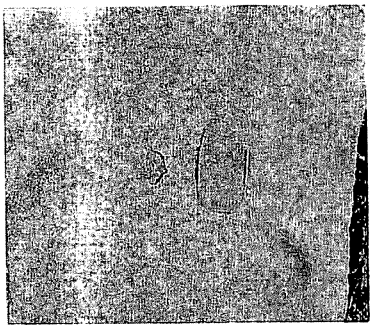
曲がってしまったペグやピンは、大型の万力ではさみ、ハンマーでたたいて元の形に戻しておきます。

食堂用マーキーやドーム型テントのランナーなどのアルミでできているものは、ペンチではさんで簡単に直すことができます。



ナイロンテントの補修

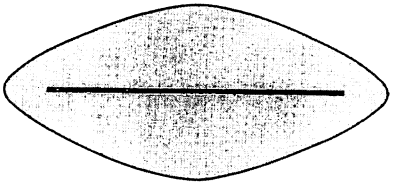
ナイロンの欠点は熱に弱いことです。燃えるというよりは溶けてしまします。小さな火の粉が付いても穴が開いてしまいます。また、何かのはずみで、細い枝などがささって穴が開くこともあります。穴や鉤裂きを発見したら、リペアメントテープ（市販されている）で補修します。例えば図－1のように、少しだけ切れている場合は、その部分をカバーするように貼れば十分です。長く裂けている場合は横方向の力に弱くなりますから、図－2のように裂けた部分より少し大きめに貼ります。さらにもっと長く引き裂かれていれば、幅広くテープを張らなければなりませんが、テントを畳んだ時にかさばらないよう無駄なく有効に貼る必要があります。横方向から力が加わると一番弱いのはまん中の点になります。ですから、たたんだときにかさばらず、しかも強度を保つにはリペアメントテープを図－3のように貼ります。また、鉤裂きになっている場合は図－4のように貼れば効果的です。



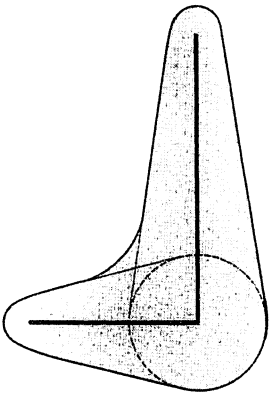
穴の大きさに合わせてリペアメントテープを切り，四角を落します

図－1

図－2



図－3



図－4

大型テントの補修

テントの布がさけたり、穴があいてしまったときには、どうしたらいいのでしょうか。

ビニロンなどの厚手のテントの補修には、メリケン針と太めのビニロン糸が必要です。針はスポーツ店にあるテントリペアメントキット（キャンプ用品補修キット）に入っているものや、カーペット用の針を使ってもよいでしょう。

図に示した、セイルメーカーズ・ダン（SAILMAKER'S DARN：掛け縫い）は、キャンプ期間中など、時間がないときの補修に大変有効です。

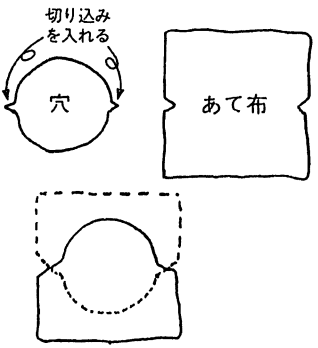
・キャンバスセメント

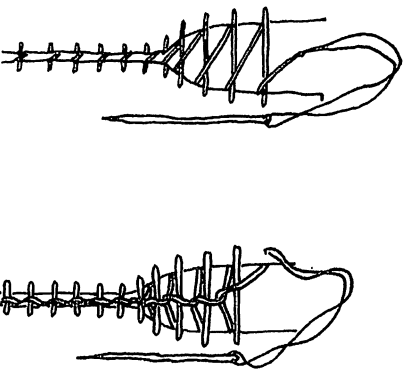
応急の修理ではなく、本格的に補修する場合には、キャンバスセメントを使います。

家庭科で習ったと思いますが、つぎを当てる要領です。裂けた部分の裏に布を当ててジグザグに縫います。そしてその上からキャンバスセメントをぬります。

穴をあけてしまった場合は、図のように当て布をして縫います。

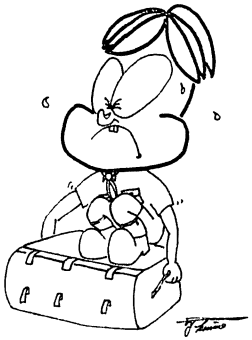
キャンバスセメントは、ゴムのように弾力があり、折りたたんでも引き伸ばしてもヒビがはいったりしません。わたしの経験では、-16℃でもその性能を保ちました。





テントの収納

たたんだばかりのテントは、空気がたまって実際の体積よりかさばります。ですから力まかせに押し込まず、体重をかけて空気を押し出すようにゆっくりと両手でひもを引くようにします。ひざや足を使えば楽に両手でひもを結べます。結び方は、簡単に解けることが一番、いわゆるチョウチョウ結び(花結び)がよいでしょう。



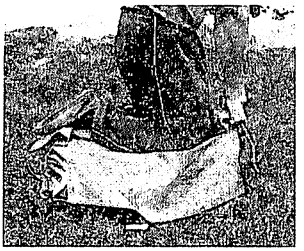
テントの保管について

これはいうまでもないことですが、乾燥して風通しのよいところにしまうことが原則です。理想的なところはなかなかないもので、時々点検して、上下を逆さにしたり、保管期間中2回程度は広げて乾燥させます。

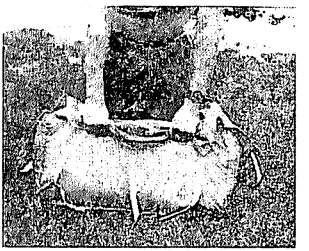
テントを保管する場合、乾燥を重視して収納袋に入れず、袋は運搬用とする考え方もあります。

理想的なテントの保管方法は、すのこの上に平らに並べることですが、これでは面積を多くとりますから、一つの「ます」にテントがひとつはいるようにした棚を作れば、空間が活用できます。

参考：ジャンボリーテントの収納



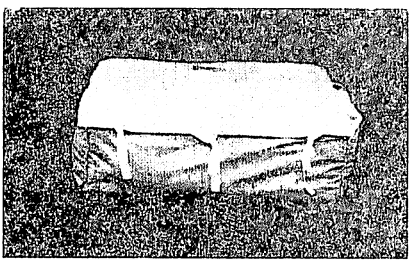
① 足で押さえつけながら、四隅をピッタリと入れます。



② テントに乗り、ひざで押さえて両手で収納袋をゆっくり引いて中の空気を出します。

③ 収納袋の四角い形に合わせるようにテントをつめます。

④ 両膝でしっかり押さえつければ、ひもも簡単に結ぶことができます。



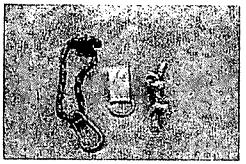
⑤ これでできあがりです。どのタイプのテントでも、はじめから収納袋の寸法に合うようにきちんとたたみ、空気を押し出して袋に入れるということが必要です。手間をおしまず、丁寧に作業する事が、結局時間もかからず、一番効果的ということです。

■雨の日にテントを張る

雨の日のテント張りはいやなものです。設営のときに雨が降っていたら、とりあえず雨が止むか小降りになることを期待して少し様子を見ましょう。しかし、望み薄となれば仕方ありません。あきらめましょう。雨が降っているからこそ水の流れる道筋や水の溜まる場所がはっきりわかり、テントを最適の位置に張ることができると考えれば、気持ちも晴れるというものです。

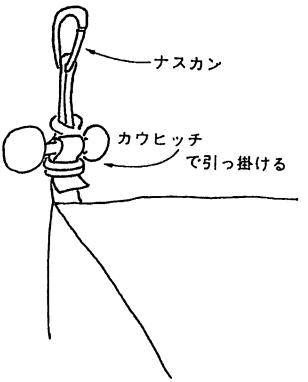
ドーム型テントの場合、グランドシートの下にオールウェザーブランケットやエマージェンシーシートのような水を通さないものを敷くのもよいでしょう。ただし、グランドシートからはみださないようにしないと、逆に水を集めてしまうことになってしまいます。

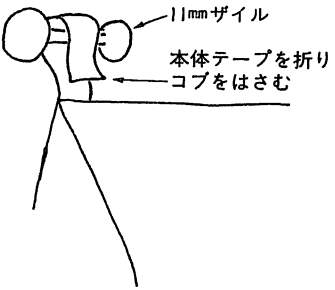
家型テントの場合、いろいろな張りかたが考えられますが、先にフライシートを張り、その下でテント本体を張り上げればよいのです。ジャンボリーテントのように、構造上フライシートを先に張れない場合がありますが、テント本体をリッジポールから吊っているリボンテープを脱着式に改造すれば、雨の日の設営、撤営とも、ずいぶんと楽になるはずです。今回わたしが行った改造では、リボンテープを切ったり、縫い付けたりせずに使えるようにしたため、張り上がったテント本体の形が多少ゆがみましたが、実用上まったく問題ありません。本来テントメーカーがこのように作っておいてもらいたいものですが、特にジャンボリーテントのような構造のテントは今回の記事を参考にして、さらに使いよいものに改良していってもらいたいと思います。

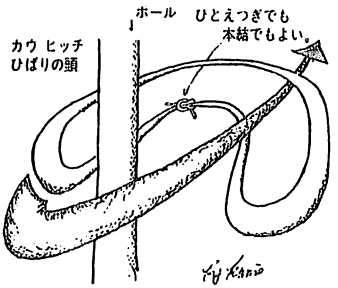


道具左からナスカンとロープD環、11mmザイルで作ったコブ

下図を参照



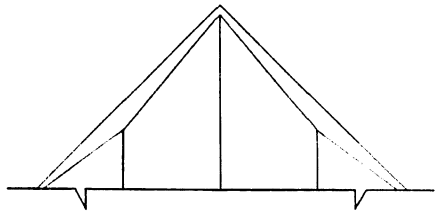




カウヒッチ

フライシートから張る手順

1. テントを張る場所の中央にロープを張って目印にする。
2. そのロープを中心にフライシートのペグを打つ位置を決める。この場合、普段ペグを打つ基準となるグランドシートが広げられていないのでペグを打つ位置がわからないと思うかもしれませんが、上の図を見てください。

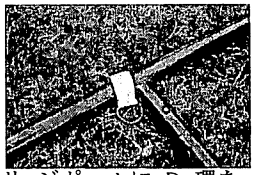


指導者テントの断面図

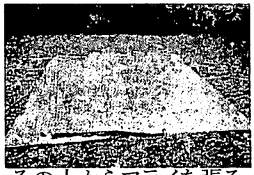
これは、指導者テントの断面図ですが、フライシートの傾斜角は40度～45度になっていますから、支柱をそのまま物差しがわりに使うことができます。

3. 支柱とリッジポールを組んで置き、その上にフライシートをかぶせる。
4. フライシートの腰綱をペグにかける。
5. 一気に上げ、フライシートを張る。
6. テント本体をリッジポールに取り付けて張る。

※ フライシートの腰綱はテントによっては等間隔とはかぎりませんので、リッジポールにビニールテープなどで印をつけておきましょう。



リッジポールに D 環を組む

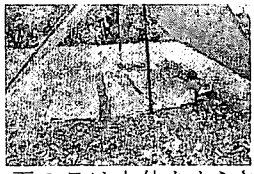


その上からフライを張る

いっきに上げる

ナスカンをD環に掛ける

完 成



雨の日は本体をぬらさずにたためます

■ザック

ザックを選ぼう

『スカウティング・フォア・ボーイズ』より

キャンプ用具を正しく梱包する方法を覚えたまえ。アフリカや北アメリカではよく頭にひもをかけて荷物を支える。

今回はザックの選び方についておはなししましょう。昨今のアウトドアブームで、本当にたくさんの種類のザックが出現し、自分に適したものを選ぶことはたいへんな作業になってしまいましたが、目的に応じた大きさ、形、機能をよく考え選ぶということが大切です。

デイパック

これは文字どおり日帰りのハイキング向きの小さいザックです。

しかしたとえ日帰りであっても、弁当、水筒、雨具、防寒具は必要ですから、あまり小さいものを選ばないようにしましょう。

フレームザックの特徴

どんなに山登りが好きなひとでも、背中の荷物の重さに耐えかねて、ほうりだしたくなったことが一度や二度はあるはずです。

肩や背中にずっしりとくいこむ重さは呼吸さえも困難にしてしまいます。重い荷物を少しでも楽に運ぼうと、いろいろな努力や工夫が積み重ねられ現在のフレームザックが生まれました。フレームザックは、肩と背中にかかる荷重を腰にも分担させることにより、重さを軽減させます。

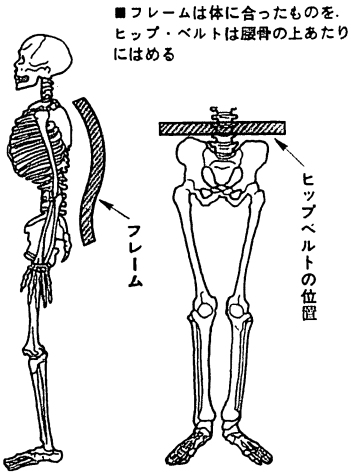
図－1 いろいろな形や大きさがある。イラストは上下2室式のもの

ヒップベルトをしめる位置は、おしりとウエストの間になります。(図－2)腰骨に乗せるようにしめます。ザックを背負ったら首をすくめるようにし、このときヒップベルトをしめます。

腰だけで荷重を受けとめたままですと、腰骨が痛くなり、ひどい場合はアザになったりします。ですから、肩と腰に交互に荷重がかかるようにしたり、両方にうまく荷重を分散しながら歩くことを覚えましょう。

エクスターナル・フレームザックとインターナル・フレームザック

フレームザックの歴史も、いわゆるバックパッキングブームから数えると12、3年たつことになります。当初からの、四角いフレームにザックをつけた形のものを、エクスターナル(EXTERNAL・外面)と呼んでいます。(以下Eパックと略す)



図－2

フレームザックの背負い方

必ず両方のハーネスをつかんで持ち上げる

いったんヒザの上にのせてからカタを入れる

首をすくめるようにしてザックを持ち上げヒップベルトをしめる

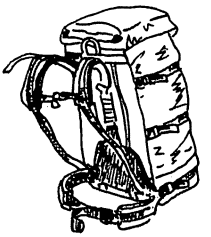
このタイプはなだらかな野山や、平坦な道を長い距離歩くのに適しています。

しかし、登山やロッククライミングなどには、とび出したフレームがじゃまになってしまうことがままあります。

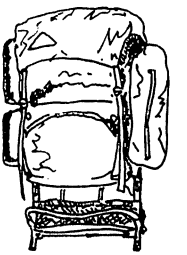
そこで、フレームザックの長所をいかして、コンパクトにまとめた、インターナル(INTERNAL・内部)フレームザック(以下Iパックと略す)生まれました。

このタイプはフレームが内部に入っており、一見アタックザックのようでフレームザックにはみえません。

フレーム自体はEパックより重く、値段も高いのですが、体に合ったIパックはEパックのように看板を背負っているような違和感がなく、たいへん快適です。



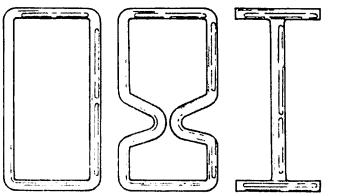
エクスターナル・フレームザック
見たところ，アタックザックと区別がつかない



インターナル・フレームザック
いわゆる「背負子」スタイル

フレームの形

フレームザックの最大の長所は、荷重の分散です。そのためにはヒップベルトで押さえた力が直接ショルダーハーネスに伝わる構造のフレームでなくてはなりません。フレームの形は長方形かエの字型になるはずです。単に堅いフレームが入っただけのものではヒップベルトが機能を果たしません。



フレームの形いろいろ

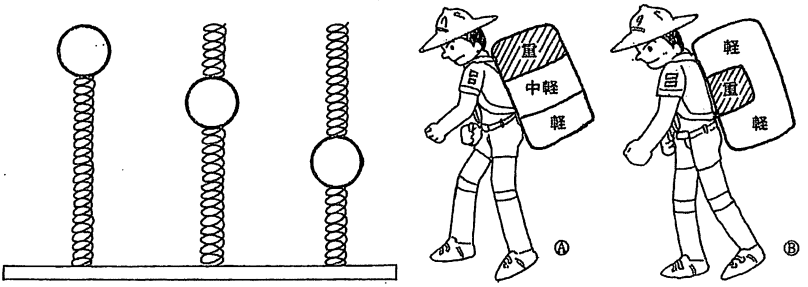
フレームザックは万能か

フレームザックはたいへん優れたザックですが、先ほど触れたように、登山やロッククライミングには不向きです。また、ボーイスカウトの班員みんながフレームザックでキャンプをするとしたら、テントのなかの置き場所にこまってしまうことでしょう。普通のキスリングやアタックザックならまるめて自分の寝るスペースの足もとに置けば問題ありませんが、フレームザックではそうはいきません。フレームザックは、1～3人程度の少人数での行動に向いているようです。

ザックの詰め方

－鉄1キロと綿1キロはどちらが重い？－

答えはもちろん「同じ」です。しかしザックの場合は同じ重さでもパッキングの方法いかんで、たいへん重さの感じかたがちがってきます。



重いものの位置は，バランスとのかね合いで決まる　Ⓑの方がバランスがよい

パッキングの基本

重いものは上に、そして背中側に、といわれています。背負っている人間の重心をとおる線に近く、また上に重いものがくるようにするとバランスがとりやすくなります。世界のいろいろな民族の間で、重いものを頭に乗せて運ぶ習慣があるのも、この意味ならうなずけます。

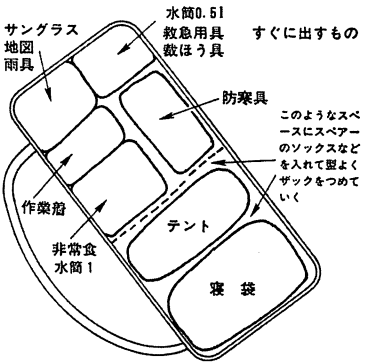
重いものは「一番上」がよいのか

さて、ザックをパッキングする場合の重いものの位置ですが、私の経験からいうと、ザックの真ん中より少し上の背中側がよいと思います。登り坂やただ立っている場合は、一番上が楽ですが、下り坂や、アップダウンの多い尾根筋を歩くときや、歩いて何かのひょうしにバランスを崩した場合には、「一番上」ではバランスの回復がしにくくなります。

重いものと軽いもの

昔は、キャンプ携行品重いものビック3は、テント、カメラ、カン詰め、でしたが、インスタントやフリーズドライ食品などの出現でキャンプのスタイルもずいぶんと変わってきました。現代のキャンプ用品を、重い、軽いに分けて表にしてみました。実際のパッキングは図－3を参考にしてください。

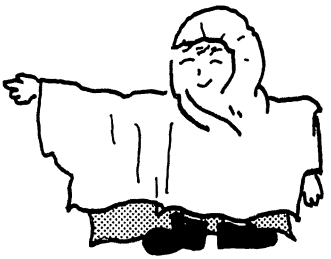
重いもの	軽いもの
テント	寝袋
水筒	地図
懐中電灯	インソレートパッド
非常食	雨具
カメラ	救急用具
双眼鏡	裁ほう具
	サングラス
	フィルム
	洗面具
	防寒具
	モカシン
	筆記用具
	作業着



図－3

■雨具を選ぶ

形



いろいろな雨具が出まわっていますが、大きく分けると、ポンチョのような形のハッキリしていないタイプと、レインスーツタイプに分けられます。

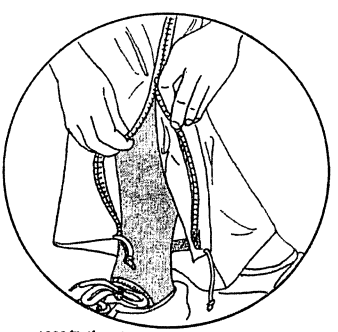
ポンチョ

よく知っているとおり、長方形の防水シートにフードをつけたものです。ザックを背負ってもそのまま着用することができ、体とザックを雨から守ります。しかし、ポンチョは構造上、強い風にはあおられてしまい、全身が濡れてしまうこともあります。また、下り坂では、すそが足元をかくしてしまうので、登山向きとはいいにくいと思います。

レインスーツ

体にフィットするレインスーツは、ポンチョのように、風にまくれたり、下り坂で足元が見にくくなったりするようなことはありません。また、キャンプで朝早く出発するときなど、ズボンを着ていれば朝露で足がびしょびしょになることもありません。

もしレインスーツを買うとしたら、作業着の上からでもすぐ着けられるよう、また動きを楽にするためにも、一回り大きめのサイズを選ぶべきだと思います。中には登山靴をはいたままでも着用できるよう、ズボンの両サイドにジッパーを着けた大変便利なものもあります。



1986年ボーイスカウトのカタログより

レインスーツはこのように便利なのですが、ボーイスカウトの多くはポンチョを使っているようです。なるほどポンチョは多少体が大きくなっても充分使えますから、成長期のスカウトにはもってこいかもしれません。それにボーイスカウトは、キャンプやハイクで雨具を使うとしても、年に2週間ほどでしょうから、ある程度成長がとまるまでは、防水シートとしても使える万能ポンチョのほうがよいかもしれません。

ポンチョの長所は、通気性がよいことです。スーツタイプは体がフィットしているだけにむれやすく、そのため、いろいろな不都合がでてきます。

雨具の素材

・ビニール

完全防水で価格はやすいのですが、むれる、かさばる、引っ掛けたときに破れやすい、などの欠点があります。

・ナイロン

ビニールに比べてかさばらなくて軽いのですが、はっ水性防水ですので、長時間使っていると、雨水が浸透してきますし、通気性がありません。

・ゴム引き

ナイロン地にゴムを薄くコーティングして、ナイロン防水の不完全さとビニールの弱さをカバーするために作り出され、今から15年ほど前では最高の素材でした。

・ハイパロン

現代テクノロジーを使った第一弾。ポリエチレン系合成ゴムで、耐久性、耐油性、耐焔性、酸化性薬品への対抗性に優れ-30℃での使用にも耐え、天然ゴムや合成ゴムに比べて耐摩耗性は2倍以上あります。以前のゴム引きに比べ、軽く活動しやすいことはたしかです。

なぜ雨具の内側はむれるのか

夏、冷蔵庫で冷やしておいた缶ジュースをテーブルにおくとみるみるうちに水滴が付いてきます。こういう現象を「結露」といいます。暖房している部屋のガラスの内側にも発生しますし、寒いところでラーメンを食べたり、冬の満員電

車にのったりしたとき、メガネがいきなり真っ白になって、何も見えなくなったことはありませんか？これも「結露」です。

空気中にある物体をなんらかの方法で冷やしてゆくと、ある温度に達したとき、その物体の表面に露が発生する、この温度を「露点温度」といいます。露点温度は、表－1のように気温と湿度で決まります。

結露の現象は、雨具にも起こり、ビニールの内側がぬれてしまうのもこのためです。

表－1　気温が15℃の相対湿度と露点の関係

相対湿度(%)	100	90	80	70	60	50	40
露点温度(℃)	15	13.4	11.6	9.5	7.3	4.6	1.5

例えば、気温15℃のときに湿度が70%とします。そのときに空気中にある物体(水道の蛇口)が9.5℃まで下がると表面は曇ります。

雨具には通気性が必要

人間は恒温動物です。一定の体温(36.5℃程度)を維持しようという機能が働いています。体が熱くなると、汗をかき気化熱によって体温をさげ、寒いときには、筋肉にふるえを起こして熱を発生させようとします。

さて雨具ですが、たとえば、通気性のない雨具をつけて、雨の中荷物を背負って坂を登ることを考えてみましょう。

〔運動による体温の上昇〕
↓
〔発汗〕
↓
〔雨具内の湿度上昇〕
↓
〔汗、蒸発しにくくなる〕
↓
〔体温下げられず〕
↓
〔雨具内の湿度、いっぱいまで上がる〕
↓
〔結露には最適の条件〕

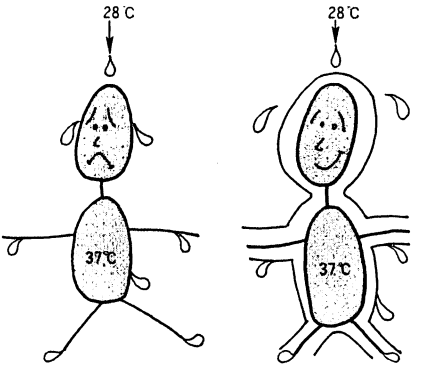
つまり、雨具に通気性がないと、汗だく、ムレムレ、ビショビショ、になってしまうということです。

ですから雨具には、雨を通さず、空気や水蒸気をどんどん通すという、相反する性能が要求されるのです。

もしも、雨具を付けないで雨の中を歩いたら

雨具を付けても濡れるならと、水泳パンツ1枚で雨の中を歩き回ったらどうでしょうか。

図を見てください。どんなに熱い夏だって体温と同じ湿度の雨が降ってくることはありません。はだかで雨の中を長い時間歩き続けると、体温がうばわれ、危険な状態になります。必ず何らかのプロテクションがいります。



新素材について

最近いろいろな素材が出回っています。まずそれらがどんなものか説明しましょう。

・ゴアテックス

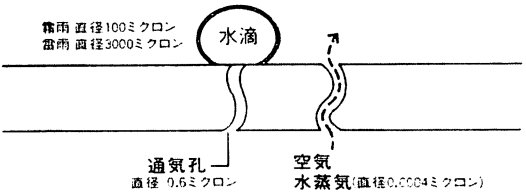
ごく薄い、多孔質の構造を持つ四フッ化エチレン樹脂のフィルムをナイロン地などにラミネートして作られている。フィルムの孔は直径0.2ミクロン。水蒸気の大きさが0.0004ミクロン。霧雨のサイズが100ミクロン以上なので、水蒸気は通すが、雨は通さないという原理。

・シロテックス

日本電工が開発。ゴアテックスと同様の構造を持つが、フィルムの穴のサイズが0.6ミクロンとやや大きく、そのため、通気性がよい。

・エントラント

東レで開発、特殊な防水ウレタン樹脂とはっ水剤を使ってウレタンを発泡させ、0.5〜0.2ミクロンの孔を無数に作ったもので、薄く、軽く、はっ水性にもすぐれている。



性能の限界

「衣服の中まで侵入する激しい雨や、体温を著しく低下させる酷寒の暴風を完全に遮断。しかも動きにともなう発汗から生じる蒸気だけは外へにがしてムレを解消」

これは、あるい防水透湿性素材のカタログに書かれている文章ですが、実際こんな素材があれば苦労しません。

私もゴアテックスの雨具を持っていますが、使ってみた結果はまずまず合格というところです。

メーカーはしきりに通気性を強調しますが、実際に荷物を背負って山を登れば、たちどころに汗ダクになるのは目に見えてしています。いままでの素材では、はだにベッタリくっついたものですが、新素材はそういうことがあまりない点ではよくなっていると思います。また、ベースキャンプなどで空身で歩く程度なら快適です。

縫い目の防水

新素材を使った雨具も、縫い目から浸水したのではしかたありません。縫い目が防水処理されているかチェックし、そうでないときは「シームシーラー」で縫い目を内側、外側ともつぶしてしまいます。

ザックカバー

スーツタイプの雨具を持ってゆくときは、必ずザックカバーも携行しましょう。素材は雨具本体ほど気を使う必要はありません。軽くて、丈夫でコンパクトということからすると、私はハイパイロンが適していると思います。

カサも使いましょう

テントで寝ていても、ちょっとトイレというときなどに便利です。班で1本、ビニールの安いカサを持ってゆくとよいでしょう。

■衣類

下着

下着(シャツ、パンツ)は、汗をよく吸うので綿のものがよいでしょう。

・トランクスタイプ

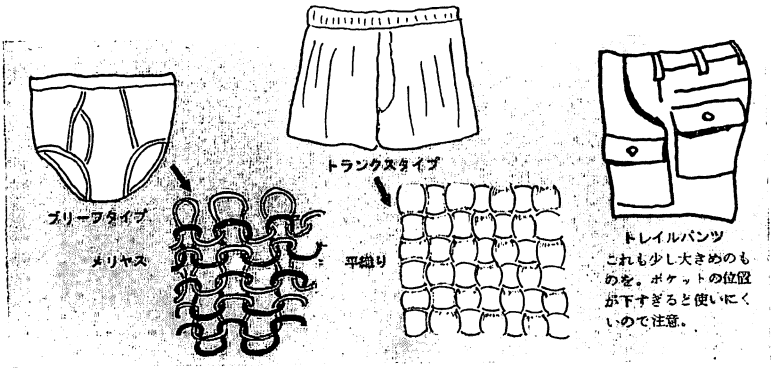
バイクパック(自転車によるバックパッキング)やカヌーパッキングなど、座っている時間が長いアウトドアスポーツには平織りで凹凸の少ない、このタイプが向いています。

・ブリーフタイプ

このタイプはメリヤスと呼ばれるループ織りで伸縮がきき、体にフィットするので一般に下着に向いています。

網シャツは、保湿性に高く通気性もよいといわれていますが、重い荷を背負うと網が皮膚にくいこんでしまいます。

あるメーカーではこの欠点をふせぐために、肩から背中にかけて平らな布を当てたものをつくりましたが、これでは普通のTシャツと変わらなくなってしまいます。

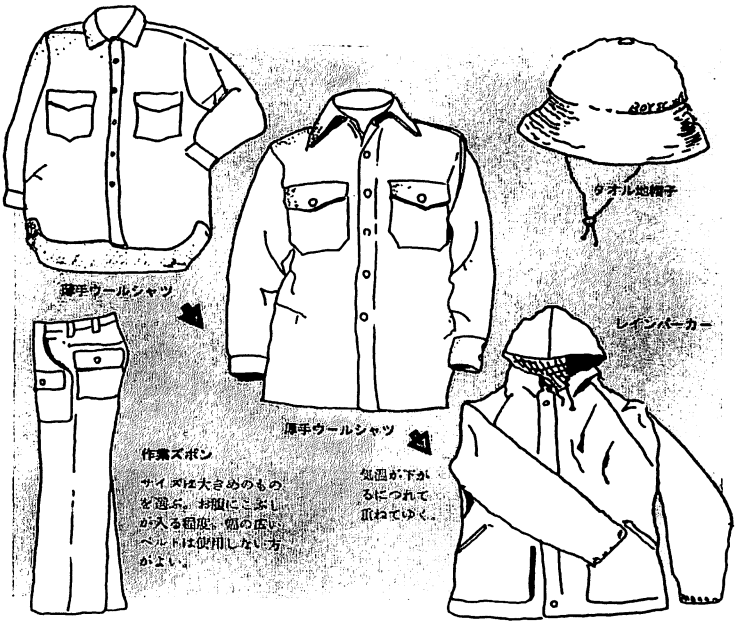


行動着

重いザックを背負って歩くときにはTシャツとショートパンツがよいでしょう。Tシャツの色は、好みですがオレンジ色や黄色ですと汚れが目立たないようです。ショートパンツのほうは、直接地面に座ったりしますから、カーキ色(カーキはほこりの意味)がよいと思います。

作業着

キャンプサイトで作業をするときは、上はTシャツで寒ければ防寒着をはおることになるでしょう。ズボンのほうは、じょうぶさと乾きやすさの点から、綿70%、ポリエステル30%のものが主流のようです。



帽子

帽子は寒い暑いにかかわりなく、いつでもかぶりましょう。頭を保護し、日差しをさえぎります。日射病でも死ぬことがあります。人の体は精密なコンピューターのような脳でコントロールされています。ここがオーバーヒートすると、体温も心拍数も異常になり、体が正常に作動しなくなってしまいます。また帽子をかぶっていれば弱い天気雨くらいなら平気で歩くことができます。

帽子の材質は春夏秋のスリーシーズンは、タオル地の白いものがよいでしょう。空気を保つ素材ですからはだ寒いときでもよいし、汗をすいやすく、炎天下では、水を含ませれば快適です。

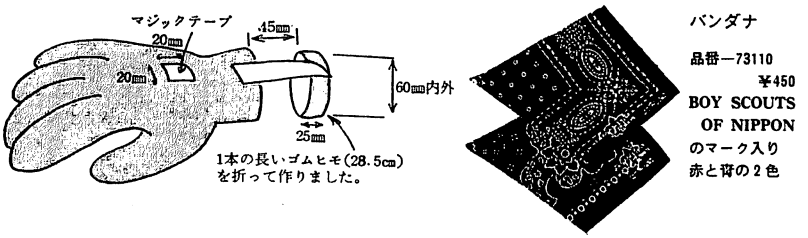
帽子にあごひもがついていないときは、細いナイロンロープでつけましょう。防寒着(冬季キャンプの防寒具は別の機会にお話します)

ウールのシャツを薄手、厚手各1枚というのが私の結論です。セーターはかさばるし、風が強いと役に立たない、トレーナーは濡れると防寒着になりません。寒く感じるにしたがって、Tシャツのうえに、薄いウールのシャツ、厚いウールのシャツ、さらにウインドブレーカーがわりのレインスーツをかさねてゆきます。私の経験ではそれでも寒くてがまんできないということはありませんでした。

作業用手袋

軍手は安くてどこでも手にはいりますが、すべりやすく、子供用のサイズがすくないなど、ボーイスカウトのキャンプにはむいていないように思います。軍手とおなじように安く手にはいるのが、園芸用の女性用手袋です。小型ですべりにくい素材でできています。

手袋はなくしやすいので、下図のようにしてみてはどうでしょうか。



制服

これは作業着ではありませんから、セレモニーや朝礼、営火など必要に応じて着用しましょう。

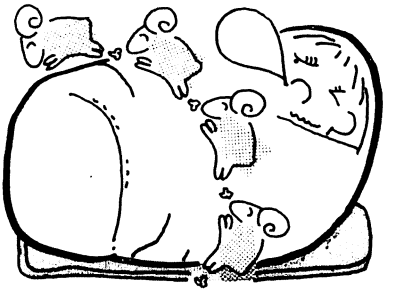
バンダナ

Tシャツをきているとき、首の後ろの日焼けを防ぐことができます。また、汗をふいたり、顔を洗ったときにつかったり、あれば便利なものです。

頭髪

(もちろん衣類ではありませんが)いわゆる山男のイメージは髪の毛が長く、ひげも伸び放題でというのですが、髪は短いのが基本です。濡れてもすぐに乾き、清潔を保つのに適しています。

■寝具を考える



寝袋

・素材（中綿）

ポリエステル加工綿

ポリエステルを特殊加工したもので、中空構造となっています（商品名はダクロンとかソルフェザーなど）。ポリエステルより保湿性があり、最大の特徴は湿気に強いということです。羽毛などに比べてかさばることが難点です。

羽毛

コンパクトということでは、これが一番です。体温で羽毛がふくれ、温かい空気を保ちます。しかし、身体の下になる部分は体重でおしつぶされてしまいます。下からの冷たさには弱くなりますので、なにかのインシュレーション（絶縁物）必要になります。また濡れてしまうと致命的です。寝袋としてまったく役に立たなくなってしまいますし、乾かすのに3日もかかってしまいます。

ですから湿度の高い夏にはダクロン。乾燥した冬にはコンパクトで暖かい羽毛がよいということになります。

−20℃〜−30℃の雪中キャンプでは、ダクロン寝袋を外側、羽毛の寝袋を内側にダブルにすれば問題ありません。

・形

大きく分けると次の3種類あります。

スクエアー型

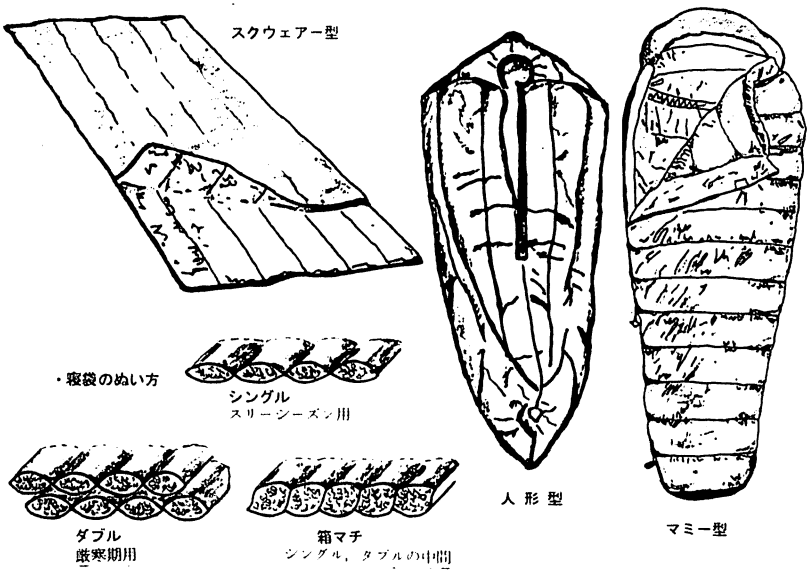
ファスナーがL字型に付いていて全開すると掛けぶとんのようになります。手足が伸ばせる利点がありますが、移動キャンプの場合にはより小さく軽いもののほうが便利です。

人形型

スクエアー型の空間のむだを省き、人が寝た形にフィットするようにして、よりコンパクトにしてあります。

マミー型

顔の出る部分をドローコードで締め、外気が入り込まないようにしてあります。足先まで円柱形になっており、保温性と寝ごこちのよさが特長です。



・ファスナーについて

トップ・オープン・ファスナー：

非常の場合に、スライダーを強く上にひきあげることで、ファスナーがいっきにフリーになるタイプです。

トップ・アンド・ボトム・オープン・ファスナー：

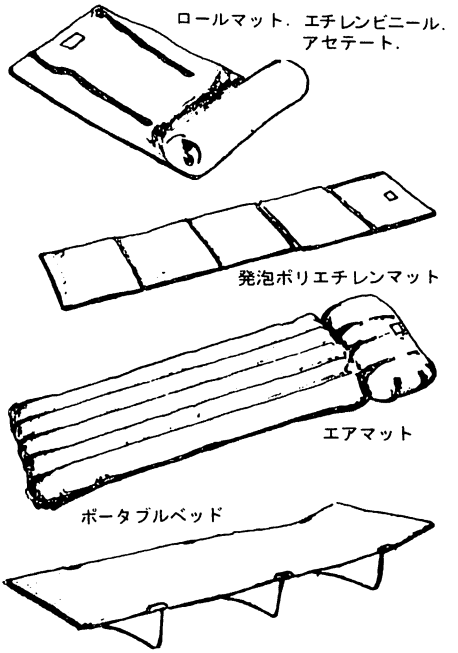
これは、足元からも開けることができるタイプです。夏の暑い夜などには、足を出し、なおかつお腹を冷やさず寝ることができます。また、おなじタイプの寝袋を2つつなげば、ワイドに使うことができます。

ベッドとマット

最近では、寝る位置の地面を掘り起こして整地することはしない傾向にあります。簡単なインシュレーターを使うことで、土壌を傷めず、快適に寝ることができます。

・ポータブルベッド

ベッドの利点は、地面が濡れていても関係なく寝られることと、ベッドの下を収納スペースに使えることです。欠点として下を風がとおりぬけるために冬には少々寒く、また重く、組み立てに時間がかかるということがあります。移動キャンプにベッドをもってゆく人はありませんが、長期の固定キャンプなどでは、隊に一つか二つくらい病人用として持ってゆくのもよいでしょう。



ポータブルベッドは腰かけるためには作られていませんから、寝るためだけに使いましょう。

・エアマット

地面からの冷気を防ぎ、不整地でも快適に眠れます。移動キャンプでは毎晩ふくらまさなければならないので、ちょっと不便です。また空気を入れすぎるとフワフワして寝がえりが打ちにくいことと、あなが開くことが心配です。海水浴用のエアマットより弱いので、水に浮かべて乗っかったりしてはいけません。また非常用の浮きになるとも考えないほうがよいでしょう。

・キャンプマット

アルミ蒸着発泡ポリエチレンという長い名前がついていますが、アルミホイルの裏に薄いスポンジが付いたようなものです。コンパクトで4つにたたんでザックの背中に入れればクッションになりますし、お昼ご飯のときに敷くのにも便利です。夏の野山のバックパッキングなら、これで十分でしょう。ただし、裏のスポンジが水を吸うので気をつけましょう。

・ロールマット

エチレンビニールアセテートというものでできています。スポンジよりも密度の高いクッションです。かなり厚くできているので、保温性が高く、また、水を吸い込みません。雪中キャンプでも寝袋さえよいものを使えばこれ一つでだいじょうぶです。

欠点はコンパクトでないこと、丸めるのもたいへんですし、ザックの上に乗せても幅をとってすっきりしません。

そこで、私は思いきってマットを4つに切ってしまい、それぞれを細いロープでつなぎ合わせてみました。結果は上々で、寝ごこちにも問題なくコンパクトにザックに取り付けることができるようになりました。

・ハンモック

これは思うほどに快適なものではありません。まず、身体がくの字になって、寝がえりが打てません。昼寝くらいならよいでしょうが、毎晩となると苦痛です。使うときは、足元が低くなるようにロープを張るといくらか楽に寝られ、出入りもしやすくなります。

パジャマ

装備というほど大げさなものではありませんが、夜着は重要です。寝袋の表面は化学繊維でできているので冷たく、ピタピタと身体にくっつきイヤな感じがするものです。また、昼間の汗を吸った下着をぬぎ、身体の汗をぬぐって乾いたパジャマに着替えるのは、健康管理の上からも重要なことです。パジャマの代わりに、長そでのTシャツとロングタイツ(ももひき)を着けて寝れば快適ですが、必ず夜着としてのみ使用するようにしましょう。

シュラフ

・シュラフ・シーツ

寝袋の内側に入れて使います。シーツを使えば汚れを洗うのも簡単です。

・シュラフ・カバー

寝袋の外側を包み、汚れを防ぎ、保温効果を高めるものです。水が中に入ってしまうとでていきませんから注意してください。

■カマド

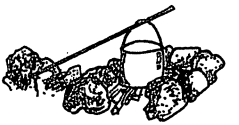
カマドについて

カマドは、「材料がかんたんに手に入り、すぐ作れる」ものと「作るのに手間と時間がかかるが、使い易い」ものの2つに分けられます。

図－1

図－2

図－3

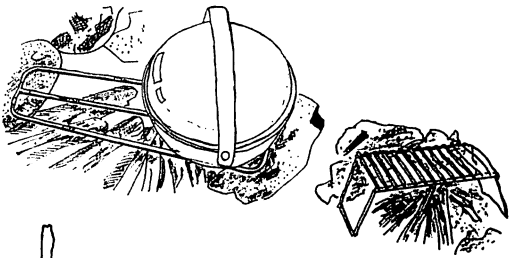


図－4

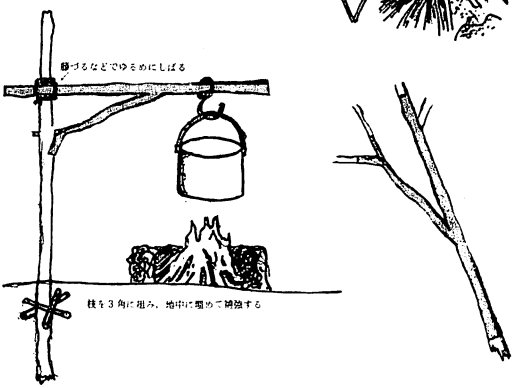
石を使って作る簡単なカマド

右図のようなカマドは手近な材料ですぐ作ることができます。

図－1の場合、バックパッカーグリルという軽くて折り畳みのできる焼き網を使いますが、廃品の冷蔵庫の棚が手に入ればそのまま使えます。



図－2はスリーストーンと呼ばれるスタイルのカマドで、手ごろな石があれば簡単にできて、まきもくべやすく特に丸い底のナベは確実にホールドできます。現在もケニアのマサイ族はこのタイプのカマドを使っています。



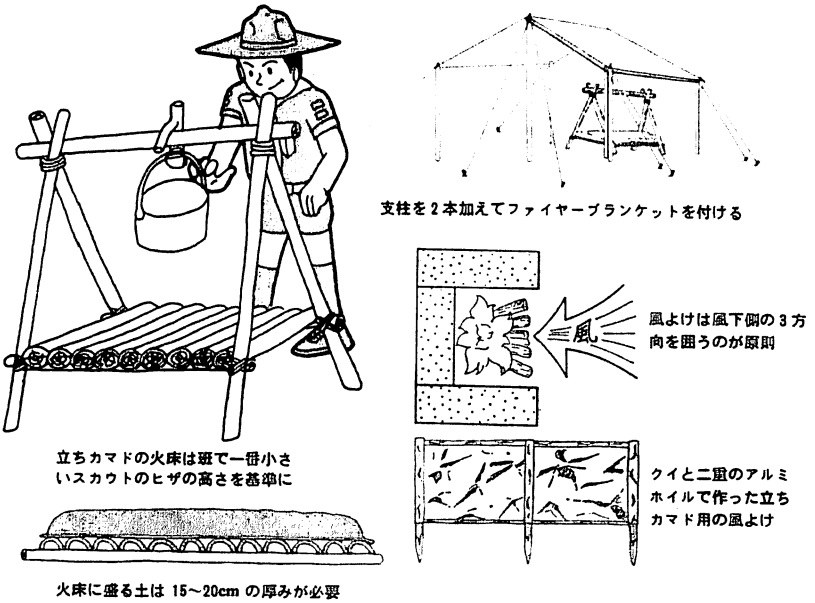
図－3、4のタイプの場合ナベをかける棒が火にさらされるので、生木がよいのですが、木を切ることは許されないので、鉄のパイプなどを利用するとよいでしょう。

立ちカマドを作ろう

作る時間、材料の調達、運搬、こわす手間を考えに入れなければ、立ちカマドがいちばん便利でしょう。調理中にしゃがむ動作がなく、カマドの位置を変えることもできます。雨の日には、食堂フライの下に移動して調理することができます。しかし、この場合絶対に忘れてならないのは、フライに火がうつらないよう、ファイヤーブランケット(初期消火に使うガラス繊維でできた布)を使って下図のようにガードすることです。

風よけを作る

野外での調理では、いつも風を考えに入れなければなりません。カマドの火が風で流れてしまうと熱効率はガタ落ちになってしまいます。風よけは、風上以外の3方向をふさぐように作るのが原則です。地面に作るカマドなら手近の石を積み、立ちカマドの場合は、イラストのようにアルミホイルで風よけをつくるか天ぷらガードなどを利用し、風上側に立てます。



携帯コンロの必要性と危険性

シニアースカウトになると、移動キャンプをしたり、カヌー、ヨット、パイオニアリングなどに挑戦したりと、大がかりなプログラムが増えてくることでしょう。そうなると、少しでもプログラムのために時間を使おうということになってきます。そこで携帯コンロを利用して、調理にかかる時間を短縮するという考えがでてきます。このことはボーイ隊でも同じかもしれません。携帯コンロを使えばもっとプログラムが充実するということも考えられるでしょう。

しかし、ここで考えたいのは、わたしたちは電話1本で救急車がくるようなところで活動しているわけではないということです。携帯コンロの便利さだけに目を向けるのは危険なことだと思います。まきを使って調理のできないスカウトに携帯コンロをつかう資格はありません。コンロがなにかの事故で使えなくなっても、辺りに落ちている木をひろって火を起こし、わずかな非常食で飢えをしのいだり、正しい状況判断のもとにビバークや避難ができることが、携帯コンロを使う条件だと思います。まず基本技術を完全に身につけ、それから応用や、省略の段階に入ることです。

食器について（カップなど）

・アルマイト

軽くて丈夫、洗いやすく古くからキャンパーに愛用されてきましたが、熱いみそ汁はすこしさまさないと口をつけられないという欠点があります。

・プラスチック

熱いものでも、すぐに口を付けられます。しかも保温性に優れています。水に浮くタイプもあり、カヌートリップには最適です。ただし、油っぽいものや、カレーライスなどは汚れが落ちにくい難点があります。

・シェラカップ

金属製ですが、熱いものでもすぐ飲めます。油っぽいものも簡単に洗え、ソロバックパッキングならこれひとつで十分です。ただ大中小などのセットはありません。

※キャンプではみな同じような食器をもってきますので、クギなどのかき傷で名前や印を付けておきましょう。

お湯をわかす実験

	1000cc
ふたをする	8 分 58 秒
ふたをしない	13 分 39 秒

なべ直径　150mm
室温　12℃
水温　5℃
1000W の電熱器を使用

お湯のさめ方

	5 分後	10 分後
アルマイト	63℃	48℃
プラスティック	73℃	57℃
シェラカップ	68℃	57℃
コーヒーカップ	73℃	63℃

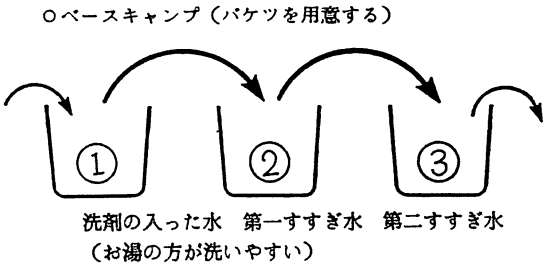
室温 18℃
熱湯 99℃
250W

☆フォーク、ナイフ、スプーン、はしがセットになったものを売っていますが、キャンプの食事ではスプーンひとつで十分でしょう。はしは、持っていかなくても枝やまきで簡単に作れます。

ナイフにフォークとスプーンがついたものがありますが、柄の根元が汚れやすく洗いにくいので清潔の点から勧められません。

食器の洗い方

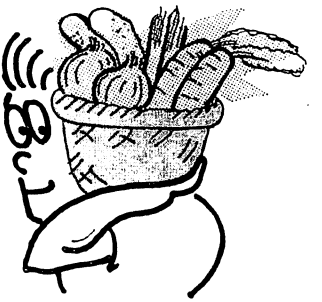
・ベースキャンプ（バケツを用意する）



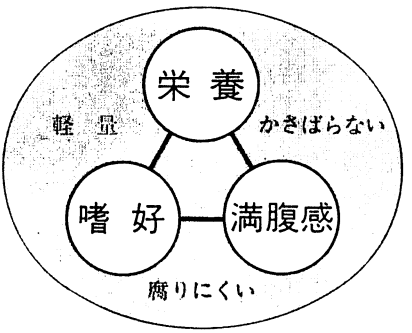
・移動キャンプ
トイレットペーパーでふく→燃やす
洗いにくいプラスティックの食器は使わない。

■食料を考える

普通、食事のメニューを作るときの要素は、栄養、好み、量（満腹感）の3つになります。キャンプの場合はこれに加えて、軽い、かさばらない、腐りにくいという要素が加わります。特に移動キャンプでは、運びやすい、腐らないということが優先され、好みや量はその次になってくることでしょう。



栄養について



私は以前このことについて、専門家に話を聞くチャンスがあったのですが、キャンプなど短期間の場合には、栄養についてそれほど神経質になる必要はないということでした。

人間の体には、調節機能があり、例えば非常に疲れたときには、簡単にエネルギーに変わる糖分つまり甘いものがたべたくなり、汗をたくさんかいたあとは、普通のミソ汁では塩気が少なく感じ、発汗によって塩分が失われたことを教えてくれます。

献立作りのポイント

キャンプで食事をするときは、家とは違っていつも快適というわけにはいきません。悪天候、疲労、環境の変化など、家にいるときとはずいぶんと違い、食欲がなくなるということも十分考えられます。ですから献立を作るときには、不調のときでも食べやすいもの、食欲を増すものを考えて工夫してみましょう。例えば、酢のものや梅干しなど酸味のあるもの、カレーやキムチなど辛いものは、食欲増進に効果があります。

量について

量は多いにこしたことはないと考えがちですがキャンプに冷蔵庫をもっていくことができない以上、食べ残しを出さないようにきちんと計算すべきでしょう。食べ残しを放置しておくことは、衛生的にもよくありませんし、野犬を呼び寄せることにもなります。

「腹八分目」といわれますが、私の場合、特に移動キャンプのときは六分目程度に押さえて、1日4食にしていきます。というのは、満腹も空腹も行動しているときにはよくないからです。

食材料について

例えば、卵は壊れやすい、肉は腐る、野菜は日持ちしない、パンはカビがはえるなどキャンプに適した食材料には始めからかなりの制限があります。もっともベースキャンプであれば、主食をごはんにして副食に肉や魚の缶づめを使ったり、野菜も3、4日ならもつのでサラダを作るなど、それなりに豊かな食卓になるでしょう。

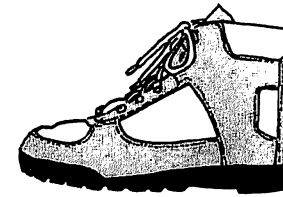
しかし、移動キャンプとなると「軽量」ということが重要な要素となります。この点を解決したのがフリーズドライフードです。水を加えればよいのですから簡単です。マウンテンハウス社のものは水分をとったあと圧縮してありますので、きわめてコンパクトになっています。しかしフリーズドライフードの欠点は、なんといっても価格が高いことです。

パッカーブレッド

長期の移動？で便利なのが「小麦粉」です。カビがはえず、軽くて、いろいろな物を作ることができます。普通のパンを作るにはイースト菌やショートニングなどと大変ですが、パッカーブレッドは同量の小麦粉と水を混ぜ、塩、コショウで味つけするだけです。あとは、フライパンを弱火にかけて、流し込み、裏表を焼きます。パンと同様ジャムやバターをつけて食べます。一度焼いたものは、そのまま2、3日は保存できます。

■靴を考える

・ベースキャンプではく靴



普通の運動靴で十分ですが、テントに出たり入ったりいろいろ忙しいので、マジックテープで脱着できるスニーカーがよいと思います。ゴムぞうりや、サンダルは安全の面から勧められません。ナイフやナタを使うキャンプサイトでは、当然のことでしょう。

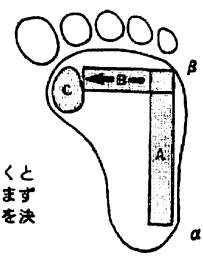
・行動中の靴

体重60kgの人が、20kgの荷物を背負えば、足の裏には80kgの荷重がかかります。靴はこの重さを受け止め、路面の凹凸から足を保護するものでなければなりません。事前のトレーニングも必要ですが、やはり、よい靴を選ぶことが大切です。

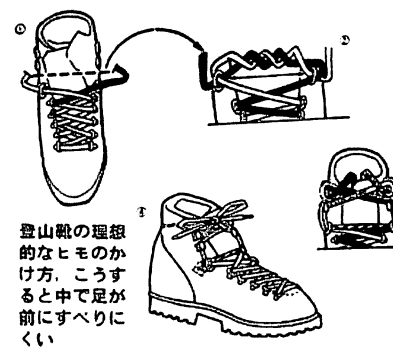
おすすめの靴

スニーカー型のウォーキングシューズ

軽登山靴



靴をはくときは、まずかかとを決める



登山靴の理想的なヒモのかけ方，こうすると中で足が前にすべりにくい

ウォーキングまたはクライミング用として、ライトからヘビーのいろいろな靴が出回っていますが、いわゆる登山家は、2500～3000m級の高山帯を縦走する場合を除いては、必要ないと思います。標高1000m程度の低山帯を歩くのであれば、底の部分がしっかりしたスニーカーならだいじょうぶでしょう。また、軽登山靴といわれる種類の靴でしたらさらに使いやすいと思います。

・靴ひものしめ方

下り坂でつまさきが痛くなったことはありませんか。ひどい場合は指がむらさきいろになったり、さらにツメが死ぬこともあります。

これは靴のはき方悪いためです。かかとの部分をぴったり付けてからヒモをしめます。

・はきなれた靴がよいわけ

何キロ歩いてもマメができないほどはきこんだワークブーツの靴底を張り代えたら、とたんにマメができるようになったという話を聞きました。歩き方のくせで、かかとの内側や外側が片べりすることが多いので、張り代えたばかりの靴底では、新品の靴をはくのと同じになってしまうのです。靴ははいているうちに、はく人の足の形や歩き方のくせにじょじょに合ってきて、足の一部のようになってきます。こういう状態になれば歩きやすくマメもできなくなります。ですから、実際にキャンプに行くときまでに、ぜひ履き馴らしておきたいものです。

・上手に歩くために

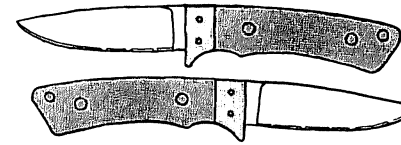
効率よく安全に歩くにはどうしたらよいのでしょうか。私が入ったキャンピングスクールでは次のように教えていました。

はだしでゆっくり歩くとよくわかります。図のα～βまでを同時に接地させます（右足）。このとき体重は左足に乗っています。浮石に乗ったり、何か危険を感じたらすぐに止められる状態です。何もなければ右足に体重を移動せ、Bを外側から内側へじょじょに接地させます。このときも異常を感じたら、すぐに止めます。Cで完全に右足に体重が乗ります。

これを、ゆっくりと練習し、無意識にできるようにします。両足はハの字に開かず、平行またはやや内側に向いていきます。これが野山を歩くときの基本的な歩き方です。パタパタ足音がするのは、歩き方が悪い証拠です。

■刃物

刃物の研ぎについて考える



キャンプで使う刃物は、ポケットナイフに始まり、シースナイフ、フォールディングナイフ、なた、オノ、フルサイズのアックスまで色々です。

ボーイ隊では、ポケットナイフからナタくらいまで、シニアー、ローバーになると、シースナイフ、フォールディングナイフなどで、高度な工作物を作ったりします。

いずれにしてもナイフそのものは全く危険なものではないのですが、正しい扱い方をしないと事故に結びつきます。

野外生活で、ナイフほどシンプルまた、必要不可欠な物はないでしょう。この野外生活用具の原点ともいえるナイフを使いこなせないようでは、一人前のキャンパーとはいえません。

刃の形

刃物の刃は、使用目的によっていろいろな形になっています。その、用途によって形を選びます。ほとんどのスポーツナイフや包丁は刃がややそった形になっています。この反りは、ものを切るときに必要なものなのです。

刃物の手入れ

きみたちの家に砥石はありますか？

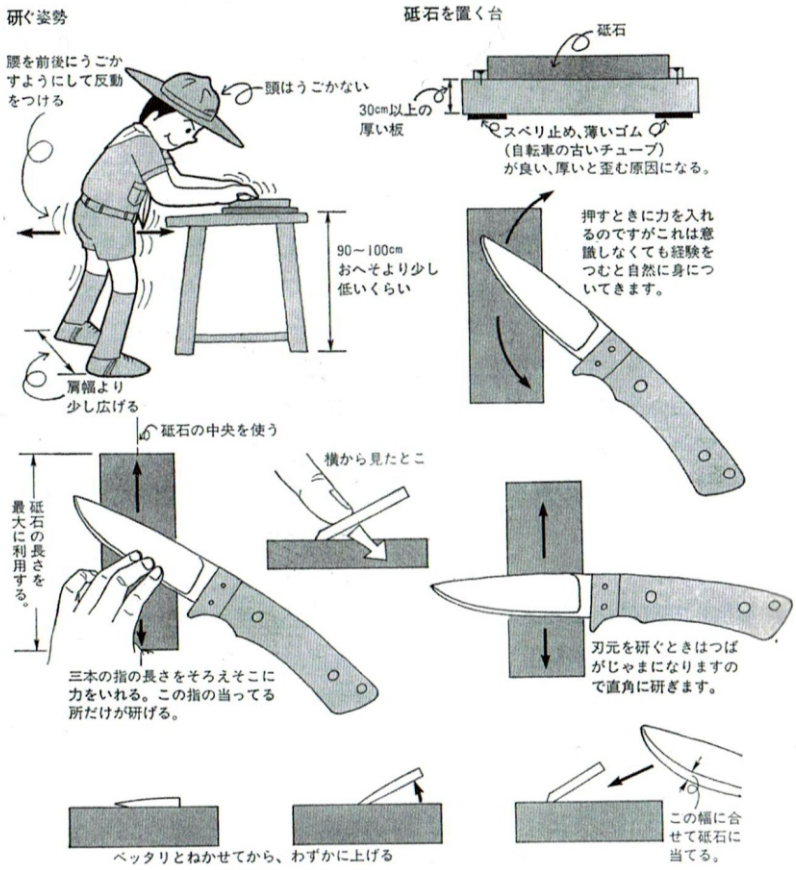
家庭用のステンレスの包丁でも手入れさえよければ20年～30年はちゃんともちます。また、刃物というものは使えば使うほど手に馴染み、身体の一部のようになってゆくものなのです。

ナイフの研ぎ方

資料を集めてみると、これで本当にナイフが研げるのかと思うような説明を見受け、びっくりすることがあります。

包丁でもナイフでも、基本的な研ぎ方は同じです。また、両方とも砥石を置く台がキーポイントになります。完全に固定して手の動きが正しく伝わるようにしなければなりません。

もともと、研ぎというのは難しく、専門家がいるくらいのものですが、ある程度基本を知ってさえいれば、自分流の研ぎ方を身に付けることができます。



ナイフのしまい方

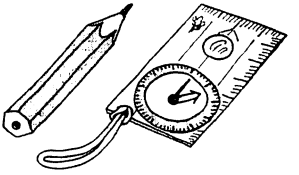
何かを切ったらケースに入れる前に必ずぬれたティッシュペーパーか布でふきます。長い間には木の樹液から、ゴミなどがこびり付いたりします。キャンプから帰ったらクレンザーをかけ水で浸した金タワシ(ボンタスター)等できれいにこすり落とします。完全に水気をふきとってからケースに入れそのケースごと新聞紙で包みしまっておきましょう。新聞紙は外部から入る湿気を防いでくれます。

砥石

包丁を研ぐのなら、雑貨店で打っている中砥を用意します。ナイフならスポーツ店でシャープニングストーンキットを買ってきます。砥石は使う3時間前くらいから水につけておきます。ナイフ用の砥石は、研ぐときにホーニングオイルをたらして使います。

■携帯品

コンパス



コンパスといえば、すぐに思い起こすのがシルバコンパスでしょう。ハイキングやオリエンテーリングをするときにはこれが一番です。

他のメーカーから腕時計のようにとりつけるタイプもでていますが、ハイキングではそう頻繁にコンパスを見ることもありませんし、また歩くときにじゃまになったり、ぶつけたりする心配もあります。

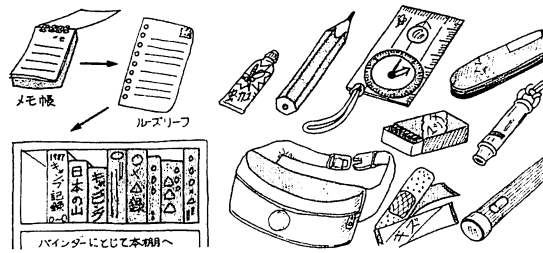
精密さという点では、針式ではなく羅針盤になっているミリタリーコンパスがありますが、振れている時間が長いので、ハイキングやオリエンテーリングには向きません。

日本でよく見かけるシルバコンパスは目盛りが2度ごとと5度ごとがありますが、初心者は2度ごとのものが分かりやすいと思います。シニアー、ローバーになって読図に慣れてくれば、鏡が付いていてコンパクトなコンパスがよいでしょう。このタイプは使い方しだいで、相当正確な読み取りが可能なので、キャンプサイトなどの地図の作成にも向いています。

地図

国土地理院の2万5千分の1の地形図が最も基本的な地図といえます。4cmが1km、1mmが25mとなるので、ベースキャンプで使うのにはよいと思います。しかし、ハイキングや移動キャンプとなると、地図を4、5枚持つことになりますし、クロスベアリングなどで現在位置を確認するときには不便なことになります。こういう場合は、やはり5万分の1の地図の方が便利です。

もうひとつのタイプの地図は民間会社が出しているもので、ハイキングコース、登山コース、水場、コースタイムなどが出ています。これは一日の行動計画を立てるときに大変便利で、しかも最近では、雨に濡れても破れないユポ紙でできているものもあります。ただし、これらの地図は、国土地理院の地図を縮小したり拡大したりして作ってあるため、等高線が部分的にハッキリしないところもあるので、ハイキングなどに行くときには、2万5千分の1の地図もいっしょに持って行けば安心です。



地図入れは、市販もされていますが、一番よいのは図書館で使っているブックカバーです。これは本をスッポリ包める透明なシールのようなもので、大きな文房具店で売っています。裏紙をはがして地図の上と下からシールドします。

筆記用具

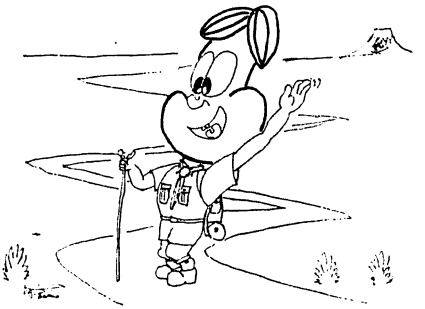
メモ用紙は、上がスパイラル(コイル)でとめてあるタイプのものがよいでしょう。必要なときに用紙を破り取ってもバラバラになりません。このメモ用紙にハイキングの途中経過などを書いておきます。このときは、何時何分に何をしたというような細かいことは書かずに、そのときどきの印象程度を書きとめておきます。そして、夜寝るまえに26穴のバインダー用紙に、1日の行動を記録します。バインダー用紙は少しかさばりますが、家に帰ってから綴れば、そのまま本棚にしまえますし、毎回の行動記録を加えてインデックスを付ければ、立派な記録帳になります。

書くものは、鉛筆が一番よいようです。しかし鉛筆は濡れた紙には書けませんから、メモ用紙は雨が降りだすまえにビニール袋に入れてしまいましょう。

ベルトポーチ

いつも身体につけていたほうが便利なものはたくさんあります。こういう小物はベルトポーチにいれておくのがよいと思います。ただし、重くなる場合は、ズボンのベルトにつけるタイプよりもポーチそのものにベルトが付いているタイプを勧めます。ポーチの中には、救急バンソウコウ、かゆみどめ、号笛(緊急信号に使う)、ポケットナイフ、シャープナー、マッチ、小型懐中電灯、ティッシュペーパー、メモ用紙、鉛筆などを入れておきます。

■雪中キャンプについて



野外生活に関するいろいろな記事を読んでいると、書籍や他で探してきた資料をもとにして、実際には体験していないことを書いているのでは、思わせるものをたまに見掛けます。また、本や資料を出している機関も、実際に行わずに憶測で文書を作り上げてしまうこともあるようです。

このようなことは、ほんとうに危険なことだと思います。

さて、今回は、わたしが、アメリカの「ミネソタ・アウトワードバウンドスクール」で体験したこと、教わったことを元に、雪中キャンプでたいせつなことについてお話したいと思います。

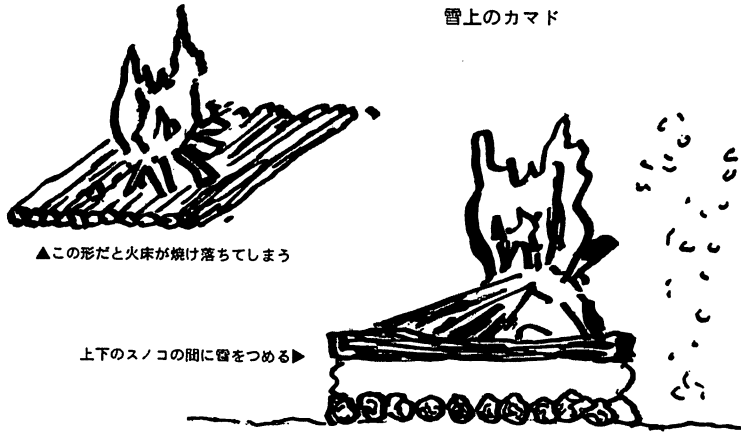
わたしがこの学校のコースに入ったのは12月下旬から1月下旬の1か月間、気温-20℃～-30℃、テントも携帯コンロもなしの生活でした。

以前、結露のお話をしましたが、極端な温度差と湿度の関係でいろいろな物に水滴がつき、着ている物や寝袋はバリバリに凍りつきます。おまけに手足が軽度の凍傷になり、動かすと痛みを感じます。しかも、細かい作業をするときは手袋を取らなければなりませんから、寝袋をまるめるのに5分、靴をはくのに10分と普段では考えられないような時間を要します。

雪の上のカマド

図のようにスノコを2段にして、その間に雪をはさみます。Aの面が焼けてくると雪がとけて焼け落ちるのを遅らせる働きをします。それでもAの面が焼け落ちて穴が開いたら、スノコを組み直して、また雪をつめます。こうすれば、Bの面を焼かずにすむことから、火床が沈まず長期間の使用にたえます。

さて極端な温度差を生じる環境では、マッチを発火させても、軸に結露してすぐに消えてしまいます。手早く新聞紙に火をつけなければなりません。新聞紙がない場合はシラカンバの倒木から剥いだ樹皮を使います。



水について

ナベにギュウヅメにした2000ccの雪は、水になると、なんと350cc、わずか17.5%にまで減ってしまいます。また雪を水にするだけで大変なエネルギーを消費してしまいます。雪をとかすときは、手持ちの水と合わせて火にかけると効果的です。

水筒に入れた水は、その辺に置いたり、ザックのなかに入れておくとカンカンに凍ってしまいます。肌身はなさずふところに入れておき、夜はお湯をいれてユタンポ代わりにします。ですからワンタッチで開く水筒は不向きです。

また、長時間歩いてのどがかわいても、雪を口にいれてはいけません。飲むのは水かお湯です。

衣類など

上着、ズボン、シャツともに厚手のウールのものを着けます。ウールの衣類は厳冬期の基本装備です。

靴下はオーロンの薄手のものの上に厚手のウールの靴下を重ねます。オーロンは湿気を保たないので、ムレが少ないという特長があります。

帽子は、ウールの目出帽。厳冬期のキャンプでは寝るときも、腹、同様に頭も保温しなければなりません。-30℃以下になると、思考力が鈍ってくるので危険です。

ダウンジャケット

エベレストの登るわけではないので、ダウンのズボンまでは必要ありませんが、ジャケットは必需品です。ダウンジャケットはナイロンでできており、熱やひっかきキズに弱いので、プロテクションのために、フードつきのアノラックを上から着ます。ジャケットにフードがついていない場合は、ヤッケのフードが保温の役目をします。

寝袋

厳冬期には、寝袋も二重にする必要があります。内側は、暖かい羽毛、外側は湿気に強いダクロンのものを重ねます。これは、結露の対策でもあります。そして寝袋の下には、厚手のロールマット、発泡ポリエチレンマットを敷きます。ポータブルベッドのように風が下を通りぬけるタイプは向いていません。

靴

わたしは、L.L.ビーンのスノーブーツを使いましたが、登山靴にロングスパッツでも十分でしょう。

雪中キャンプは、初冬のみぞれや雨が降る時期よりも真冬のほうが安全性が高いといえます。いずれにしても、諸君が雪中キャンプをするのであれば、経験豊富な指導者と、緊急避難場所を確保してからでなければなりません。

【野外生活の知識・・・・・連載を終えて】

わたしがキャンプを始めて、20年という時間が流れました。

アウトドアスポーツは、一部の特殊な人間の楽しみからブームになり、今や、一般に定着しつつあります。

この間、キャンプのルール、マナー、エチケットも時代とともに変化してきました。ハイキングトレイルにゴミ箱があっても、ゴミを持ち帰ったり、セッケンも水質汚染を防ぐバイオデグラダブルのものを使ったりなどです。

自然はわずかな汚染に対しては回復力を持っていますが、今日のようにアウトドア人口が増えると、いままで常識だったことでも環境破壊の原因になりかねません。

せまい日本ではなおさらのこと、キャンパーは正しい知識を持ち、自然と上手に接するべきです。

自然にとって、人間にとって何が好ましいかを真剣に考えなければなりません。

「そんなに自然を大切にしたいのなら、キャンプなんかしなければいい」などといわれそうですが、わたしはそうは思いません。

人間と自然との接点が、キャンプ場やハイキングトレイルだと思います。人間は自然の中で、自身がいかに無力な生き物かを知るべきだと思います。

自然は偉大な師です。そして万人をすべて平等に扱います。安易な妥協は決して許しません。自然に真正面から取り組み、努力した人間だけに、その美しさや活動の楽しさを教えてくれるのです。

長い間、ご愛読いただいた「野外生活の知識」は今回をもって一応終わらせていただきます。

最後になりますが、いたずらに「冒険」とか「挑戦」とかの言葉を使わず、目的と能力に応じたキャンプ、充実した豊かな時を過ごすキャンプ、意義のあるキャンプを楽しんでいただきたいと願っています。

月刊誌『スカウト』昭和62年12月号　山田邦夫